
TORU 史上最強の悪ガキ

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T O R U 史上最強の悪ガキ

【Nコード】

N O 5 9 6 F

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

アタシの名前はエンジェル。おとめ座スピカ星系から来た侵略者。敵対するうしかい座アークツール星系との地球侵略の戦いの中で、地表に落下。矢田通という少年に瀕死の重傷を負わせてしまう。何とかアタシの血を輸血して助かった通君は、実はとんでもないケンカ大好き人間だった。そんな通君を巡り、やがてアタシ達とアークツールス人の戦いが始まる。

アスタロトの逆襲をくっつけました。

第一章 アタシとあいつの出会い

天使。普通アタシ達のことを地球人はそう呼ぶ。

聖書とか言う、超ロングベストセラーに出て来る神の使いと間違えられたのだ。

あつ、アタシの名前はエンジェル。

年は地球人に換算すると、17歳つてところ。

父と母は、お調子者で、地球人が神の使いと思っている「天使」という名を、アタシにつけてしまったのだ。

全く、紛らわしい。

そんなアタシ達は、地球人の言うおとめ座スピカ星系から来た、所謂異星人なのだ。

アタシ達と対立する、うしかい座のアークツール星系から来た異星人の地球侵略を阻止するためにね。

その戦いは、すでに数千年にも及び、時々地球人にもそれを目撃され、様々な形で神話や伝説の中に登場するみたい。

アークツール星系の異星人達は、聖書に出て来る「悪魔」に良く似ている。

て言うか、彼らが悪魔のモデルなんだけどね。

そんな風貌が災いしてか、地球人は彼らを悪と看做し、アタシ達を正義と考えている。

でも実際はそうじゃない。

只の勢力争いであって、アタシ達も彼らも、地球にとっては侵略者なのだ。

地球では、そんなわけで、異星人の混戦状態が存在していた。でもその戦闘の多くは高次元で行われているので、地球そのもの

にはほとんど影響はない。

アタシ達も、アークツールス人（仮にこう呼ぶことにする）も地球を無傷で手に入れたいから、地球にダメージのある攻撃はしないのが暗黙の了解なのだ。

そんな高度な戦いの中で、ごく稀に高次元から三次元にディメンションダウン（次元降下）してしまう時がある。

それが今のアタシ！

「うわーっ！」

アタシは美少女戦士（自分で言うって嘘臭いけど、天使ってみんな美人でしょ？）なのだ。

アークツールス人の戦士と戦っていて、そのパワーに押され、ディメンションダウンしてしまったのだ。

「きゃーっ！」

アタシは翼があるのも忘れて、突然放り出された地球上空1000Mから、真つ逆さまに地表へ落下して行った。

やばい！

下にはたくさんの地球人がいる！

やっと正気を取り戻したアタシは、羽ばたいて落下を止めようとした。

しかし、時すでに遅く、ブレーキングも虚しく、アタシはそのまま地上に激突した。

幸か不幸か、アタシが落下したのは、誰もいない広場の端だった。

「いったアッ」

アタシ達は結構頑丈にできていて、このくらいならコブができて終わりだ。

ま、地球人を巻き込まなくて良かった。

と、ホッとしたのも束の間、アタシは仰天した。

アタシのお尻の下で、虫の息になっている小さい男の子に気づいたのだ。

「きゃっ！」

アタシはすぐに男の子から飛び退き、容態を見た。
直接激突したのではないようだが、落下した時に私が発した衝撃波を食らってしまったらしい。

その上、アタシが地面に激突して弾んだ拍子に思い切りヒップアタック（恥ずかしい！）をしてしまっている。

出血も酷いし、脈拍も弱い。

「いけない。このままじゃ死んじゃう」

アタシは翼を引っ込めて、助けを呼びに走り出した。

アタシが落下したのは、学校らしかった。

「おい、何だ、あの子？」

アタシの格好は、もう「天使」そのもの。

学校中の生徒が窓からアタシが走って来るのを見ていた。

「何だ、あの格好？ 天使みたいだな」

「うるさいわね！ 授業中よ！」

ショートカットの、可愛いけどきつそうな目の女の子が注意した。

「すげエ可愛いけど、ちょっと危なそうな感じだな」

「病院から逃げて来たのかな？」

「新しい宗教の勧誘じゃないの？」

もう皆さん、言いたい放題。冗談じゃないわ！

アタシはもうすっかり危ない少女にされてしまい、あの男の子と共に救急車に乗せられてしまった。

「ちょっと、話聞いてよ！」

アタシは音声システムを地球人モードに切り替え、救急隊員に訴えた。

「はいはい。大人しくしてね。でないと、薬で眠ってもらおうよ」

隊員の誰一人として、アタシをまともな人間に見てくれない。

服装が怪しいのはわかるが、話くらい聞いて欲しい。

「もう…」

アタシは話すのをやめ、静かにした。
途端にけたたましいサイレンの音が耳に飛び込んで来た。

一方、学校の方では、あの男の子のクラスメート達が集まって話をしていた。

その中の男の子の1人が、

「あの天使もどきの子に通がぶつ飛ばされたらしいぜ」
通というのが、私のお尻の下で倒れていた子の名前だ。
しかし酷い誤解・・・でもないか。

あの子に怪我させたのは、アタシだもんなア。

「何で？」

とショートカットの女の子が尋ねた。

さつき「授業中よ！」と言った子だ。

「きつと嫌らしい事でもしようとしたんじゃないのオ」

男の子達が口を揃えて言うと、

「まっさか。通はそんな奴じゃないよ」

とショートカットの子は反論した。

すると男の子の1人が、

「何だよ、大田、やけに通の肩持つじゃねえか」

「うつるさい！」

大田と呼ばれた女の子は、キツとして男共を睨みつけた。

彼女は大田美津子ちゃんだ。

どうやら通君とは関わりが深いらしい。

かなり気が強いのが、顔に出てる。

口ではそんなことを言いながら、本当は通君のことが心配なのか、
「でも何であいつ外にいたんだろっ？」

「いつものように早弁すませて、早いお昼寝してたんじゃないの？」

と口を挟んだ男の子は、ちょっとアタシ好みのイケメン。

この子は竹森信一君。美津子ちゃんは、信一君を見て、
「天罰が下ったのね。全くどうしようもない奴」と冷たいお言葉。

すると、信一君の隣にいた「私可愛いでしょ光線」出しまくりの三つ編みの女の子が、
「でも何だか心配だわ。あのブロンドの女の子、危ない目をしてい
たから」

と言った。

この子は残念な事に信一君の彼女、宮田香ちゃん。

信一君は香ちゃんを見て、

「美人に悪い人はいないよ」

「そうかしら」

「だから君もいい人さ、カオリン」

「まア、嬉しいわ、信君」

この二人、いつもこんな調子で周囲の人間の背筋をゾツとさせて
いるらしい。

でも美津子ちゃんは心配そうだった。

アタシのせいだよなア。

アタシ達はまもなく近くの救急病院に到着し、通君はストレッチ
ヤーに載せられて手術室に運ばれた。

「ご家族の方はこちらでお待ち下さい」

「えっ？」

アタシは危ない女から、いつの間にか通君の家族に「昇格」して
しまっていた。

もう、どうにでもなれってエの。

（何だよ？ 何でアタシがこんなところで、全然見ず知らずの男
の子の手術が終わるのを待っていなきゃならないのよ！？）

アタシはムツとしてソファに座った。

すると看護師の1人が走って来た。

「貴女、血液型何型ですか？」

唐突にそう切り出された。アタシはポカンとして、

「はっ？」

と素っ頓狂な声で応じた。

看護師はアタシがふざけていると思ったのか、

「真面目に答えて下さい！ 時間がないんです！ 何型ですか？」
と怒鳴るように尋ねた。

アタシは苦笑いして、

「知らないんですけど」

「知らないイ？ とにかく、検査させて下さい。患者の血液型がR
HマイナスAB型で、血液のストックが足りないんです」

「はア」

アタシ達には血液型は一種類しかない。

地球人の言う、RHマイナスAB型。

ただ、その時のアタシは、地球人の血液型のことを知らなかった
ので、答えられなかったのである。

あっ！

でもまずい！

アタシの血液なんか輸血したら、通君どうなるかわからない。

前にも言ったように、アタシ達はとても頑丈なのだ。

そんなアタシの血を通君に輸血したら、副作用で死んでしまうか
も知れないのだ。

どうしよう？

でもアタシがそんなことを考え込んでいるうちに、病院の人達は
テキパキと仕事をこなし、アタシはボンやりしている間に血を抜か
れていた。

それも 400ccも！

普通こんな美少女からそんなに血を抜くか？

「良かった。家族の方に、同じ血液型の人がいて」

と医師は嬉しそうに言っていた。

アタシは頭痛がして来た。

どうやら通君の手術は順調らしい。

アタシも一安心。

何しろ「天使」が人を殺してしまつたら、シャレにならないからね。

でも副作用が心配だな。

「？」

そこへアタシより背の高い女の子が走つて来た。

どうやら通君の妹さんらしい。

後で知つたことだけど、通君と妹さんは二人きりで暮らしているのだそうだ。

ご両親は交通事故で3年前に亡くなっている。

ただ、遺産がそれなりにあるので、通常の生活には困らないようだ。

「あのオ、どちら様ですか？」

妹さんは、あからさまに怪しい服装のアタシを見て尋ねた。

アタシは作り笑いをして、

「あ、あの、アタシ、エンジェルって言います。貴女は？」

「私は矢田通の妹の久美子です。兄とはどういうご関係なんですか？」

久美子ちゃんは訝しそうな目でアタシを見た。

アタシは苦笑いをして、

「えっと、アタシ、たまたま貴女のお兄さんが倒れている所を通りかかって、救急車を呼んでもらつてですね……」

「まア、そうだったんですか。ありがとうございました」

久美子ちゃんは通君とは似ていず、美人だ。長い髪をポニーテールにしている。

制服からして、「中学生」のようだ。

でもアタシも我ながら凄い嘘つき。

通りかかったって…。

はア。

「エンジェルさんて変わった服を着てらっしゃいますけど、何をされてる方なんですか？」

やっぱり。

言われると思った。

アタシは咄嗟に、

「ハハハ。アタシ、女優の卵なの。芝居の稽古の休憩中だったのよ。もう戻らないといけないから、失礼します」

アタシは呆然としている久美子ちゃんを残し、病院を後にした。

第二章 選ばれし者 矢田通？

アタシ達が通常いるのは、第五次元の絶対空域と呼ばれているところで、まア言ってみれば地球人が思い描いている天国のようなところだ。

アタシはこのたびの不始末を報告するため、恐る恐る我が軍の司令官であるミカエル將軍のところに行った。

ミカエル將軍のいるところは、お城と言うとわかり易いと思う。その一番高いところにある部屋に將軍はいた。

「地球人にお前の血を輸血したのか…」

將軍は顔こそ優しい感じだが、ひとたび戦場に出れば、まさしく鬼神の如き強さで戦う。

アタシも將軍の強さは十分承知していたので、どんなに恐ろしい目に遭うのかと内心ビクビクしていた。

「可能性は二つある」

「はい…」

ミカエル將軍は椅子から立ち上がった。

アタシはギクツとした。

しかし將軍はアタシを穏やかな目で見下ろし、

「その地球人は地球上に並ぶ者のいない強さを得るか、副作用が起こつて死んでしまうか、だ」

「は、はい」

アタシは副作用が起こる確率が高いを考えていたが、將軍にそう言われて余計に怖くなった。

將軍はアタシに近づき、

「エンジェル、その地球人を監視するのだ。死んでしまったらそれまでだが、もし死なずにすんだとなると…」
と言ひ添えた。

アタシは將軍の言わんとすることを察して、

「連中がそのことに気づき、地球人を使って戦局を有利に展開することが考えられますね」

アタシの返答に満足されたのか、ミカエル將軍はニツコリして、「そのとおりだ。私はそれを危惧している。もしそうなったら、地球人全体を我々の戦いに巻き込みかねん。それだけは避けんとな」

「はい」

アタシはいつになく真剣な表情で將軍を見た。

その頃当の本人である通君は、もうすっかり元気になっており、個室のベッドに移されていた。

もう点滴すらしていない。

ああ、アタシ達の血って、まさしく奇跡の血なのね…。

「驚いたわ、お兄ちゃん。最初は重体だって聞いて、もうどうしようかと思ったのよ」

ベッドの脇の椅子に座っている久美子ちゃんが嬉しそうに言った。ところが通君はムスツとして、

「俺だって驚いてるよ。何しろ、いきなり空の上から天使みたいな変な女が落ちて来てさ。俺もう死んだなって思ってたら、今はもう死ぬどころか、どこも痛くねえんだもん。昔ケンカして出来た傷も、全然痕が残ってねえしよ。どういふことなんだろうな？」

「フーン、そうなの」

久美子ちゃんもよもやその「天使みたいな変な女」が、「自称女優の卵」と同一人物とは思うまい。

あーあ。

通君は久美子ちゃんが心配していたことなどまるで眼中にないかのようにニヤリして、

「ま、それはともかく、こうしてりや何日か学校サボってここで呑気にしてられっから、いいかな」
「とんでもないことを言い出した。」

久美子ちゃんが呆れて何かを言おうとした時、

「何考えてるのよ、あんたは!？」

と美津子ちゃん、香ちゃん、そして信一君が病室に入ってきた。
通君はビクツとして、

「お、お前ら……。何しに来たんだよ？」

「何しに来たはないでしょ？ 折角お見舞いに来てあげたのに！」

美津子ちゃんは病室だということも忘れて大声で言い返した。
通君もムカツとして、

「誰が来てくれって頼んだよ!？」

「何ですって!？」

この二人は寄ると触るとこの始末のようだ。

ま、ケンカするほど仲がいいって言うからね、地球では。

「まアまア、美津子さん。おかげ様で兄は何ともないようです。今日にでも退院できるらしいので」

と久美子ちゃんが割って入った。

さっすが、タイミング抜群の仲裁である。

美津子ちゃんは通君に疑惑の眼差しを向けて、

「ハハーン。実はかすり傷程度だったのに、わざと重傷のフリしてたのね？」

「そんなことしてねエよ！」

「じゃあどうしてそんなに元気なのよ!？」

「俺にだってわからねエよ！」

美津子ちゃんは呆れ果てたのか、クルツと背を向けると、

「こんな奴のお見舞いに来ようなんて思った私がバカだったわ。帰るわね」

と病室を出て行ってしまった。

香ちゃんが、

「もう、美津子も矢田君も、素直じゃないんだから」

「俺は素直だよ。あいつがひねくれてるんだ」

通君はムカツとして言った。

香ちゃんは困った顔で、

「じゃ、私達も帰るわね」

「通、また来るよ」

と信一君。

通君は肩を竦めて、

「多分明日はもう家にいるよ」

「だいいいな」

信一君はニヤリとして香ちゃんと病室を出て行った。

それと入れ替わるように、アタシは病室にスツと入り込んだ。

今度は地球人の女の子らしい服装をしてね。

「あ、貴女はあの時の女優さん！」

と久美子ちゃんがアタシに気づいて叫んだ。

通君もアタシを見て、

「あ、おめえはあの時の天使女！」

「えっ？」

キョトンとする久美子ちゃん。

アタシは慌てて通君がそれ以上まずいことを言えないように、

「アハハ、お元気イ？」

と通君に近づいて手を握った。

すると通君は熱湯にでも入ったかのように顔を真っ赤にして、

「な、何するんだよ！？」

とアタシの手を振り解いた。

何だ、こいつ、見かけによらず、超純情？

ま、取り敢えず誤摩化せて良かったわ。

「何しに来たんだよ？」

冷たい態度の通君に事情を知らない久美子ちゃんは、

「お兄ちゃん、命の恩人のエンジェルさんにそんな言い方しちゃ失

礼でしょ！」

「命の恩人？」

今度は通君がキョトンとした。

アタシは苦笑いした。

確かにそうかも知れないが、瀕死にしたのもアタシだから、「命の恩人」と言われるのは何となく気恥ずかしい。

「事情を説明に来たんだ」

「事情？」

通君と久美子ちゃんは顔を見合わせて、次にアタシを同時に見た。

アタシはベッドの足下に立って、

「アタシがこれから話すこと、どれほど信じられない話でも、とにかく最後まで黙って聞いてちょうだい。いいわね？」

通君と久美子ちゃんは何が何やらよくわかっていないようだったので、アタシはかまわず話し始めた。

何故アタシがこんなことをするのかから、アタシの正体、そして通君がどうして急激に回復したのかまで。

「どう？」

通君と久美子ちゃんは再び顔を見合わせた。

「おめえ、頭大丈夫か？」

「な、何言ってるの！ アタシはそういうのじゃないわよ。これ見なさい！」

百聞は一見に如かず、と考え、アタシは翼を広げた。

通君と久美子ちゃんはまさしく息を呑んでいた。

「て、天使！ 天使よ、この人！」

「……」

アタシは翼を引っ込めて、

「これでアタシの言ったこと、信じてくれる？」

「あ、ああ……」

通君はまだ呆然としたままで応えた。

第三章 不死身の証明

アタシ達と敵対しているアークトゥールス人は、五次元の別の絶対空域にいた。

そしてまずいことに通君の存在を察知していた。

アークトゥールス人の城は、どちらかと言うと黒を基調とした不気味な造りで、その一角に軍の長官であるサタンはいた。

よく宗教画に登場するサタンは、まさしく彼がモデル。良く描ける、という出来だ。

「地球人に連中の血を輸血したら、戦闘計数が飛躍的に増大した、か」

サタンは真つ黒な椅子に座り、部下のアスタロトからの報告を受けていた。

彼は細身の美青年で、サタンの妻リリスの弟だ。公私共にサタンをサポートする立場である。

「はい。これはもしかすると、我々にも同じことが起こせるかも知れません」

「地球人を使つて強力な戦士を生み出し、一気にスピカ人（仮にこう呼称する）を駆逐できるということか」

サタンはそう言いながら腕組みした。

彼はそのような作戦で地球人を戦争に巻き込むことを望んではない。

しかしアスタロトは違っていた。

「そうです。先に手を打てば、奴らが同じことを始める前に戦況は一変し、我が軍の勝利は確実なものとなるはずです」

サタンはアスタロトを見たままで何も言わない。

アスタロトもサタンがこの作戦を良く思っていないことを見抜いている。

「失礼致します」

アスタロトはサタンが何も言わないのを「了承」と解釈することにし、その場を立ち去ってしまった。

「何をするつもりだ、アスタロト……」

サタンはそう呟き、目を伏せた。

「地球を守るための大ゲンカ？」

通君はアタシの説明をそう理解したらしい。

アタシは苦笑いして頷き、

「そう。アタシ達と争ってる、アークトールス人で奴らが、貴方と同じ人間を作り出すために動くはず。そうになると、地球人は一人残らずこの戦いに巻き込まれることになるわ」

「フーン」

通君は腕組みした。

「何か今一つピンと来ねえな。本当に俺、そんなに強くなったのか？」

「試してみる？」

アタシはベッドの脇のワゴンの上にあった果物ナイフを持ち、通君の胸に突き立てた。

「キヤーツ！」

と久美子ちゃんが叫んだ。

「あれ？」

通君は刃がねじ曲がってしまったナイフを見て啞然としていた。

アタシはナイフを彼に手渡し、

「これでわかった？ 貴方の身体は、この地球上の何よりも硬くなつたのよ。不死身になったの」

「不死身？」

通君はしばらくキョトンといていたが、やがて大笑いを始めた。

「よし、こうしちゃいらねえエ！」

彼はベッドから飛び出した。

アタシは意表を突かれて、

「ちょっと、何する気？」

すると通君は非常に嬉しそうな顔で、

「決まってるんだろ。ケンカしに行くんだよ。俺のこと狙っている奴らが、この辺りにウジャウジャいるんだ。全部まとめてぶっ飛ばしてやるぜ」

と言い放った。

アタシは仰天した。

「その力をそんなことに使ったりしたらダメだよ！」

「うるせエよ」

通君は風のような速さで病室を飛び出して行った。

「お兄ちゃん！」

「通！」

久美子ちゃんとアタシは通君を追いかけようと病室を出た。

しかし彼はすでに廊下にもいなかった。

「くっ……」

不意を突かれなければ、アタシにも追いつけたと思っていたが、通君から感じられたパワーは、アタシのそれを圧倒するものだった。

不意を突かれていなくても、追いつけなかっただろう。

悔しいけどね。

「エンジェルさん、どうしよう？」

久美子ちゃんは半泣き状態だ。

アタシも泣きたかったが、

「通のパワータイプはわかっているから、それを追ってみるわ」

とポケットの中から小型のレーダーを取り出し、すぐに通君のパワーを追跡した。

「こっちょ！」

アタシはそう言いながら走り出した。

「あ、待って下さい、エンジェルさん」

久美子ちゃんも走り出した。

あのバカ、ホントに何も考えていないんだから！

アタシは無性に腹が立った。

「とにかく、この格好じゃまずいな」

通君は手術着のままだったのを思い出し、周囲を見渡した。

「ちょうど運良く（　）と言っていいのかどうか　）、近くを不良共

5人が歩いていた。

「ラッキー！　あいつらから頂こう」

通君はバンと駆け出し、5人の前に出た。

5人はいきなり目の前にケンカバカが現れたので仰天した。

「や、矢田通！？」

通君はその街では超有名なケンカ屋で、同年代の不良はもちろんのこと、チンピラやヤクザまでが名前を聞いただけでビビってしまうほどの男である。

そんなのが不死身の身体を手に入れたのだから、地球が危ないかも知れないくらいだ。

「おーや、俺の事知ってんのオ？　じゃ、話は早いや。ちょっとツラ貸してもらおうか」

「は、はい」

5人共通君より身体は大きいし、強そうに見えるんだけど、酷く怯えていた。

通君、普段どんな奴なんだろ？

それほどの強さがなければ、アタシのヒップアタック（　恥ずかしいからこの話題にはもう触れない！　）で死んでいたろうし、仮に助かったとしても、輸血した時に副作用で死んでいたはず。

「冴えねエ服来てる奴らだなア。さっきの方がマシかも知れねエ」と通君は不良共から奪った制服を着ながら言った。

彼は高校生にしてはチビッ子なので、袖を捲り、裾を上げてようやくちょうどいい長さだ。

「まア、仕方ねエか」

通君は気を取り直して走り出した。

アタシと久美子ちゃんは、病院のそばで美津子ちゃん達に出会った。

アタシと久美子ちゃんて手短に事情を説明したが、美津子ちゃんは今信用せず、信一君は香ちゃんとアメリカンジョークが滑った時みたいに肩をすくめた。

「もう、信じなくてもいいから、アタシ達と一緒に来て！」

「お願いします、美津子さん！」

美津子ちゃんもアタシの言葉は全然信じていないようだが、久美子ちゃんの真剣な眼差しには何か感じるものがあつたようだ。

「久美子ちゃんがそこまで言うのなら、行ってみるわ」

「ありがとう、美津子さん」

というわけで、アタシ達5人は通君が向かっている方角へと走り出した。

その通君は、すでに決闘の場所である河川敷に到着していた。

近くには大きな鉄橋がある。

「へへへエ、逃げねエで来たか、矢田ア！」

と金属バットを担いだ、髪の毛をハリネズミのように尖らせた男が言った。

通君はニヤツとして、

「そつちこそ、俺の忠告を聞いて、100人以上頭数揃えたらうな？ 2ケタ程度じゃ、ウォーミングアップにもならねエぞ」

金属バットの男もニヤリとして、バットを高々と真上に上げた。するとそこらじゅうから、うじゃうじゃらと虫がわくように、目つきの悪い、髪の毛ヒカンにした奴、金髪にした奴、真っ白に脱色した奴、鼻の両脇にピアスを葡萄のフサみたいにつけている奴、メリケンサックした奴、アーミーナイフ持った奴、ハンマー担いだ奴など、もう通君絶対に殺されるっていうような連中が現れた。

しかし、それほどの危ない連中の大群を目にしても、通君は全く

動じていなかった。

「ほオ、いるいる。楽しみだなア」

通君は好物のケーキを目の前にした小さい女の子のように嬉しそうに笑った。

「やれっ！」

金属バットの男が通君を指し示した。

「うおーっ！」

「だーっ！」

「おりゃー！」

「死ねーっ！」

「どりゃーっ！」

とにかくありとあらゆる奇声を発して、不良共が蜜に群がる蟻のように通君目がけて突進した。

「へへエ、今日の俺はちよつと違うぜ」

と通君が前に出ようとした時、河原の石の下からビーンとロープが現れた。

「うわっ！」

通君は見事にそれに足を引っ掛けてしまい、前のめりに転んだ。

金属バットの男が高笑いをして、

「バカめ。てめえのような奴とまともにやり合う程、俺はお人好しじゃねエぜ」

「このヤロウ、きたねエぞ！」

通君は背後に潜んでいた大男3人に上から押えつけられた。

「汚くてもいいんだよ。ケンカつてのはな、勝ちやいいんだ、勝ちやアよ」

金属バットの男は、病的な顔をしてゲラゲラと笑った。そして、

「ぶっちめろ！」

と叫んだ。

「うおーっ！」

通君に群がった蟻共は、兇器攻撃で通君を滅多打ちにしていた。

「へへへエ、これでここいら辺のナンバーワンはこの俺様だ」
金属バットの男は、通君の方に歩き出した。

「もうそのくらいにしておけ。本当に殺しちまったらまずい」
「誰を殺すって？」

金属バットの男はギクツとした。

彼の顔中に嫌な汗が噴き出した。

「バ、バ力な……。まだ口が利けるのか……」

「口が利けるだけじゃねエぜ！」

と通君の声がしたかと思うと、群がっていた連中が、まるで竜巻に巻き込まれたように空中に跳ね飛ばされ、川に落下した。

「な、何イ！？」

通君は服こそボロボロだったが、顔も身体も全くの無傷で立っていた。

バット男は、顎も外れんばかりに驚いた。

「ど、とういうことだ？ 何でなんともねエんだ？」

何が起こったのか全く理解できないバット男は怯えまくっていた。

通君はフツと笑い、

「昨日までの俺なら、今ので参ってたかもな。でもおめえら、つくづく運がねエな。今日の俺は、アメリカ軍と戦ったって負けやしな
いぜ」

「……」

通君はボロボロになった制服を脱ぎ捨てた。

「この服は、通りすがりの善良な奴から頂いたものだ。だからこの服に関しちゃ、怒ってねエ」

「ハ、ハイ……」

バット男は、齒をガチガチ言わせ、直立不動のままである。

「でもよオ、やっぱケンカは勝たなきゃ意味ねエよな！」

「うわーっ！」

バット男は通君の右ストレートで、30メートルほど飛んで、ボシャンと川に落ちた。

「はい、おしまいと」

通君がニツコリ笑って言った時、アタシ達は現場に到着した。
信一君がヒュウと口笛を吹いて、

「呆れた奴だな。少しは加勢しようと思ったのに、全員片づけ
まったのかよ」

アタシも久美子ちゃんも香ちゃんも呆然。

でも美津子ちゃんだけは反応が違っていた。

「こらアツ、通！ 手術したばかりなのに、何てことしてたのよ！」
「うるせエな。おめえには関係ねエだろ」

通君は美津子ちゃんに近づきながら言い返した。

「何よ、その口の利き方は！？」

と美津子ちゃんは河川敷に降りて行った。

その時だった。

「ああっ！」

アタシはその場に突然現れたアークツールス人に絶句した。
テレポートしたっていうのか。

「何だ、てめえらは？」

通君はサツと美津子ちゃんを庇うようにしてアークツールス人に
言った。

アークツールス人は、「悪魔」と全く同じ姿をしているので、一
見して悪者って思われてしまう。

ま、いい人もいるんだろうけどね。

「お前がスピカ人の血を受けて、超人化した地球人か？」
とアークツールス人の1人が言った。

通君はそいつを見上げて、

「だったらどうだって言うんだ？」

「我々に協力しろ」

「協力だア？」

そうか、新たに超人を生み出すより、通君を手に入れる方が早い
って考えたのか。

ヤバいぞ、こいつは。

「通、一体こいつら何なのよ？」

と美津子ちゃんが尋ねた。

通君はアークツールス人を睨んだまま、

「説明はこいつらを片づけてからゆつくりしてやるよ」

「我々を片づけるだと？ バカな事を…」

とアークツールス人の1人が言った時、通君の右フックがその左脇腹にめり込んでいた。

ほらほら、ケンカする時隙見せちゃダメだよ。

「ウゲエッ！」

そのアークツールス人はのたうち回った。

もう1人はハッとして、

「貴様アッ！」

と通君に掴みかかった。

しかし通君はそれをサッとジャンプしてかわし、そいつの首に右の蹴りを叩き込んだ。

「ぐはっ！」

そいつはドドーンと河原に叩きつけられた。

もう1人がまた立ち上がり、

「貴様、我々に協力せんということか？」

「今頃気づいたのかよ、ボケが。俺は他人に指図されんのが大嫌いなんだ。わかつたらサッサと消えろ」

と通君は言い返した。

するとアークツールス人はニヤリとし、

「わかった。消えよう。但し、土産つきでな」

「何？」

「きやーっ！」

アタシ達が動くより一瞬早く、アークツールス人2人は、美津子ちゃんを捕え、上空に飛び上がった。

「しまった！」

アタシは2人を追おうとしたが、それより先にアークツールス人達はレポートしてしまった。

「美津子オッ！」

通君が叫んだ。

そして彼はキツとしてアタシを睨み、

「やい、天使女！ 俺にはああいうことはできねエのか？ 空飛ぶとかパツと消えるとか…」

「できないよ」

「そうか…」

アタシは通君に近づいて、

「とにかく彼女を助けに行かなくちゃ」

「ああ、そうだな…」

アタシはニヤリとして、

「やっぱりね。何だかんだ言って、彼女の事好きなんですよ？」

「バ、バカ言うな。ただあいつを助けねエと化けて出そうでさ。一生眠れなくなりそうだしな」

と通君は少し照れ臭そうに言った。

アタシはクスツと笑った。

久美子ちゃんと信一君と香ちゃんは、呆然としてままでアタシと通君を見ていた。

第四章 第五次元へ

美津子ちゃんはアスタロトの前に引き出されていた。彼女は気を失ったままだ。

「何だ、この女は？」

とアスタロトは美津子ちゃんを連行して来たアークツールス人に尋ねた。

こいつはアスタロトの部下のようだ。道理で卑怯な事を考えるはずだ。

「あの地球人の女です。この女を使って奴をおびき寄せ、我が軍の洗脳マシンで操り人形にしましょう」

「なるほど」

アスタロトの顔が狡猾さ丸出しになった。

美青年なんていう表現からは程遠い顔だ。そして、

「しかし、来るかな？」

「来ますとも。地球人は情に流され易い種族です」

と言ったアークツールス人の顔も、狡猾さ丸出しだ。アスタロトは元の美青年の顔に戻り、

「わかった。うまくやれ」

「はっ！」

部下はニヤリとして深々と頭を下げた。

アタシ達は鉄橋の下で作戦会議を開いていた。

「奴らが美津子を連れ去ったのはどこだ？」

通君が石を川に投げ込みながら尋ねた。アタシはそんな通君の苛立ちを心の底から申し訳なく思っていたが、今そんなことをクドクド謝ってみても仕方がないと考え、

「五次元の絶対空域。そこに行くにはちょっと手間がかかるよ」

とごく冷静に答えた。すると通君はアタシを睨んで、

「手間だアツ？ もつとサツと行ける方法はねエのかよ！？」

と怒鳴り散らした。アタシはそれでも冷静に、

「無理だね。アタシらの仲間がいるところへならすぐに行けるけど、奴らの空域は、探知するのに時間がかかるんだ。絶対空域って言うのは、常に移動しているからね」

「フーン」

通君はさすがにいくら焦っても仕方ないと気づいたのか、怒鳴るのをやめて河原の石の上にしゃがみ込んだ。信一君が、

「急がば回れって言うからな。エンジェルさんの仲間がいる所に一旦行つて、そこから美津子さんがいる所を探した方が早いんじゃないか？」

と助言した。信一君、ナイスフォロー。アタシは通君を見て、

「そうだよ。まずはアタシ達の軍の絶対空域に行つて、軍の探知レーダーで探するのが一番確実さ。取り敢えず、アタシらの軍の城に行こう」

と意見した。今度は久美子ちゃんが、

「でも、大丈夫なんですか？ 帰つて来られるんですか？」

と不安そうに口を挟んだ。香ちゃんも、

「そうね。心配よね」

と言った。すると通君は、

「帰つて来られるかどうかなんて、美津子を助けてから考えりゃいいことだ。今はあいつを助ける方法だけ考えりゃいいんだよ」

「それはそうなんだけど…」

久美子ちゃんと香ちゃんは異口同音に言った。アタシは、

「大丈夫。アタシの軍の将軍、ミカエル様に話せば、助けて下さるよ」

「ミカエル？ そいつ、つえエのか？」

と通君は突拍子もない事を聞いて来た。アタシは半ば呆れて、

「強いわよ。貴方の1万倍くらいね」

「じゃあまずそいつで肩ならししてから、アーク何とかの城に行く

か？」

「バカな事言わないでよ、もう！」

アタシは本気で怒った。

「ミカエル様とサタンは、実力ではほぼ互角と言われているわ。でも2人が戦ったら、いくら高次元の戦いでも、地球に影響が出かないから、直接対決は避けているくらいなのよ。どちらも貴方が勝てる相手じゃないわ」

しかし、通君にはアタシの忠告は全く通じていなかった。

「じゃあ、美津子を見捨てるって言つのかよ？」

通君も通君なりにいろいろ考えているのはわかるのだが、どうもチグハグでいけない。

「そうは言つてないわよ。だからどうすればいいのか、ミカエル様に相談するのよ！」

「なるほど」

全くこの男、本当に理解してくれたのか、心配だわ。

美津子ちゃんはサタンの城の地下牢に幽閉されていた。僅かな光が、天井の隙間からこぼれているだけで、ほとんど何も見えないところだ。

（ここはどこなの？ 一体どうなっているのよ？）

彼女は通君が妙な姿の者と戦っているのを思い出した。

「通……」

極限状態の美津子ちゃんは素直になっていた。

そりゃそうだよな。

こんな所で突っ張ったって、何も解決しない。

「助けて、通……」

彼女の綺麗な瞳から、涙が溢れた。

アタシは通君をミカエル様の所に連れて行く事になったのだが、地球人を連れて五次元に飛んだ事がないので、少しだけ不安だった。

「アタシも初めてなんだ。あまり自信がないんだけど」

「なくてもやるしかねエだろ。今更弱気な事を言うなよ、天使女」

と通君は全く動じていない顔で言った。アタシはカチンと来て、

「アタシは天使女なんて名前じゃない！ エンジェル！ 今度変な呼び方したら、只じゃ置かないわよ」

「はいはい」

通君は肩を竦めた。あれ？ 何だか不安がなくなった。

アタシは深呼吸して準備を始めた。

「えっ？」

通君はアタシに両手を握られ、また真っ赤になった。

もしかしてこいつ、美津子ちゃんと手もつないだ事ないのかな？

「何照れてるのよ？ こうしないと、五次元に行けないのよ」

「わかってるよ」

アタシは何となくおかしくなつてクスツと笑い、

「目を閉じて、意識を集中して」

通君は目を閉じた。

アタシは翼を広げて通君を包んだ。

「わっ！」

アタシの身体が輝き始めたので、信一君達はびっくりしてアタシ達から離れた。

「お兄ちゃん！」

「矢田君」

久美子ちゃんと香ちゃんは心配そうに見守っていた。

やがてアタシと通君は、光と共に三次元空間から消えた。

「成功したらしいな」

と信一君がホツとした顔で言うと、久美子ちゃんが、

「でも問題はこれからですよ」

「そりゃそうだけどさ。まア、ここで暗くなつても仕方ないから、家に行こうか、久美子ちゃん」

信一君のお気楽発言に久美子ちゃんは呆れたが、香ちゃんは同意

した。

「そうね。もう夜になるし。矢田君家で待ってましょ」
とニコニコ顔だ。何なんだ、このバカツプルは…。

アタシと通君は、ミカエル様の城の前で気を失っているところを
発見され、ミカエル様の部屋まで運ばれて意識を取り戻した。

「この男が超人化した地球人か」

とミカエル様は椅子に座ったまま尋ねた。アタシは跪いて、

「はい。矢田通と言います」

「よっ！」

通君は右手を上げて応えた。

友達と話してるんじゃないんだぞ！

アタシは彼の頭を引っぱたいて、

「ミカエル様に失礼だぞ！きちんと挨拶して！」

「いつてエな。何だよ、お前まで美津子みたいなことを言いやがつて！」

通君は何が悪いんだという顔をしてアタシを睨んだ。するとミカエル様は、

「まあ良い。とにかく、よく参った、通。サタンの城に行きたいそうだな？」

「ああ。手っ取り早い方法で頼むよ、ミカエルさん」

この男は本当に口の利き方を知らない男だ。

アタシはもう何も言う気力がなかった。

「サタンの城は、ここから地球人流に言くと、約45億キロメートル先にある」

「45億キロメートル？ それ、どれくらい遠いんだ？」

通君はあろうことか胡座をかいて座った。

もう何て奴だ。

アタシは血圧が高くなり過ぎて倒れそうだった。

しかしミカエル様はにこやかな顔で、

「太陽系の惑星の中に海王星という惑星がある。太陽からその星までの距離とほぼ同じだ」

「海王星？ 水金地火木土天海冥…。うわーっ、そんなに遠くなのか？」

本当に理解したんだろうか、この男は。

ちなみに今は水金地火木土天冥海だ。

しかも地球人は冥王星を惑星から準惑星に格下げしてしまっている。

「しかしお前の今のパワーであれば、そこに行き着くのに1時間とかかるまい」

「ホント？ そりやすげエや。どうすりゃいいんだ？」

通君は大はしゃぎだ。

しかしアタシは嫌な予感に襲われた。

（ま、まさか、あれをやらされるのでは…）

その予感は的中した。

ミカエル様はアタシを見てフツと笑い、

「エンジェルと2人、力を合わせれば、一瞬のうちに飛べるようになる」

「えーっ？ この女と一緒に行くのかア？ 何か嫌だな」

と通君は鬱陶しそうにアタシを見た。

アタシはムカツとして、

「それはこっちのセリフよ！」

と言い返した。

ミカエル様は、アタシらのケンカを遮るように、

「我々には特殊な能力があり、自分の力を他人に転移させる事が出来る。つまり、エンジェルの翼をお前に与える事ができるのだ」

「えっ？ 俺に翼？ じゃ、空飛べるの？」

「そうだ」

「ラッキー！ やったア！」

「その代わり、お前は意識のみになり、身体は全てエンジェルにな

る」

「何イツ!？」

通君はアタシを見た。

この男、露骨に嫌な顔をして！

アツタマ来ちゃう。

「嫌なのはアタシの方よ！ 転移中に、アタシの身体に変な事しないでよ」

「誰が!」

アタシと通君はすっかりいがみ合ってしまった。

ミカエル様もさすがに少し呆れ気味だ。

「エンジェル!」

「あつ、はい、申し訳ありません、ミカエル様」

「へへーっ、怒られてやんの」

「うるさい!」

もう、止めどがない奴だ、このチビ助は。

第五章 敵陣突入

アタシと通君は、城の外に出て、転移の準備を始めた。

ミカエル様他、たくさん仲間達が見守っている。

何か照れるな。

「今度は何するのか前もって言えよな。さっきはちょっとびっくりしたからさ」

と通君は小声でアタシに言った。

やっぱりこいつ、超純情なチビちゃんなんだね。

何か可愛くなって来たな。

「今度は何するのか聞かない方がいいと思うな」

「えっ？」

キョトンとする通君にアタシは、

「さっ、目を閉じて」

「あ、うん」

通君は素直に目を閉じた。

さア、アタシもサッサと終わりにして、恥ずかしい思いは少しでも短くてすむようにしなくちゃ。

それにしてもミカエル様ったら、何も城中の仲間を連れて見に来られなくてもいいのに。

「うっ！」

アタシは通君の唇に唇を重ねた。

通君はビクンと動き、目を見開いたが、アタシが目で、

（閉じてなさいよ）

と合図して、もう一度瞑らせた。

アタシは通君の首に両腕をしっかりと巻きつけて抑えていたので、彼は動く事が出来ない。

もしかして、「ファーストキス」を奪ってしまったのかな？

ごめんね、美津子ちゃん。ハハハ。

やがてアタシの身体が輝き出し、スーッと通君に溶け込み、続いて通君の身体が輝き出し、アタシの身体に変わった。

ミカエル様がニッコリして、

「成功したな」

と呟いた。

通君はハッとして自分の身体（　だったところ　）を見て、

「ワッ！　ホントにこんな…。ヒエーッ！」

と大騒ぎした。

ミカエル様は城の遥か前方を指差し、

「この方向にサタンの城はある。心して向かえ、通」

通君（　姿はアタシだけど　）はニヤリとして、

「おう！　ありがとよ、ミカエルさん」

と答えると、もう信じられないような速さで、サタンの城に向かって飛び立った。

「面白い男だ」

ミカエル様は楽しそうに笑った。

その頃、地球の久美子ちゃん達のところは、夜になっていた。

「何か通ってさ、いつも俺達の想像を超えたことするよなア」

久美子ちゃんの手料理を食べ終えて、信一君が言った。

香ちゃんはお皿を片づけながら、

「そうね。矢田君で、何をしても不思議じゃないのよね。あのエンジェルさんの存在だって、矢田君絡みだと全然不自然じゃないんだもん」

「そうだよなア。あいつ、ホントに不自然じゃないように不自然な事やってのけるよなア」

「うん」

香ちゃんはお皿を持ってキッチンで洗い物をしている久美子ちゃんに近づき、

「矢田君は、必ず帰って来るわ。美津子を助け出して」

「香さん…」

久美子ちゃんは泣いていたようだ。

彼女は涙を拭って香ちゃんを見た。

香ちゃんは久美子ちゃんの涙を指で拭い、

「だから泣かないで。絶対に大丈夫だから」

「はい」

久美子ちゃんはやく微笑んで応えた。

香ちゃんもそれに応じて微笑んだ。

「キャホーッ！」

そんな久美子ちゃん達の気持ちを知らないこのお調子者は、実に楽しそうに五次元の空を飛行していた。

こいつ、転移を解いたら一発殴らないと気がすまないよ、全く！

「あつ、あれか？」

遙か前方にサタンの城が見えて来た。

ついに来たのだ。

通君はニヤツとして、

「さアて、大暴れできるぞ。あそこで何しようが、先公もポリも美津子も、誰も口出しできねエからな」

と言った。

こいつ、とことんケンカ好きな奴。

目的は美津子ちゃん救出だってことを忘れてるのかね？

「おっ？」

何て言っていると、早速お出迎えがやって来た。

下っ端のアークトールス人の兵士達だ。

ざっと数えて1000人はいる。

「おうおう、盛大なお出迎え感謝するぜ」

通君はさらに加速し、先発部隊に急接近した。

「おらおら、雑魚共！ 時間稼ぎにもならねエぞ！」

通君のパンチ一発で、数十人が吹き飛ばされた。

こいつ、アタシの転移でまたパワーアップしたらしい。
「うわーっ！」

あれほどいた兵士達が、たちまち蹴散らされて、通君は城に向かった。すると、

「待てーい！」

とさっきの連中より大きい奴が一人現れた。

先発部隊の隊長のようだ。

そいつはニヤリとして、

「さすがに強いな。しかし、このわしはそうはいかんぞ。わしはアスタロト様麾下の……」

と口上を述べ始めたのだが、最後まで言えなかった。

通君（くどいようだが身体はアタシ）の右キックが、股間に炸裂していたのだ。

もう、人の身体使って、どこ蹴ってんのよ！

そいつはもがき苦しみながら、

「ぐおお……。貴様、話を最後まで聞け……」

「バーカ、何か言ってる暇があったら、パンチの一つも繰り出して来いってんだよ」

と通君は、全く血も涙もない裏拳をそいつの顔面に叩き込み、止めを刺した。

隊長は遙か彼方に飛んで行き、見えなくなってしまった。

「よし！」

通君は城の門をパンチでぶち破り、中に入った。

「こらア、こんな雑魚ばっかじゃ身体があつたまんねエぞ！ もっ

と強い奴いねエのかよ！？」

と怒鳴った。

美津子ちゃんは通君の声が聞こえたような気がして天井を見上げた。

「通……？」

（まさか。まさかね。いくらあいつが無茶苦茶な奴でも、こんなわけのわからない所まで来られるはずないよね）

美津子ちゃんは顔を俯かせた。

その時、

「美津子オツ！ 待ってるオツ！ 今助けてやるからなアツ！」
と声がした。

その話し方は通君だったが、声はアタシなので、美津子ちゃんは戸惑った。

「あれは……。でもあの声は確か、あのエンジェルって子の声……」
そうだけど、通君なのよ。

わかってよ、美津子ちゃん。

転移解きたいけど、貴女を救出して城を離れてからじゃないと、危険だからできないんだ。

転移をもう一回するには時間がかかるからね。

「私ったら、何を期待してるのかしら……」

美津子ちゃんは赤面した。

（私、何で通が助けに来てくれるなんて思ってたんだろう？）

もう、美津子ちゃん、素直になりなよ。

さっきみたいにさ。

第六章 狡猾！ アスタロト公爵

「このヤロウ、無視しやがったな！ ならこつちから行くぞ！」

通君は次に城の鋼鉄製の大扉を蹴破り、中に入った。

あのね、アタシの身体、ボロボロにしないでよね。

「むっ？」

そこは大広間になっていた。

その大広間の反対側に、誰かが立っている。

「ようこそ。姿は卑しいスピカ人だが、中身は違う。転移を使っているのかな？ 君が超人化したと言う地球人だね」

立っていたのはアスタロトだった。

こいつのせいで、どれだけ多くの仲間が次元の狭間に落とされたか。

しかも「卑しいスピカ人」とは、何て言い草だ！

アタシが直接ぶちのめしたくなって来た。

「誰だ、てめえは？」

通君はさっきまでとは別人のような口調で言った。

アスタロトはニヤリとして、

「私か？ 私がこの宇宙で一番美しくて強い、アスタロト公爵だ」と耳障りな甲高い声で言った。

その声が大広間の壁で反響して、余計喧しい。

すると通君は腹を抱えて笑い、

「何だ、ニューハーフの貴族か？」

「ニューハーフウ？」

アスタロトは言語システムをフル稼働させてその意味を探っているようだ。

そしてそれが明らかにバカにされている言葉だと悟ったのか、美青年の仮面を脱ぎ捨てて険しい形相になった。

「貴様、私を愚弄しているのか？」

アスタロトの声がより甲高くなった。

通君はますます大笑いして、

「おめえなんか敵じゃねエよ。早くドレスに着替えてカマ踊りでもして来な」

「貴様、私が一番嫌いな言葉を吐いたね！ もう貴様は許さない！ 八つ裂きにしてさらにその上八つ裂きにしてやる！」

アスタロトはヒステリックに叫んだ。

余計それっぽくなっている。

通君はギラツと目を輝かせ（さらにくどいようだけど身体はアタシ）、

「うるせエよ、キンキン叫ぶな、カマヤロウ！」

「それ以上私を侮辱する事は許さない！」

アスタロトの姿が不意に消えた。

ヤバイ！

奴をマジで怒らせちゃったみたい。

「消えた？ でもレポートじゃないみたいだな」

と通君は呟いた。

そうだ。

アスタロトは素早く動いて消えたようにみせているだけだ。

「貴様、この美しく強い私を侮辱したらどうなるか、思い知らせてやるよ！」

「何？」

通君が声に反応した時、アスタロトは突然通君の背後に現れ、背中に強烈なキックを浴びせた。

「うわっ！」

通君は床を滑り、壁に激突した。

アタシの身体、傷ものにしたら、責任とってもらっからね、もう！
「まだ終わらないよ」

立ち上がった通君の後頭部をアスタロトの肘打ちが襲った。

「ぐはっ！」

通君は顔面から床にめり込んでしまった。

ああ、アタシの美しい顔がアッ！ アスタロトはまた耳障りな声で笑い、

「ハハハ！　いくら超人化したと言っても所詮は地球人。私に敵うはずがない」

「そうかな？」

「何！？」

アスタロトが調子づいていると、通君はいきなり立ち上がって、また股間にキック。

もう、下品なんだから！

「グオーッ！」

アスタロトは全く無防備だったので、酷くもがき苦しんでいる。

通君はニヤリとして、

「ヘエ、おめえ、男だったんだ？　悪かったな、思い切り蹴飛ばしちゃってさ」

「貴様アッ！」

アスタロトは涙目で通君を睨んだ。

通君は実に楽しそうに笑い、

「お苦しみのところ悪いんだけどさ、俺ってケンカに勝つのに手段は選ばねエ主義でさ」

うん？　河川敷で不良共と戦った時、相手に「きたねエぞ！」とか言ってたのは誰だっけ？

「どりゃーっ！」

通君はまさに容赦なく、まだもがき苦しんでいるアスタロトのボディを連打した。

「グゲゲーツ！」

アスタロトの顔が青から白に変わり、もう少してKOというところまで来ていた。

「フィニッシュューッ！」

通君のアッパーがアスタロトの顎に炸裂、と思ったら、奴は消え

た。

しまった、今度はテレポートだ。

「くそつ、逃げやがったか！」

通君は周囲を見渡した。

「どこ行きやがった、カマヤロウ!？」

通君はいきり立って叫んだ。

アスタロトは、美津子ちゃんが幽閉されている地下牢にいた。

彼は明かりを灯し、美津子ちゃんに近づいた。

「うつ…」

美津子ちゃんはいきなり光に照らされて、眩しそうにアスタロトの方を見た。

「誰？」

アスタロトはそれには応えずに、

「フッフ。お前を利用させてもらっよ」

と不気味に笑って言った。

「……」

美津子ちゃんは後ずさりして、壁に張りつき、アスタロトを睨んだ。

（通…）

通君は目を閉じ、気配を感じようとしていた。

アスタロトが戻って来たら、間髪入れずに連打を叩き込み、逃げる隙を与えないつもりのようにだ。

しかしアスタロトはあの金属バットの兄ちゃんよりタチが悪かった。

通君の目の前に現れたアスタロトはし、不敵な笑みを口元に浮かべていた。

「そこか！」

通君が突進しようとする、アスタロトは通君の右の方を指差し

た。

「何？」

通君はそちらに目を向けた。

そこにはアークツールス人の兵士2人に腕を掴み上げられた美津子ちゃんの姿があった。

「美津子！」

美津子ちゃんはその通君の心からの叫びに、ついにアタシが本当は通君なのだという事に気づいた。

「通？ 通なのね？」

彼女の瞳から大粒の涙がこぼれた。

通君は再びアスタロトを見て、

「てめえ、どういっつもりだ？」

アスタロトはフツと笑い、

「あの娘を傷つけられなくなったら、大人しくするんだ」

「てめえ……」

アスタロトは勝ち誇ったように笑って、

「ケンカに勝つには手段を選ばない。いい言葉だねエ、地球人君」

「くっ……」

通君はお株を奪われてムツとした。

でもどうするのさ、美津子ちゃんを人質に獲られちゃって。

（エンジェル、聞こえるか？）

と通君の声が、アタシに話しかけて来た。

アタシはビツクリして、

（な、何？ 話ができるの？）

（できるかどうかわからなかったけど、できて助かったぜ。俺から分離しろ）

（何だよ？ 危険だよ）

（このままじゃ美津子も危ないし、俺にも勝ち目がねエ。お前、分離したら美津子を助けてこの城を脱出しろ。あのカマヤロウは俺が何とかする。あの2人のアークツールス人くらい、何とかなるだ

る？」

（でもさ…）」

（迷ってる暇はねエぞ！）」

（わかった）」

通君がじつと動かずにいるので、アスタロトは不審に思ったよう
だ。

「何を企んでいる？」

「別にイ」

通君はすまして応えた。

アスタロトはフツと笑って、

「行くよ、地球人！」

と通君に突進した。

通君は大声で、

「今だ、エンジェル！」

（了解！）」

通君の身体が輝き出したので、アスタロトは足を止めた。

「何だ？」

アタシは通君から分離すると、美津子ちゃんを目指した。

「くっ！ 貴様ら、謀ったな！」

アスタロトの顔がまた険しくなった。

通君はニヤリとして、

「さア、これで心置きなくケン力できるぜ」

と言った。

「美津子ちゃん！」

アタシはアークトールス人の兵士をバチバチと倒して、美津子
ちゃんを救出した。

「エンジェルさん」

「とにかくここを離れるわよ」

「でも通が…」

「大丈夫！ 貴女を安全な場所まで運んだら、アタシが助けに戻る

から」

「ええ…」

美津子ちゃんはそれでも不安そうだったが、アタシはかまわず彼女を抱きかかえると、翼を広げて飛び立った。

「うぬっ！」

アスタロトも翼を広げようとしたが、

「てめえはここで俺のサンドバッグになってりゃいいんだよ！」
と通君のフックを腹に見舞われた。

「ぐはっ！」

「おりゃーっ！」

アスタロトのボディを通君のラッシュ攻撃が襲う。

もはや勝敗は決してかに思われた。

第七章 通 絶体絶命！

アタシは美津子ちゃんを抱えて必死にミカエル様の城を目指した。幸い通君がサタン軍の兵士全てを遙か彼方まで吹っ飛ばしてくれていた。敵の出現の恐れは皆無だったのが救いだ。

「ごめんね、美津子ちゃん。アタシらのせいで酷い目に遭ってさ」

「いいのよ。こうして助けに来てくれたんだもの。でもまさかあいつが来てくれるとは思わなかったわ」

と美津子ちゃんは嬉しそうに言った。

アタシはニヤリとして、

「何だかんだ言って、ホントは相思相愛の仲なんだね、2人は」

「バ、バカ言わないでよ！ そりゃ、あいつが私に気があるのは知ってるけど、私はあいつの事なんかただの幼馴染みとは思っていないんだから」

「へエ、そうなのオ」

アタシがあんまり面白がるので、美津子ちゃんはすっかり剥れて黙ってしまった。

「このヤロウ、意外にタフだな！」

通君の連打はもう100発は続いていた。

しかしアスタロトはまだ耐えていた。

「いい加減に倒れちまえ！」

通君の右ストレートがアスタロトの顔面に決まり、アスタロトは床を滑って壁に激突した。

「終わったか？」

と通君が呟くと、

「いや、始まるのだよ」

とアスタロトが立ち上がった。

通君は呆れて、

「強がり言ってんじゃねエよ。もうフラフラのクセによ」

「本当にそう思っているのか？ おめでたい奴だな」

「何イツ？」

アスタロトの身体が、徐々に巨大化し始めたのに通君は気づいた。
「何だ？」

アスタロトは、前の倍くらい大きさになった。

「この姿で戦うのは久しぶりだ。300年ぶりくらいかな。それほど貴様は強かったんだよ、地球人」

「ヘエ、300年ぶりか。何だ、お前結構ジイさんだったんだな」
「ジ、ジイさんだと？」

アスタロトの顔がまた険しくなった。

通君はせせら笑って、

「そりゃ悪かったなア。そんなジイさんだと思わなかったから、手荒く扱っちまってよ」

「貴様アツ！」

アスタロトの猛攻が始まった。

通君のさっきまでの優勢はどこへやら、もう一方的に殴られて蹴られた。

「どうだ、地球人？ これが我々の力だ。これが私の実力だ！」

「うつつ……」

通君は傷こそ出来ていないが、かなりフラフラしていた。

（畜生、身体は頑丈になっても、脳まではそうはいかねエのか。崩れちまいそんな程ガンガン響いて来るぜ、奴のパンチが）

「はアーッ！」

アスタロトの渾身の肘打ちが、通君の顔面に炸裂し、通君はそのまま跳ね飛ばされて壁に激突し、ずり落ちた。

「よく戦ったと誉めてやるよ。私をここまで本気にさせた奴は、未だかつて存在していない。貴様の事はずっと覚えておいてやる」

アスタロトの勝ち誇った声が広間に響いた。

「通！」

その時ようやくアタシは広間に辿り着いた。

アスタロトはアタシを見て、

「遅かったな。もうすぐそいつは死ぬ。そうしたら次はお前だ」

「……！」

アタシの背中に冷たい汗が流れた。

アスタロトの今の戦闘力では、アタシはもちろん、転移後の通君にも勝ち目がなさそうだ。

絶望が頭の中を駆け巡った。

もう終わりなのか。

そんなふうには思いたくなかったが、勝機は多分1%どころか、100分の1%もないだろう。

（通に悪い事したな。美津子ちゃんを助けたのに、ここで終わるなんて。アタシは通にいくら詫びても詫び切れない）

アタシは死を覚悟した。

こうなったら通君へのお詫びも兼ねて、彼を最後まで守って果てる事にした。そうするしか、通君に報いる方法はないと思った。

「さてと。もう終わりにしようか。すぐに楽にしてやるよ、チビ」

とアスタロトが通君に近づき始めた時だった。

「何だアツ!？」

と通君は立ち上がった。

彼は何故かもの凄く怒っていた。

髪が逆立って眉が吊り上がり、目が鋭くなっている。

アスタロトは通君の急な変貌にギョツとして立ち止まった。

「ど、どういうことだ？」

アスタロトの疑問はアタシの疑問でもあった。

通君の戦闘計数が、アタシが転移した時より上昇しているのだ。

すでに彼のパワーは、アスタロトのそれを吹き飛ばしそうな程増大していた。

「てめえエツ、今何て言った!？ 今俺の事、何て言ったアツ!？」

通君の迫力満点の声にアスタロトはたじろいだ。

「な、何だ、こいつは？」

アスタロトは後退した。

何かとんでもないことが起ころうとしているのに気づいたのだ。

「何て言っただよオッ！？」

通君の壮絶の一語に尽きる反撃が始まった。

とにかく息吐く暇もないパンチの嵐。

アスタロトはなす術もなくサンドバッグと化していた。

「何て言っただよ聞いてるんだよオッ！」

通君のアップーがアスタロトの顎を砕いた。

アスタロトはその衝撃で城の天井をぶち抜き、虚空の彼方へ消えてしまった。

「うおおーっ！」

それがアスタロトの断末魔だった。

通君は不意に力が抜けたようになり、バツタリと倒れ伏した。

「通！」

アタシは慌てて駆け寄った。

「通、しっかりして！」

アタシは彼を抱き起こした。

息はしている。

生きてた！

良かった。

「うっ」

通君は意識を取り戻した。

アタシは嬉しさのあまり、彼を抱きしめてしまった。

「良かった、生きててくれて」

「おい、いてエよ、天使女」

「その呼び方はやめてよ！ 本当に怒るよ！」

アタシは泣き笑いをしながら抗議した。

その時だ。

「えっ？」

アタシは背後に気配を感じ、振り向いた。

「キヤーツ！」

思わず叫んでしまった。

そこにはあのサタンが立っていたのだ。

（ダ、ダメだ。アスタロトにあれほど手こずったのに、サタンに勝てるわけがない）

アタシは今度こそ本当に死を覚悟した。ところが、

「地球人よ」

とサタンは話しかけて来た。

アタシはビツクリしてサタンを見上げた。

「私の愚かな部下アスタロトが、私の知らぬ間に仕出かした事を、詫びる」

「えっ？」

アタシと通君はキョトンとして顔を見合わせた。

その時アタシは通君に抱きついたままだったのに気づき、慌てて離れた。

「今後我々は地球人を戦いに巻き込む事はせん。それは約束しよう」
「……」

サタンはフツと笑って、

「しかしお前は強いな。あのアスタロトを虚空の彼方まで飛ばしてしまうとはな。私も一度戦ってみたいが、それは叶うまい」

と言った。

通君はニヤリとして、

「あんたには勝てそうにないな」

「何故だ？」

「あんた、俺の挑発に乗らないタイプだ。そういう奴が、一番手強いんだ」

「なるほどな」

サタンはニヤリとした。

そして彼はアタシを見て、

「ミカエルに伝えよ。私は軍を立て直したら、決着をつけるため、戦いを挑むとな」

「ええ」

アタシはゆつくりと頷いた。

サタンはフツと笑うと、テレポートして消えた。

「すげエ奴だ。あいつに勝つには、俺の寿命じゃ足りないかもな」
「そりゃそうだよ。ミカエル様のライバルなもの」

通君とアタシは立ち上がった。

「さてと。帰るか」

「うん」

アタシはニッコリして応えた。

第八章 別れの時

アタシは何となく寂しくなっていた。

「どうしたんだよ？」

と通君が声をかけてくれた。

アタシはハツとして、

「ううん、別に。どうもしてないよ」

アタシは通君と美津子ちゃんを伴い、三次元世界の通君の家の前に戻ったところだった。

夜も更けていたので、誰も外にいなかった。

「何か今思い出してみると、夢みたいな日だったなア」

「ホントね」

通君と美津子ちゃんのツーショットがあまりにも絵になっているのを見て、アタシは何とはなしに嫉妬してしまった。

「やっぱり2人は相思相愛なんじゃないの」

アタシは嫌味を込めて言った。

すると通君と美津子ちゃんはキツとアタシを睨み、

「こんな奴、そんな関係じゃないってば！」

と見事にハモって言った。

アタシは大笑いして、

「そこまで気が合えば、大したものよ」

そんなアタシ達の声を聞きつけて、久美子ちゃん達が外に出て来た。

「お兄ちゃん！ 美津子さん！ エンジェルさん！ 無事だったのね」

「よオ、今帰ったぜ。晩飯、遅くなったけど、大丈夫か？」

「うん！」

久美子ちゃんは涙を拭いながら応えた。

通君は恥ずかしそうに美津子ちゃんを見て、

「飯食ってけよ。いろいろあって、腹減ったろ？」

と声をかけた。

美津子ちゃんは素直に頷いて、

「久美子ちゃんの料理、おいしいからね。頂くわ」

「エンジェルさんもどうぞ」

と久美子ちゃんが言ってくれた。

アタシはヘラヘラして、

「そ、そう。ありがとう」

と応えた。

実はもう倒れそうなくらいお腹がすいていたのだ。

久美子ちゃんと香ちゃんは協力して、たくさん料理を作ってくれた。

美津子ちゃんは参加していなかったが、深く追求するのは彼女の名誉にも関わるので、何も尋ねなかった。

みんなは楽しそうに食事していたが、アタシだけが気分が乗らず、沈んでいた。

通君達と別れるのが、何となく悲しかったから。

「さてと」

アタシはこれ以上長居をしますます寂しくなるのも嫌なので、立ち上がった。

みんながアタシを見た。

「おいしかったよ、久美子ちゃん」

「ありがとう、エンジェルさん」

アタシは通君を見て、

「いろいろ迷惑かけたね」

「そうかな？ 俺は楽しかったぜ。ま、死にかけた時は焦ったけどな」

「ハハハ」

アタシ達は外に出た。

星がいっぱい輝いていて、綺麗な夜空だった。

「じゃあね、みんな。もう会う事もないかも知れないけど、元気でね」

「ああ。お前もな」

と通君はニツコリして言った。

美津子ちゃんはグツと涙をこらえているが、香ちゃんと久美子ちゃんはずっかりヒクヒクしている。

「まア、会う事もないなんて言わずに、たまには遊びに来て下さいよ。いつでも大歓迎ですよ」

とお調子者の信一君が言ってくれた。

アタシは苦笑いをして信一君を見た。

「それじゃ」

アタシは翼を広げた。

「あれ？」

アタシは知らないうちに泣いていた。

頬を伝わる涙を感じて、やっとそれがわかった。

（ダメだ、アタシ…。ダメだ…）

アタシは心のわだかまりを振り払うように首を横に振り、通君を見た。

美津子ちゃんはハツとしてアタシを見た。

「大好きだよ、通」

「えっ？」

アタシは通のほっぺにキスをして、バツと飛び立った。そして、
「美津子ちゃん、今度会う時までに通とくっついてないと、アタシが通をとっちゃうぞ！」

と言った。

すると美津子ちゃんはフンと笑って、

「どうぞご勝手に。こんな男、いつでも連れてっちゃってよ。せいせいするわ」

「素直じゃないわね」

「大きなお世話」

美津子ちゃんはニツコリしてアタシを見上げた。

通君はやつと我に返って、

「こ、このヤロウ！ 俺は物じゃねェんだぞ！ とるとかとらねェとか、勝手に決めるな！」

と叫んだ。アタシは通君を見て、

「バーイ、通。またね」

と言うと、上空へ飛翔した。

そんなアタシを見上げている通君を見て、

「もう、デレーツとしちゃって。嫌らしいんだから」

と美津子ちゃんが言った。

通君はムツとして、

「何が嫌らしいだ！ お前なんかより、エンジェルの方がずっといい女だぜ。あいつについて行きゃよかったよ」

「何よ、その言い草は！？」

「何だよ！？」

「やる気！？」

「まアまア、二人共」

香ちゃんと久美子ちゃんが美津子ちゃんを、信一君が通君を止めた。

この2人、しばらくはこんな具合に続いて行くんだろうな。

ま、いつか。

とにかくアタシは、アークトゥールス軍に勝って、もう一度あの子達に会いに来よう。

今はそれだけを考える事にする。

じゃあね。

その妹美少女につき（前書き）

アークツールス人との戦いの後日譚です。

その妹美少女につき

東京。その一角にある杉野森学園。その高等部二年に、とんでもない喧嘩バカがいた。

その名は矢田通。やだとおめチビツ子なのに、強烈に強い。同級生はおるか、その辺りのワル共は皆、その名を聞くだけでビビり、その声を聞くだけで逃げ出すほどだ。

そんな矢田通の噂を聞き、他の地域のワルが彼を倒しに来るが、誰一人として敵かなう者はなく、矢田通の不敗神話は磐石だった。遂には暴力団からスカウトが来るほどになったが、通はそのスカウトを叩きのめして、暴力団の組長の家まで乗り込み、全員半殺しにし、組長に、

「もう二度とこのような事は致しません」

と念書を書かせた。

何故彼がここまで強いのかは誰も知らない。

一説によると、一度死にかけてから更に強くなったらしい。

そんな事で、一時は誰も矢田通に挑もうとする連中はいなくなつた。

しかし、そのままですむほどワルの世界は大人しくはない。

そんな大人しくしてられない連中の中に、特に矢田通に恨みを持つ男がいた。そいつの名は、石動允。いするまこと杉野森学園とはライバル校関係にある大東苑学院だいてんえんがくいんの生徒だ。

「俺達は正直過ぎた」

允は仲間を集めて、体育館倉庫で作戦会議中だった。もちろんまだ授業中である。

「あの喧嘩バカに真正面から挑むなんて、無謀だった」
允の言葉に皆が頷く。

「あれほどの男にも、弱点があつたのさ」

おお、とどよめく。允は得意満面で、

「奴の妹の久美子を掻かつ攫さらう。んで、奴を大人しくさせてボコる」と言った。しかし、異論が出た。

「俺は久美子ちゃんにはそんな事したくない」

「そうだ。あの子は本当にいい子だ。あいつの妹だなんて信じられないくらいな」

允は啞然とした。

「お前ら、矢田の妹に惚れてるのか？」

「おう！」

そいつらは、允に向かって右腕の袖を捲まくった。二の腕に「久美子命」とマジックで書かれている。

「バカ共が……」

允は呆れた。

「消える」

允の目つきが変わった。「久美子親衛隊」は、逃げるように倉庫から出て行った。残りは五人だ。

「だけどさ」

残った中の一人が言った。

「何だ？」

まだ不満があるのか、と允はそいつを睨んだ。

「久美子には、いつも大山がついてるぜ」

大山とは、矢田の舎弟を自称する、久美子の同級生だ。身長は二メートルを超え、体重は百キロを超える巨漢だ。喧嘩も滅法強いと言われている。

「確かに奴も強いが、五人がかりなら潰せる。でも手早くやらねえと、矢田に気づかれる」

「ああ」

皆、「矢田」と言われただけで、額に汗を滲ませる。

「てめえら、ビビり過ぎなんだよ。奴の名前くらいで汗掻いてるんじゃないねえよ」

「お、おう」

允はニヤリとして、

「決行は今日の放課後。いいな」と言った。

矢田久美子、中学二年。

杉野森学園の中等部に通っている。

兄とは似ていず、同学年は言うに及ばず、上級生、下級生、高等部、果ては他校にまで親衛隊やファンクラブがあるほどの美少女だ。でも本人は至って謙虚で、そんな事で自惚れたりしない。

その性格の良さが、更にファンクラブ増加を加速させているが、彼らは決して久美子に近づこうとはしない。遠くから見ているだけだ。何しろ、久美子の兄は、ヤクザもビビる矢田通なのだから。下手な事をすれば、命が危ないのだ。一度久美子に手紙を渡した阿呆がいて、通にもう少しで殴られるところだった。久美子が間に入り、その阿呆は助かった。

それからというもの、久美子には男が全く近づかなくなり、体育大会のフォークダンスの時も、兄貴が見に来るのではないかとクラス男子が怯え、久美子は参加を見合わせた。

でも久美子は兄を嫌ったりしない。幼くして両親を事故で同時に失い、兄と二人きりで生きて来た彼女は、兄が自分を大切に思っている事をよく知っているので、やり過ぎの兄を怒らない。

時々寂しくなる事もあるが、それでも彼女は暗くなる事もない。

「また明日ね」

久美子は校門の前でクラスメートと別れ、家路に着いた。

「久美子さん」

後ろから大山がついて来る。

「大山君。どうしたの？」

久美子は立ち止まって大山を見上げた。彼女も身長百六十センチと女子では大きい方だが、それでも大山は遥かに大きい。

「妙な噂を耳にしました」

「え？」

「大東苑学院の石動が、矢田さんを狙っているとか」

大山は小声で言った。久美子は顔をしかめて、

「仕方ないわね、お兄ちゃん。やり過ぎなのよ、相手に対して」

「はあ」

久美子は通が喧嘩ばかりしているのを嘆いている。もちろん、兄だけが悪いのではないが、挑んで来た相手を足腰立たなくしてしまうので、余計怨まれるのも事実なのだ。

「でも、手加減すると、連中が付け上がるんですよ」

大山はまるで上級生に話すように久美子に言う。久美子は歩き出して、

「まあ、お兄ちゃんはアメリカ軍と戦っても負けないだろうから、心配してないけど」

「それはそうなんですが」

大山は久美子を追いかけながら言った。そして、二人が角を曲がった時だった。

「グオ！」

大山の後頭部を、いきなり金属バットが襲う。

「何？」

久美子が振り返ると、大山が倒れるところだった。

「大山君！」

久美子が大山に駆け寄る。

「に、逃げて下さい、久美子さん……」

大山は頭から血を流しながら言った。

「へへへ、さてと。一緒に来てもらおうかね、矢田久美子さん」

石動允が、金属バットを背負い、ニヤニヤして言った。

「どこへ行くの？」

「いいとこさ」

「嫌だと言ったら？」

久美子は怯まない。さすが矢田通の妹である。允はフツと笑って、
「そしたら、このデブをボコる」

「……」

久美子は大山を見てから、

「わかったわ。行きましょう」

「ものわかりがいいや。兄貴とは違うねえ、久美子ちゃん」

允は久美子の肩に手を回した。

「や、やめろ、てめえ……」

大山がフラフラしながら立ち上がる。

「まだ寝てる、デブが！」

允以下六人が、大山を蹴った。

「く……」

大山はまた倒れた。

「さあ、行こうか、久美子ちゃん」

允はけたたましく笑い、久美子連れて去ってしまった。

「く、くそ」

大山はポケットから携帯を取り出し、通に連絡した。

「矢田さん、やばいっす。久美子さんが、大東苑学院の石動に……」

大山は通の返事を聞いて、

「わ、わかりました……」

と携帯を切った。

久美子達は、河川敷に来ていた。

「ここがいいところなの？」

久美子は允を睨んだ。すると允は、

「おお、目だけは兄貴と同じで、凄みがあるねえ、久美子ちゃん。
でも、全然怖くないよお」

とバカにしたように言って笑った。

「さてと」

久美子は持っていた鞆を地面に置き、周囲を見渡した。

「見物の人が来ないうちに、終わりにするわね」

「は？ 何言ってるのさ、久美子ちゃん？」

允がヘラヘラしながら久美子に近づく。その時だった。

「えい！」

いきなり久美子の正拳が、允の鳩尾みぞおちに炸裂した。

「グエエエエ……」

允は涎よだれを垂らしながらそのまま前のめりに倒れた。

「な、何だ？」

他の五人は、ギョツとして久美子を見た。

「いくらお兄ちゃんが強くても、いつも守ってもらえるとは限らない。だから私も強くなったのよ」

まさに瞬殺であった。久美子の蹴りと突きが次々に決まり、阿呆共はたちまち倒れ伏した。

「良かった、誰にも見られなくて」

久美子はニコツとして鞆を持つと、

「じゃあね」

と言い、河川敷を去った。

「あ、甘かった……」

地獄の苦しみを味わいながら、允は呟いた。

「久美子さん！」

大山が走って来た。久美子は驚いて、

「ダメよ、そんな状態で走ったりしたら」

「平気です。それより、連中は？」

大山は辺りを見回しながら尋ねた。久美子はニコツとして、
「もう帰ったわよ。用がすんだみたい」

「そ、そうですか」

大山は何故か汗を掻いていた。

（矢田さんに心配するなって言われたけど、もしかしてあの六人、
久美子さんに……）

「何、大山君？」

久美子は不思議そうな顔で大山を見上げた。

「あ、いや、何でもないです」

ある意味久美子さんの方が矢田さんより怖い、と思う大山だった。

その幼馴染み美少女につき（前書き）

本当に一番強いのは誰なのか？
それがわかる時です。

その幼馴染み美少女につき

杉野森学園高等部には、伝説的な男がいる。その名は矢田通^{やだ とおる}。完全に無敵の男である。その名を聞いただけで、ワル共は震え上がり、その声を聞いただけで、一目散に逃げ出してしまふ。

大袈裟ではなく、彼の強さは半端ではなかった。宇宙人と戦って勝つたらしいのだ。最初は誰もがその噂を信じなかった。だが、矢田通がヤクザの組を一つ潰して、喧嘩を売って来た暴走族百人をたった三十分で叩き潰したのが明るみになると、「宇宙人でもぶつ倒すかも知れない」という恐怖が広がり、もう誰も彼に戦いを挑もうとする者はいなくなった。

この広い東京、いや、日本で、矢田通に勝てる人間は誰もいないと思われた。

只一人を除いて。

その只一人の人間の名は、大田美津子。矢田通の幼馴染みにして、矢田通が唯一、決して勝てない存在である。杉野森学園高等部では、一二を争う美少女であるが、その気の強さと、矢田通と幼馴染みという事実が仇^{あだ}となり、男共にはそれ程人気がない。と言うより、通が怖くて、誰も美津子に近づけないのだ。美津子は事ある毎に、「あいつとは、幼馴染みっていうだけで、別に何でもないんだから」と言うが、周囲は全く彼女の言葉を信じていない。

美津子は喧嘩が強い訳でもないし、通が彼女に頭が上がらない訳でもない。しかし、何故か通は美津子にだけは逆らったりしなかった。

もちろん彼は、他の女子生徒にも暴力を振るったりはしない。それ故、通は女子には人気がある。何かで他校の男共に絡まれたりしても、杉野森学園の生徒だとわかると、大概のワルは蒼ざめて逃げるからだ。まるで通の存在は、水戸黄門の印籠である。

ところが、通は女子に人気はあるがモテる訳ではない。これは逆

に、美津子が災いしている。通の彼女は美津子で、通にお付き合いを申し込んだりしたら、美津子にボコられると妙な噂が立っているのだ。

さすがに美津子はこの噂だけは納得が行かず、何とかしようとしたが、そんな事をすればする程火に油だと気づき、今は諦めて何もしていない。

美津子は不良に囲まれても、一歩も引かない。ワル共はやがて美津子の事に気づき、死んでしまうのではないというくらい顔色が悪くなり、地面に頭を擦り付けて謝り、逃げてしまう。

美津子の親友である宮田香は、みやたかあり

「矢田君のおかげだね」

と嬉しそうに冷やかすが、美津子は、

「あいつのせいで絡まれるのよ！」

と取り合わない。本当は、ワル共に絡まれて困っている女子を見て見ぬフリができない美津子が災いを招いているのであるが。

そんな二人のこの奇妙な関係は、安定しているかに思えた。

ところが、事情を知らない神奈川県レディースの一人が、通の強さに惹かれ、杉野森学園の近くに現れ、その関係が揺らぎそうになった。

その女の名は、城ヶ崎倫子。じょうがきりょうこ 神奈川にその名を知られた悪の名門であるダルトニアン学園女子高等部の二年だ。彼女は、周囲の仲間

に、
「矢田通には、将来を誓い合った大田美津子っていう女がいる。やめときな。そいつは、矢田が唯一頭が上がない女なんだ。鬼のように強いらしいよ」

などと止められたが、聞かなかった。

「アタシは、アタシの流儀で、必ず通さんをモノにする」

倫子はすっかり通の虜になっていた。

「何？」

美津子は、同じ高等部にいる女子のヤンキー達に学園の裏に呼び出されていた。近くに土地神様を祀った祠ほこりがある。祭神は竜神らしい。

「アタシらの仲間が、神奈川のバカに可愛がられた」

「私には関係ないでしょ」

美津子は彼女達を無視して行こうとした。するとその中の一人が、
「関係あるんだよ。そいつは、矢田を狙ってるんだ」

美津子は思わず立ち止まってしまった。

「それでも私には関係ない」

美津子は憤然としてまた歩き出した。

「勘違いしてるよ、大田！ そいつは女だ。で、矢田を自分の男にするつもりなのさ」

その言葉に美津子は振り返り、

「それも私には関係ないわ」

と言い捨てると、去ってしまった。

「相変わらずだねえ、大田」

ヤンキー達はニヤリとした。

城ヶ崎倫子は、付近の不良共を女ばかりでなく男まで完全制圧し、その存在感を示し出した。そのため、高等部では職員会議が開かれ、城ヶ崎対策が検討された。

「矢田さんが狙われてる？」

その噂は中等部にまで広がっていた。矢田の舎弟を自称する中等部二年の大山は、その命知らずのバカが女だと知り、余計驚いた。

「何のつもりなんだ、その女は？」

大山は、まさか倫子が通に恋しているとは夢にも思わなかった。

城ヶ崎倫子は只強いだけでなく、美少女でもあった。彼女は、美津子が強いだけでなく学園一の美少女だと聞いていて、尚の事闘志が湧いていた。

「通さんに相応しいのはアタシさ」

倫子は絶対に退くつもりはなかった。

「姐さん、^{あね}気をつけて下さい。どうやら、狙われているのは姐さんのようです」

校門の前で待っていた大山が美津子に言った。美津子はムツとして大山を睨みつけ、

「その『姐さん』はやめなさいって言ってるでしょ、大山君！ 私は極道の女じゃないのよ」

「す、すみません」

矢田さんの「いい人」だから、「姐さん」としか呼べないと思っている大山である。

「いい迷惑だわ、あのバカのせいで」

美津子はプイッとして行ってしまう。

「大山君も大変ね」

香が彼を^{おんが}労った。大山は苦笑いして、

「久美子さんが心配しているのよ」

「なーんだ、そういう事かア」

嬉しそうに大山を見上げる香。途端に赤くなり、動揺する大山。

「あ、いえ、その、別に久美子さんに頼まれた訳じゃないですから」
彼は巨漢を揺らしながら走り去った。

「みんな大変ね、いろいろと」

香はニコツとして呟いた。

「待ちな」

美津子は後ろから声をかけられ、立ち止まって振り向いた。そこには城ヶ崎倫子が立っていた。

「誰？」

訝しそうな顔で倫子を見る。倫子はニヤリとして、

「大田美津子だな？ アタシは城ヶ崎倫子。神奈川を締めた女さ」

「！」

美津子はギクツとした。倫子の目と雰囲気「本物」を感じたのだ。その辺のワルとは違う何かを漂わせている。

「通さんに、あんたとアタシのどっちが相応しいか、決めようじゃないの」

倫子は睨みを利かせて美津子に言い放った。ところが美津子は、「お好きにどうぞ。あんな奴で良かったら、どうぞお持ち帰り下さいな」

と言い返し、歩き出した。

「えええ？」

完全に拍子抜けの倫子だった。そして、

「負けた……」

と呟くと、美津子を追わず、神奈川に帰って行った。

そして次の日。

美津子に更なる伝説ができた。神奈川を締めた城ヶ崎倫子をたった一撃で倒したというのだ。その噂が東京中を駆け巡るのに、一週間とかからなかった。

「何でよ……」

噂を知り、美津子は激しく落ち込んだ。

「どうして私には、そんなおかしな噂がつき纏^{まと}うのよ!？」

美津子はイライラして叫んだ。香が、

「仕方ないじゃない、そういう運命なんだから」

「面白がらないでよ、香！」

美津子は笑いながら言う香を睨んでから、

「あいつのせいよ。あのバカのせいで、私はこんな目に遭うのよ」

「美津子……」

香は呆れていた。悪い事は全部矢田君のせいなの？

「今度という今度は我慢できない。あいつとは絶交よ！」

「そんな事できないくせに」

香が小声で言うと、

「何か言った、香？」

「ううん、何でもない」

大田美津子は、本当に強いのかも知れない。

そのお嬢様美少女につき

杉野森学園高等部。その二年の男子生徒である矢田通は、東京ばかりでなく神奈川までその悪名と凶暴さが鳴り響く喧嘩バ力である。そんな矢田通にも、小学校以来の親友がいる。その男の名は竹森^{たけもり}信一^{しんいち}。喧嘩一筋の通と違い、信一は学問に秀でており、杉野森学園中等部にトップ合格し、その後も学年トップを現在まで守り続けている。何故彼が通と親友なのか、知る人は少ない。

信一は、チビツ子の通と違い、高身長でイケメン、その上スポーツ万能だ。そのため、高等部はもちろんの事、中等部、近隣の女子達を魅了している。ある時期まで、高等部の女子は、喧嘩バ力通派と万能王子信一派に分かれたほどだ。

ある日信一は、恋に落ちてしまう。杉野森学園創業者の一族にあたる宮田産業のトップである宮田光夫の愛娘、宮田香。彼女はまさに「深窓の令嬢」と呼ぶに相応しい気品を漂わせていた。病気がちで、あまり登校できない香は、中等部以来の親友である大田美津子の助けもあり、徐々に登校できるようになっていた。そんな香に、信一は劇的な恋をしたのだ。

「守ってあげたい」

信一の騎士道精神が炸裂した。確かに香は見るからに儂^{はかな}そうで、支えてあげないと折れてしまうのではないかと思わせる容姿である。「香さん、僕と付き合ってください」

ストレートな信一は、いきなり告白した。香は最初は驚いた様子だったが、

「私のような病弱な女の子でも宜しければ」と承諾した。

恋は凄い。信一も香に恋したのだが、香も信一に落ちてしまった。そして彼女はどんどん健康になり、通常の生活に支障を来たさない

ほどに回復した。これには父親である光夫と、母親である小百合も驚き、信一を自宅に招いて感謝し、夕食を共にしたくらいだ。

二人はまさに杉野森学園のベストカップルとなった。信一に憧れていた女子達も、最初は香に嫉妬し、随分と意地悪な言動をした者もいた。しかし、それも時を追う毎に鳴りをひそめた。香を好きな男達は、最初から信一には勝てないと思っていたので、そちらは何も支障はなかったが。

そんな二人の恋は、順風満帆に見えた。だが、ある障害が現れたのだ。

香が幼い頃に遊んだ幼馴染の牧村宗太郎である。彼は杉野森学園創業者の安本玄三郎の次男である誠の息子である。創業者一族だという事を鼻にかけている、まさに鼻持ちならない男だ。

「香は僕の許嫁だ。誰にも渡さない」

彼は金の力と親の力に物を言わせて、裏社会の顔役に信一をボコボコにしてくれるように頼んだ。

「これで香は僕のものだ」

昭和の昔のような愚かな発想の男である。

そしてある日の夕方。信一と香は、いつものように一緒に下校していた。二人は帰り道、公園で少し休んで話してから帰るのが日課だった。そこに、ドラ息子の宗太郎の依頼を受けたその筋の連中が五人、信一と香の前に現れた。

「どちら様ですか？」

生まれつきの紳士である信一は、誰に対しても物腰が柔らかだ。するとその筋の人の一人が、

「悪い事は言わない。宮田香さんと別れる。香さんには、牧村宗太郎様という許婚がいらっしゃるのだ」

「はい？ 仰っている意味がわかりませんが？」

信一はにこやかな顔で尋ねた。するとそいつらのリーダー格の男

が、

「質問は許さない。別れる」

「何ですの、あなた方は！？ 失礼ですわ！」

香が怒って言い返す。すると信一が、

「カオリンは下がってて。この人達は、僕に用があるらしいから」

香は信一の真剣な顔を見てその場を離れた。

「嫌だと言ったら、どうなさるおつもりですか？」

信一はニツコリ笑って言った。

「身体に教えてやるんだよ！」

五人が一斉に信一に襲い掛かった。

「きゃあああ！」

香は信一がやられてしまうと叫んだ。しかし、やられたのは五人の方だった。

「グエエエ」

皆、腹を押さえてのた打ち回っている。信一は仮にも矢田通の親友である。喧嘩が弱いはずがない。

「っ、つええ……」

五人はよろけながら逃げ去った。

「手加減しましたが、お医者様に行った方がいいですよ」

信一はそう言って手を振った。

五人は組事務所に戻り、事情を説明した。

「何だ、てめえら！ 情けねえぞ、全く！」

組長が怒鳴り散らした。

「たかが高校生一人を相手に、何してやがる」

「そ、それが、偉く強くて……」

言い訳する組員に、組長は切れた。

「どこのどいつなんだ、そのガキは！？」

「た、竹森信一って言います。杉野森学園高等部の二年です」

組員がそう言うと、あれほど息巻いていた組長の顔が蒼くなった。

「た、竹森イ!？」

「どうしました、組長？」

組長の顔色の悪さに、組員は尋ねた。組長はガタガタ震えながら、
「ば、バカヤロウ、その人は、矢田さんのお友達だよ！」

「え？」

矢田という名前は、その筋の人達には悪魔に匹敵する恐怖の名前である。

「あわわわわ……」

とんでもない人に関わってしまったと、組員達も蒼ざめた。

「最上級の菓子折り持って、すぐ詫びに行け！ このままだと、ウチの組が矢田さんに潰されちまうぞ」

組長は大声で指示した。組員達も転がるように事務所を出て、お菓子屋に走った。

信一と香は、ちょうど公園を出たところで組員と会った。彼らは地面に額がめり込むのではないかというくらいの土下座をし、菓子折りを渡すと、

「この事はどうか矢田さんには内密に」

と言い、逃げ去った。

「凄いのね、矢田君で」

香は笑って言った。信一は肩を竦めて、

「こんな事しなくても、通には言わないのにね。あいつに話したら大喜びで組潰しに行くだろうから」

「そうね。例えどんなお詫びがあっても、矢田君には関係ないわよね」

「そうそう」

結局組員達の奔走は全く無駄だった。

そしてその日の夜。

吉報を待っているドラ息子宗太郎に、香が来たとメイドが告げた。

「そうか」

早速俺に会いに来たか。どちらが大物か、わかったのだろう。宗太郎はニヤニヤして香の待つ居間に赴いた。

「おお、香。待っていたよ」

大袈裟な仕草を交え、宗太郎は香に近づいた。

「宗太郎さん、私、貴方に贈り物がありますの」

香は満面笑顔で言った。宗太郎は気取ってフツと笑い、

「そう。何かな？」

と間抜けな顔で尋ねた。そこへ飛んで来た、香の平手。

「いつてえ！」

宗太郎はそのまま床に倒れてしまった。

「今度あんな事したら、この程度ではすみませんから、よく覚えておいて下さい」

香はそう言い残し、屋敷を出た。宗太郎はショックで失禁までしてしまった。

宗太郎はもう一度裏社会に依頼をしたが、どこも受けてくれなかったのは言うまでもない。

「お帰り、カオリン」

屋敷を出て来た香を、信一が出迎えた。

「只今、信ちゃん」

香は笑顔で答えた。そして、

「あの人、執念深いから、また何か仕掛けて来るわ」

「大丈夫だよ。その筋の方々は、もう絶対来ないから」

信一は笑って言った。香も笑って、

「凄いのね、矢田君効果って」

「そうだね」

二人は腕を組んで歩いて行った。

その弟美少年につき

東京の私立の名門である杉野森学園高等部は、別の意味でも「名門」である。

矢田通。今世紀最強と言っても過言ではない、チビツ子高校生だ。街でいきがっているワル共も、通の名を聞けば借りて来た猫より大人しくなり、その声を聞けば、隣の芝生よりも青くなる。それくらい、矢田通の強さは、その筋では有名だった。しかもそれに加えて、妹の久美子、彼女の美津子も半端ではない強さだと噂されている。久美子に関しては、間違っではないのだが、美津子は別に強くはない。但し、気の強さだけなら久美子以上だ。

「私は彼女じゃないから！」

美津子はワル共が泣きながら許しを請う時も、そこだけは強調して説明する。でもワル達の耳には届かない。美津子は矢田通が唯一頭が上がらない存在とされている。すなわち、「矢田通く美津子」という絶対公式が、連中の間に浸透しているのだ。

その美津子の「伝説」の恩恵を一番受けているのは、彼女の弟である晶である。彼は成績優秀なのは姉と同じだが、気の弱さは誰に似たのかというくらい大人しい男だ。しかも悪い事に晶は久美子と幼馴染で、杉野森学園中等部の同級生でもある。更に、久美子の兄である通が唯一久美子との交際を認めている男だ。多分結婚したいと言っても、通は許すだろう。

晶と美津子が並んで歩くと、晶の方が女の子に見えてしまう。だから美津子は晶に、

「もっと男らしくなりなさい！」

と毎日言っている。

「あんながなよなよしてると、私がいじめてると思われるから、嫌なのよ！」

その言動がすでに晶にとっては「いじめ」に等しい。

普通ここまで弱いと、学校でいじめの対象になりそうだが、彼はあの大田美津子の弟で、しかも彼女は矢田通の妹の久美子という最強形態なので、誰も晶をいじめたりしない。下校時に、晶が他の中学のワルに絡まれたりしても、同級生のワル共が身体を張って晶を守ってくれる。彼らは誰かに頼まれたわけでもなく、自主的にしているのだから凄い。

そんな事があつたのは入学したばかりの頃だけで、しばらくすると晶の立場はその付近一帯に知れ渡り、誰も彼に絡んだりしなくなつた。むしろ妙な愛想を振りまく不気味な連中すらいるほどだ。

「晶君、帰りましょ」

久美子が笑顔で声をかける。

「う、うん」

晶は何故かオロオロして答える。完全に尻に敷かれる組合せだ。

久美子はそんなつもりはないだろうが。

「どうしたの、具合悪いの？」

久美子が心配そうに彼の顔を覗き込む。

「べ、別にどこも悪くないよ」

晶は慌てて答える。

「そう。良かった」

久美子ちゃんの笑顔は癒される。晶はそう思う。

「久美子さん」

そこへ現れる、胃が痛くなる存在。同級生の大山。身長は二メートルを超え、体重も百キロを超える。久美子を慕っているようだが、決してそれを表に出さない。でも、晶には大山の思いがよくわかる。「あら、大山君。どうしたの？」

大山は久美子に笑顔で尋ねられて、嬉しそうだ。

「いえ、その、またおかしな連中がうるついているらしいので」

「大丈夫よ。いざとなったら、お兄ちゃんに助けてもらうから」

久美子は一応晶には自分が格闘技を習っている事を隠している。

二人の関係は、むしろ久美子が晶に「LOVE」なのである。もち

るん、晶も久美子の事が好きなのだが、どこか恐れている節があるのだ。

「そ、そうですか」

自分を頼って欲しいと思う大山だが、それは決して口に出さない。それが男だと彼は思っている。

「今日は注文していた参考書が届く日なんだ」

「そうなの」

二人は楽しそうに歩き出す。大山は少し距離を置いて歩いて行く。「ここね」

久美子と晶は駅前の大型書店に入る。大山は中には入らず、表で周囲を監視する。

「ありがとうございます」

晶は参考書を受け取り、レジから離れた。その時、後ろにいたその筋の方の足を踏んでしまった。

「あいっててて！」

大袈裟に騒ぐその筋の人。今時珍しい弾けっぷりである。

「ああ、ご、ごめんなさい！」

慌てて謝る晶。その声に気づき、レジに近づく久美子。

「骨が折れたかも知れん。ちょっと外で話そうか、兄ちゃん」

「は、はい」

素直について行く晶を、久美子が引き止める。

「久美子ちゃん」

「どうしたの、晶君？」

二人のやり取りに気づき、その筋の人が振り返る。

「おい、姉ちゃん、あんたはこの兄ちゃんの関係者か？」

「そうですけど」

「じゃあ、一緒に来てもらおうか」

「はいはい」

陽気に答える久美子に、晶は呆然としてしまった。

（まずいよ、久美子ちゃん。相手は絶対ヤクザだよ）

早く姉か通に連絡をと思ったが、外に大山がいる事を思い出す。
「ああ！」

運の悪い事に、大山は横断歩道で困っていたおばあさんを背負って道路の反対側に行ってしまったている。

（ど、どうしよう？）

晶がソワソワしている間にも、久美子はどんどんヤクザと歩いて行ってしまう。

「晶君、早く」

「う、うん」

晶は漏らしそうなくらいビビッていたが、久美子は全く動じていない。

（さすが、矢田さんの妹だなあ）

晶は感心してしまった。

「どこまで行くの、おじさん？」

久美子が尋ねる。

「そこに見えるだろ、ウチの事務所の看板が」

「ああ、何だ、よっちゃんのとこなの？」

「ああ？」

ヤクザは、自分の組の組長がちゃんづけで呼ばれたので、久美子を睨みつけた。

「あ、よっちゃんだ！」

久美子は事務所の二階の窓から下を見ている強面の男に手を振った。その男も久美子に気づき、

「ああ、久美子さん。どうしたんですか、そんなところで？」

嫌な汗を全身から掻いているヤクザが一人。彼の寿命が縮んだのは間違いない。

「今日はありがとう、久美子ちゃん」

家の前で晶は言った。

「別にお礼なんて言われる事してないよ、晶君」

久美子はニコツとして答える。

「そ、そうだね」

世の中には触れてはいけない事がある。そう思った晶だった。

プロローグ 再会

アタシの名前はエンジェル。おとめ座スピカ星系の住人だ。地球人から見ると、まさに「天使」の姿をしている、所謂「異星人」である。

以前、地球人の男の子を瀕死の重傷にしていまい、彼にアタシの血を分けた。そのせいでその子は最強の少年になってしまった。

そしてその事を敵対するうしかい座アークツールス星系の連中に知られ、その少年を巡っての戦いが始まった。ちなみにアークツールス人は、地球人から見ると「悪魔」の姿に見える。

当事者である少年矢田通君の活躍（？）もあり、アークツールス人の中の悪意ある連中は一掃された。

それからしばらく後の事。アタシは、スピカ軍地球侵攻部隊の総司令官であるミカエル様に呼び出された。

「失礼します！」

敬礼して入室する。ミカエル様に拝謁するのは、何度経験しても慣れる事はない。

「ご苦労、エンジェル。楽したまえ」

「は！」

一歩前に進み、ミカエル様を見る。

「アークツールスとの和平交渉は順調だ。もうすぐ地球を去る事になるう」

アタシはキョトンとした。

「は？ 地球は諦めるのでありますか？」

「そうだ。アークツールスも手を引く事に同意した」

「まさか。連中が諦めるとは思えません」

ミカエル様は、アタシがそう言うのを見越していたように笑った。「同意せざるを得ないのだ。地球の住環境をスピカやアークツール

スのレベルまで回復させるには、途方もない時間がかかるからな」

「地球が汚れ過ぎている、という事でありますか？」

アタシの質問にミカエル様はフツと笑い、

「端的に言えば、そういう事だ」

「はい」

アタシは納得した。地球の住環境の劣化は、目を覆いたくなるものがあつたからだ。

「そこでだ」

ミカエル様はアタシに画像が写った携帯型の3Dグラフを渡した。

「これは？」

「アスタロトが虚空の果てから戻ったらしい。サタンからのホットラインで知らされた」

サタンとはアークトールス軍の総司令官の名だ。

「アスタロトが？」

アスタロトこそが、前回の戦いの元凶だ。通君の怒りの鉄拳で、二度と戻れない虚空の果てに飛ばされたはずなのに。

「どうして戻れたのですか？」

「ギリギリのところまで踏みとどまったようだ。呆れた執念だとサタンも言っていた」

「はあ」

私もそう思う。

「奴の狙いは我々ではない」

「え？」

アタシは嫌な予感がした。

「奴の狙いは地球。いや、通だ」

ああ、やつぱり。あの粘着男、まだ通君を怨んでいるんだ。気持ち悪いなあ。

「そこで、君に地球に降下してもらい、通の警護に当たってほしいのだ」

「ええ？」

アタシは故意にではなく、本当にビックリして大きなリアクションを取ってしまった。

「嬉しくないのか？」

ミカエル様は意地悪な質問をする。アタシが通君に気があるのをご存知なのだ。

「べ、別に嬉しくはありませんが、自分が一番よく彼らの事を理解しているので、適任だと思います」

アタシは精一杯の見栄を張って言った。ミカエル様には丸わかりだった。

「それではすぐに地球に降下し、通と接触してくれ」

「了解しました！」

アタシは自分でも驚くくらい、気分が高揚していた。通君に会える！ ウキウキしてしまった。

一方、その矢田通のいる日本。東京の一角にある私立杉野森学園高等部。喧嘩バカの通は相変わらず喧嘩に明け暮れていたが、すでに高校生では相手になる者がいない。彼は教室で椅子にふんぞり返っていた。

「いい加減、喧嘩するのやめなさいよ、通」

幼馴染で、只一人通を押さえ込める存在の大田美津子が言った。気の強さなら誰にも負けませんという顔つきの美少女だ。しかし通は、

「向こうから仕掛けて来るんだからしょうがねえだろ？ 俺だって好きで喧嘩してる訳じゃねえよ」

「嘘ばかり。喧嘩したくて、ウズウズしてるくせに」

美津子の皮肉に通は、

「うるせえよ、ブス」

「何ですって！？」

美津子は通の襟首を捻り上げた。

「もういっぺん言ってごらんなさいよ、このチビ！」

美津子のその言葉に、近くにいた生徒達が真っ青になって遠くに逃げ出す。「チビ」とか「寸足らず」とかの言葉は、通には絶対言ってはいけない禁句なのだ。

「言ってやるよ、ブス。気がすんだか、ブス！」

「あつたま来た！ もうあんたとは絶交よ！」

「おう、望むところだ」

通は歩き去る美津子にベースと舌を出した。周囲は二人の緊張感に溢れたやり取りを啞然として見ていた。

「美津子、言い過ぎよ」

同級生で親友の宮田香が窘める^{たしな}。彼女はお嬢様な美少女である。

「何でよ！？ あいつは私に三回もブスって言ったのよ！」

「あのねえ……」

呆れてしまう香。

「通、謝った方がいいぞ、美津子さんに。女の子にあの言葉は、酷いと思うぞ」

小学校からの親友である竹森信一が言ったが、通は、

「冗談じゃねえよ。あいつはもつと酷い事言い返したじゃねえか。

何で俺が謝らなきゃならねえんだよ！？」

通に「チビ」と言っただけで無事ですむのは美津子だけだ。信一は通が口ではああ言いながらも、美津子には本気で怒っていない事を知っている。

「全く……」

まさに「夫婦喧嘩は犬も食わない」の類いである。

そして下校時。通は信一と校門を出た。

「通兄ちゃん！」

そこへピヨコンと女子高生が現れた。他校の生徒のようだ。

「おお、瞳じゃねえか？ どうしたんだ？ 学校は？」

通がそう尋ねたのは、通の父方の従妹である矢田瞳だった。美津子がきつい感じの美少女なら、瞳はまさしく癒し系美少女だ。

「今日は創立記念日で休みなの。だから、兄ちゃんに会いに来たのよ」

「フーン」

通は笑顔で応じた。

「あ、この人、信ちゃんね？ 懐かしいわあ、何年ぶり？」

瞳は信一を見て言った。信一は、

「小学校以来だから、五年ぶりくらいかな？」

「そうだね。あの時よりカッコよくなってるよ。彼女いるの？」

瞳は興味津々の顔で信一に迫る。通が、

「残念だけどいるぞ。お前じゃ太刀打ちできねえよ」

「あらま、シヨツクウ」

瞳はニコニコして言う。彼女は昔からこんな感じで、とても気さくな女の子。信一は苦笑いだ。

「ああ、瞳ちゃん。久しぶりね」

美津子が声をかけた。彼女は通を全く見ていない。隣の香は呆れている。

「ああ、美津子姉！ みつこねえ 久しぶりー！」

瞳は美津子と手を取り合って喜ぶ。そして香に気づき、
「もしかして、この人が信ちゃんの彼女？」

そう言われて香はドキツとした。信一はニツコリして、

「そうだよ。僕の彼女、宮田香さん」

「よろしく」

香は信一の紹介にホツとして挨拶する。瞳も香に微笑んで、

「矢田瞳です。よろしく」

そしてしばらく女三人の止め処ない会話が続いた。

「行くぞ、信一」

「あ、ああ」

呆れた通が歩き出す。信一も仕方なく彼について行く。

「ああ、待ってよ、通兄ちゃん！」

瞳が追おうとすると、

「放っておきなさいよ、瞳ちゃん。それより、どこかで美味しいものでも食べない、久美子ちゃんも誘って」

「ああ、それいい！ 行こ行こ、美津子姉」

三人はペチャクチャ喋りながら、通の妹である久美子がいる中等部に向かった。

「はい！」

通は突然現れたその金髪の美少女に仰天した。

「て、天使女？」

通の前に現れたのは、地球人の女の子に変装した、スピカ人のエンジェルだった。

「またその呼び方する！ 怒るよ、ホントに！」

エンジェルは口ではそう言いながらも嬉しそうだ。

「信一君も元気そうね。香ちゃんとはうまくやってる？」

信一はニコツとして、

「おかげ様で。エンジェルさんも、相変わらずお綺麗ですね」

「あらん、ありがとう。でも、香ちゃんに悪いから、お礼のキスはしないわね」

エンジェルがあまりにハイテンションなので、通も信一も引き気味だった。

「何しに来たんだよ、お前？」

通は素っ気ない態度で尋ねた。エンジェルは苦笑いして、

「実はさあ……」

と来た理由を話した。

「またかよ」

通はアスタロトの顔と声を思い出してうんざりした。信一が、

「で、そいつはもう近くまで来ているの？」

「多分ね。でも、アスタロト達は地球の環境に私達ほど適応していないから、長時間はいられないはずなんだ。いるとしても、何もできないとは思うんだけど」

エンジェルが考えながら言うと、通は、

「だったらお前も来なくていいじゃん。それにあのカマヤロウは、一度ぶつ飛ばしたんだから、心配いらねえよ」

「相変わらず冷たいんだから、通は。そんなにアタシが嫌いなの？」

エンジェルが通に擦り寄って尋ねると、通はビクツとして、

「こら、引つ付くな！」

と逃げた。エンジェルはケラケラ笑って、

「何よ、美津子ちゃんが怖いのか？」

「だ、誰があんな奴、怖いもんか！」

ムツとする通。信一は肩を竦めた。エンジェルは真顔になって、
「アスタロトは強くなってるよ。あのサタンが警戒するように言うて来たくらいだから」

「サタンが？」

通もサタンの事は覚えている。絶対勝てないと思った相手だ。そして、「強くなっている」という言葉が、通の闘争心を掻き立てた。
「面白そうだな。どのくらい強くなったか、確かめてみるか」

「あんなねえ……」

エンジェルは思い出した。このバカはこういう奴だと。

「え？」

エンジェルが急にビクンとして周囲を見回す。

「どうした？」

通もそれに釣られて周りを見た。信一も警戒する。

「おかしいな、あいつの気配が微かにしたんだけど。消えちゃった」

エンジェルは首を傾げた。通は舌打ちして、

「何だよ、役に立たねえ女だな」

「五月蠅いよ、全く！」

エンジェルはキツとして通を睨み、

「アスタロトの奴、地球に降りてるよ。あの気配は、そう遠くなかったから」

「そうか」

途端に嬉しそうになる通である。

「でもどうして消えたんだろう？ 三次元から出たのなら、その痕跡は残るはずなのに、それもないし」

エンジェルは考え込んだ。

「まあ、あんまり心配するなつて。あんなカマヤロウ、どんだけ強くなつても俺の敵じゃねえよ」

通はニヤツと言った。エンジェルは溜息を吐いて、

「だといいんだけどね」

と呟いた。

第一章 アスタロト現る

通は、エンジェルが現れたのを鬱陶しく思っていたが、それを口にする事はなかった。彼は決して女が苦手な訳でも、氣遣いができない訳でもない。以前、別れ際にキスされた事も覚えてるし、美津子がアスタロトに監禁された時も、命がけで助けようとしてくれたのも忘れてはいない。だから、彼は、それなりにエンジェルに恩義を感じているし、エンジェルが自分の事をどう思っているのかも理解している。

「そう言えばさ、他のみんなは元気？」

「他って？」

通はそれでも素っ気ない態度だ。彼なりの照れ隠しである。

「美津子ちゃんと香ちゃん元気なのはわかってるけど、久美子ちゃんも元気？」

「元気だよ。会ってくか？」

通が言うと、エンジェルは苦笑いをして、

「会いたいけど、私が会うと迷惑かかるからさ」

「何言ってるんだ、今でも十分迷惑だよ」

「ひっどーい」

知らない人が聞けば、カップルの会話にしか聞こえない。

「久美子ちゃんも元気ですよ。今では中等部で一番強いかもね」

「へえ。血は争えないって奴？」

エンジェルが楽しそうに言うと、

「俺が守り切れない事もあるからって、あいつが勝手に格闘技を習い始めたんだ。でも筋はいい」

「そうなんだ」

エンジェルはニコニコしていたが、

「えっ？」

「どうした、天使女？」

通が眉をひそめて尋ねる。エンジェルは通に「天使女」と呼ばれた事に突っ込むのを忘れるほど驚いていた。

「うそ、アスタロトがすぐそばにいる」

「何？」

通と信一はサツと背中合わせになり、周囲を見た。

「こっちだよ」

エンジェルが走り出す。

「おいおい、そんなに近いのか？」

「うん、すぐそばだよ」

通と信一は顔を見合わせてからエンジェルを追いかけた。

「あ」

通は角を曲がったところで思わず立ち止まった。前から美津子達が走って来るのが見えたからだ。

「美津子ちゃん！ 香ちゃん！ 久美子ちゃん！ お久ーっ
！」

エンジェルは事情を知らないので、大喜びで手を振る。

「あ、エンジェルさん、ちょうど良かった！」

「は？」

エンジェルはキョトンとした。美津子はゼイゼイ息をしながら、
「またあの変な連中が現れたのよ！ 瞳ちゃんが連れて行かれて…」

「…」

「何！？」

通が会話に割り込む。

「どうして瞳が？」

「わからないわよ！」

二人は「絶交した」のを忘れて話していた。

「居場所わかるか、天使女？」

通がエンジェルを見る。エンジェルは、

「まだ三次元にいるよ。こっちだよ！」

とまた駆け出した。通はそれに続いて、

「信一、美津子達を頼む！」

「了解」

信一は敬礼で応じた。

「あのカマヤロウ、何考えてるんだ？」

通は走りながら思った。

二人は程なく河川敷に出た。以前美津子が連れ去られた場所だ。

「あそこ！」

エンジェルが指差す。河川敷に瞳が倒れているのが見えた。

「瞳！」

通は瞳に向かって走り出す。

「あ、通！」

エンジェルは、この何も考えない男の行動を呆れ、後を追った。

「瞳、大丈夫か！？」

通は瞳を抱き起こした。

「あ、通兄ちゃん……」

瞳は薄らと目を開けた。

「良かった、何ともないのか？」

「うん。待ってたよ、通兄ちゃん、兄ちゃんが来るのを……」

瞳はガバツと通に抱きつく。通はビクンとしたが、

「お、おう。もう大丈夫だ」

「うん。私はもう大丈夫」

通に抱きついている瞳の腕の力が突然強力になった。

「ぐう！」

通はその力に仰天し、

「瞳、いてえよ、そんなに締めつけるなよ」

と振り解こうとした。その言葉にエンジェルが、

「通、おかしいよ！ 地球人の女の子が、いくら力を入れたって、あんたが痛いなんて思うわけないよ！」

「あ！」

通はエンジェルの言葉にハッとした。

「そう、私は大丈夫だけど、兄ちゃんは大丈夫じゃないよ！」

「ぐおおおお！」

更に瞳の腕が通を締めつける。

「通！」

エンジェルが駆け寄ろうとすると、アークツールス人の兵士が現れた。

「く！」

エンジェルと兵士の戦闘が始まる。

「やめろ、瞳……。今なら冗談ですませてやるよ……」

通は瞳を睨みつけた。しかし瞳は、

「やーよ。通兄ちゃんは私のもの。美津子姉になんか渡さないんだから！」

「何だと!？」

通は瞳の腕をようやく振り解き、彼女から離れた。

「兄ちゃん、私と付き合つてよ。私、美津子姉よりずっと前から、

兄ちゃんの事好きだったんだよ」

瞳は急に涙を目に浮かべて話した。

「瞳……」

通は一瞬気を抜いてしまった。

「だから、私のために死んで、通兄ちゃん！」

瞳の顔が鬼のような形相になり、バツと通に近づいた。

「グオッ！」

瞳の正拳が、通の鳩尾みそおちに入った。

「うつつ……」

「通！」

エンジェルが兵士を片付けて、瞳に蹴りを見舞った。

「何してるの、通!？」

エンジェルはうずくまる通を抱き起こした。

「つまらんな、その程度では」

「!？」

その声に通とエンジェルはビクツとし、声の主を見た。

「久しぶりだな。今度こそ、貴様を虚空の果てに送ってやるぞ、地球人」

そこには、アスタロトが立っていた。以前よりパワーを漲らせて。

「カマヤロウ、てめえ、瞳に何をした!？」

通はエンジェルの支えを振り払って怒鳴った。アスタロトはフツと笑い、

「わからんのか、その女がどうしたのか？」

エンジェルが先に気づいた。

「そうか、あんた、通と同じ事を!」

「ほう、察しがいいねえ、スピカ人のくせに」

アスタロトはエンジェルを見た。

「スピカ人のくせには余計よ!」

エンジェルはカツとなって言った。アスタロトはそれを無視して、

「さあ、瞳、私と一緒に来るのだ」

「はい、アスタロト様」

瞳はスツとアスタロトに寄り添った。

「てつめえ!」

通がアスタロトに突進した。

「ここで待っている。この女を返して欲しければ、必ず来る事だ」

アスタロトはそういい残し、瞳を伴ってレポートしてしまった。

「くそ!」

通は地団太踏んで悔しがった。エンジェルはアスタロトがいた場所に落ちている一枚のカードを拾った。

「これは、五次元の座標軸……」

「何だ、それ？」

通が覗き込む。

「奴の居場所よ。ここにアスタロトがいる」

エンジェルがそう言うのと、

「よし、すぐ行くぞ、天使女！」

「アタシはエンジェル！ その呼び方、やめてよね」

通は苛立っていた。

「うるせえよ！ とにかく、早く行くぞ！」

「ほう。そんなに私とキスしたいんだ、通？」

エンジェルの言葉に、通はその時の事を思い出した。

「ま、ま、また、あれやるのか!？」

通は真っ赤になった。エンジェルはいたずらっぽく笑って、

「大丈夫よ。すぐすむから。今日はギャラリーもいないしね」

「お、おい……」

エンジェルは妙に色っぽい顔で通に近づいた。

「お前、この緊急時にだな……」

思わず後ずさりする通。

「何勘違いしてるのよ。キスして転移しなきゃ、五次元に行けないでしょ！」

エンジェルはガバツと通に抱きつき、

「では、いただきます」

「うわあああ！」

ブチュツと音がして、二人の唇が触れた。途端にエンジェルが輝き出し、通に溶け込む。そして通が輝きだし、エンジェルの姿に変わった。二人は一つになり、強大な力を得たのだ。

「おおお……」

通は久しぶりに自分のパワーが上がったのを感じた。

「え？」

ふと気づくと、啞然として自分達を見ている美津子達がいた。

「うわ！」

通は仰天した。

『おい、美津子達に見られたぞ』

通は自分の中のエンジェルに言った。エンジェルは、

『別に見られてもミカエル様に罰を受けたりしないから安心して』
『そういう事じゃなくてだな……』

『何よ、美津子ちゃんに見られると困るの、私とのキス？』

『べ、別にそんな事はねえよ！』

エンジェルは心の中で笑った。

「お、おう、これから、瞳を助けに行つて来る！　じゃあな！」
そう言つと、エンジェルの姿の通はレポートした。

「今、お兄ちゃん、エンジェルさんと……」

久美子がそう言いかけたのを、信一が止めた。

「おっと、変な詮索はなしね」

でも美津子は固まつたままだ。

「信ちゃん、美津子がフリーズしてるわ」

香が美津子の反応がないのを確認して言った。

「再起動まで時間かかりそうだね」

その様子を見て信一が答えた。

「お兄ちゃん……」

久美子は通が消えたところを見て呟いた。

第二章 通初めての敗北？

通とエンジエルの「熱い口づけ」を目撃し、フリーズしてしまった美津子を、香と信一が抱えるようにして家に運んだ。

「お姉ちゃん！」

知らせを受けていた弟の晶が玄関で出迎えた。

「どうしちゃったんですか、姉は？」

晶は瞬き一つしない美津子を見て香に尋ねた。

「えーとね、ちょっとお答えできかねます」

香はそう言って苦笑いする。信一が、

「まあ、話は美津子さんを休ませてからにしようか、晶君」

「は、はい」

香の代わりに晶が美津子を支え、信一と二人で部屋まで運んだ。

「一体どうしたの？」

晶は小声で久美子に尋ねた。久美子は何故か赤くなって、

「わ、私に訊かないでよ、晶君」

「え？」

晶は久美子が赤くなったのを見て、余計訳がわからなくなってしまった。

その頃、お騒がせの張本人である通は、アスタロトに指定された五次元の座標に向かって飛んでいた。座標の位置に正確にテレポーターできればいいのだが、行った事がない位置にいきなり飛ぶ事は至難の技なのだ。

「あとどれくらいかかりそうだ、天使女？」

通は心の中でエンジェルに話しかけた。

「天使女じゃなくてエンジェル！ あと地球時間で三十分でどこかな」

「もっと早く着けねえのかよ？」

『無理よ。これでも相当ギリギリのスピードなのよ。私の身体が壊れそうなの！』

『そうか。わかった』

エンジェルも、通と同化しているので、彼の感情がよくわかる。だから、焦る気持ちも理解できた。しかし、飛翔に体力を使い過ぎると、アスタロトと対峙した時に勝てる見込みが薄くなる。

『瞳ちゃんてさ、通の事が好きなの？』

『そんなんじゃないさ。あいつは昔から、人のものが欲しくなる奴なんだ』

『そうなの？』

エンジェルは通の心の中を覗いてはいけないと思いながらも、つい見てしまった。

通がまだ保育園入園前の頃。瞳はすぐ近くに住む仲の良い従妹だった。まるで本当の兄妹（きょうだい）のように遊んでいた。

それが少し変化したのは、久美子が生まれてからだ。通が可愛がる久美子に嫉妬した瞳が、通がいない時に久美子に意地悪をしていた。久美子はまだ泣く事しかできなかったので、瞳の意地悪はエスカレートし、久美子の服を破ったり、手をつねったりした。

ある日、瞳を見ると泣き出す久美子を見て不審に思った通が、とうとう瞳の「犯行」を目撃し、彼女に怒った。瞳は逆ギレし、
「通兄ちゃんがアタシと遊んでくれないからだ！」

と泣き出した。その頃の通は、今とは違って喧嘩バ力ではなかったので、自分が悪い事に気づき、素直に瞳に詫びた。そして二人の仲は元通りになった。

久美子に対する嫉妬がなくなったのも束の間、次に通が小学校で出会った美津子に、瞳の矛先は向いて行く。

通が一年生の時は、瞳も美津子を敵視していなかったのだが、瞳が小学校に入学すると、美津子を異常なほどライバル視し、二人が一緒にいると必ず割って入っていた。

美津子も瞳が可愛いので、彼女が割り込んで来るのを不快に思わず、一緒に遊んでいた。幼い頃はそれですんでいたが、小学校高学年になると、「仲がいい」では気がすまなくなった瞳が、通に告白した。

「兄ちゃん、アタシと付き合って」

「俺達、まだ小学生だぜ。それに俺とお前は従兄妹同士じゃないか」
通のその不用意な発言が、また瞳を切れさせた。

「従兄妹同士は結婚だってできるのよ！ ネットで調べたんだから！」

「おい……」

通は瞳がそこまで思いつめているとは思っていなかったなので、面喰らってしまった。

困り果てた通は、しばらく悩み、美津子となるべく遊ばないようにした。美津子も瞳の通に対する感情に気づいたらしく、

「瞳ちゃんを大事にしなさいよ」

と通に忠告し、通と距離を置くようになった。

ところが、瞳は父親の仕事の都合で、海外に行く事になり、騒動に突然幕が引かれた。

瞳からは頻繁に手紙が届いていたが、やがてそれも通が高校に入学する頃には途絶えた。通の両親の事故死で、瞳の家族と疎遠になつていたからだ。だから今日の瞳の出現は、まさに突然だったのである。

エンジェルは辛くなった。通の瞳に対する思いは、相当複雑だ。

瞳もそうだろう。もし、アスタロトがその事を知った上で、瞳を利用しているのなら、絶対に許せない。そう思った。

「あれか」

五次元空間に浮遊する城。アスタロトが独自に築いたもののようにだ。自分の家の紋が縫い込まれた旗が掲げられている。

「待ってる、カマヤロウ。ギッタギタにしてやるぞ！」

久しぶりに本気の「喧嘩」ができるので、通は瞳の事も忘れてワクワクしていた。

『はあ。心配して損しちゃった』

エンジェルは通の呑気さ加減に呆れてしまった。

「どりゃああああ！」

通の正拳突きが城門の吹き飛ばした。

「待っていたぞ、地球人」

城門の向こうの庭園にアスタロトと瞳が立っている。通は着地して、

「瞳を返してもらうぜ、カマヤロウ」

するとアスタロトはニツとして、

「瞳、お前あいつのところに戻りたいか？」

「いいえ、アスタロト様、私はここに残りたいです」

瞳のその発言に通は仰天した。

「瞳、何言ってるんだ！？ そいつはな……」

「通兄ちゃんと違って、アスタロト様はとても優しいのよ」

瞳はアスタロトに寄り添って言った。

「瞳……」

通は啞然とした。アスタロトは通の動揺を笑い、

「情けないな、地球人。助けに来たはずが、拒否されるとはな」

「く……」

通は齒軋りした。そして更に通に追い討ちをかける事を瞳が言い出した。

「アスタロト様、私、通兄ちゃんを殺したいんですけど、かまいませんか？」

通は打ちのめされていた。

（こ、殺すだと？ あの瞳が、そんな……）

「かまわんさ。存分にお礼をしてから、殺してやれ」

「はい！」

風を巻いて瞳が通に迫った。

「うわ！」

完全に虚を突かれた通は全く防御する事なく、瞳の正拳を顔面に食らった。

「やりい！」

瞳は大喜びしている。

「うっ……」

通は口から血を流し、瞳を見た。

『通、相手はあんたと条件が一緒なんだ。気を抜くと本当に殺されるよ』

エンジェルの声が忠告する。

「わかってるよ。わかってるけど……」

通は星の数ほど喧嘩をして来たが、一度も女を殴った事はない。いや、暴力を一切振るった事がないのだ。それは彼の中の絶対的な掟だ。それだけは、例えば地球を賭けられても破れない。

「何ボサツとしてんのよ、兄ちゃん！」

瞳のハイキックが後頭部を襲う。

「ぐっ！」

通はそのまま前のめりに倒れた。

「まだ早いわよ。全然楽しめてないわ！」

瞳は顔面血だらけの通を髪を掴んで引き起こし、

「おらあ！」

と膝で腹を蹴った。

「うぐ……」

また崩れ落ちそうになる通を瞳が引き起こす。

「まだまだよ！」

連続の膝蹴りが、通の腹に突き刺さる。

「ゲヘエ……」

通は口から血を吐いた。

「つまないわ、兄ちゃん。反撃しなさいよ」

瞳は全く抵抗しない通を嘲り、蹴り倒した。

「私も気分悪いのよ。こんな一方的なやり方はね」

「そう、じゃあこつちも行くわよ！」

エンジェルは通の意識を閉じ込め、自分の身体を動かした。

「ええい！」

キックが瞳の顔にヒットした。

「キャッ！」

不意を突かれ、瞳は後ろに倒れた。

「あんた、通が女に手を挙げないのを知っていてこんな事をするのなら、アタシが相手だよ！」

エンジェルは、本当は自分の顔がこれ以上ボロボコになるのが我慢できなかったのだ。

「いいわよ、別に。死ぬのはあんた達なのに変わりはないから」

瞳は狡猾な笑みを浮かべて言い返した。

「バカにするなあ！」

エンジェルの反撃が始まった。瞳は今度は逆に一方的に殴られた。言うてわからない奴には、時には鉄拳制裁も必要なのよ、通！」
エンジェルはそう叫びながら瞳を殴りつけた。

「やめて、やめてよ。兄ちゃん、痛いよ。どうしてこんな事をするの？」

瞳は泣きながらエンジェルを見つめた。

「やめろ、天使女！」

閉じ込めたはずの通の意識が出て来て、エンジェルの支配を排除してしまった。

「通！」

「瞳とのケリは俺がつける」

再び通が表に出て来たのを察知した瞳は、

「兄ちゃん！」

と突進し、その顔面を蹴り上げた。

「ぐおっ！」

通はもんどり打って仰向けに倒れた。

『通、これ以上やられたら、本当に……』

エンジェルが心の中で叫んだ。通は立ち上がった。

「止めよ、兄ちゃん！」

瞳のジャンプしての踵落としが頭頂部に炸裂し、通はまた倒れた。今度は白目を剥いて。

「やった！ 勝ったわ、兄ちゃんに！」

瞳は嬉しそうにアスタロトを見た。アスタロトはニヤリとし、

「つまらんぞ、地球人。今のお前は、私を虚空の彼方まで飛ばした時より遥かに弱い。失望したよ」

瞳はアスタロトに駆け寄った。

「私はこれから地球に降り、地球人を殲滅する。お前はここからその様子を見ているがいい。そしてそれが完了したら、改めて息の根を止めてやるよ」

アスタロトはそういい残すと、瞳と共にテレポートした。

『通！』

エンジェルは呼びかけても答えない通に驚き、転移を解いた。

「通！」

通は肉体も精神もボロボロだった。エンジェルはその通の様子に涙した。

「どうしたらいいの？」

彼女は通を抱きかかえ、ミカエルの城にテレポートした。

第三章 悪ガキ復活！

「あんのバカアツ！」

自宅のベッドでフリーズが解けた美津子が、怒りの雄叫びを上げた。

「お姉ちゃん、何があったの？」

美津子より女らしいと噂の弟の晶が尋ねる。

「うるさい！」

美津子はそう怒鳴ってしまってから、

「あ、ごめん、晶。あんたは悪くないよ」

と詫びた。自分に姉が謝るなんて世界が終わるのではないだろうか、と晶は真剣に心配した。

「何だかんだ言って、美津子は矢田君が好きなのよね」

香は嬉しそうだ。美津子はキツと香を睨み、

「違う！ エンジェルさんをたぶらかしたのよ、あのチビ！」

「美津子……」

ここまで素直でないと、只呆れるしかない。

「それより、瞳さんが心配です。あの宇宙人に連れ去られてしまっただんでしょ？」

久美子がささず話を本筋に戻した。晶は久美子を見て、

「一体何があったの？」

「えーとね、後で話す」

久美子は苦笑いして誤魔化す。晶は自分だけ蚊帳の外なのがわかり、ガツカリしたが、

「う、うん」

と素直に応じた。彼は誰にも逆らえない性格なのだ。多分幼稚園児にも反論できないだろう。

「通の事だから、もう終わってるんじゃないの？」

信一が楽天的な事を言う。

「そんな簡単にはいかなかったよ……」

そこに突然エンジェルが現れた。

「エ、エンジェルさん！」

晶以外の者が、驚いて叫んだ。彼女はテレポートして来たので、本当に突然の来訪だった。

「誰？」

エンジェルと晶がお互いを見て尋ねた。信一が素早く、

「こちら、エンジェルさんでスピカ星系の女性。こちら、美津子さんの弟さんで晶君」

と二人を紹介した。

「よろしく」

エンジェルはニツコリしたが、晶は怪訝そうな顔で会釈した。

「通がどうかしたんですか？」

信一が代表してエンジェルに尋ねた。エンジェルは途端に沈痛そうな顔になり、

「瞳さんにボコボコにされて、今スピカ軍の医療施設で治療中よ」

「えええ！？」

今度は晶を含めた全員が驚いた。

「たまにはいい薬よ、あいつには」

美津子は尚も素直ではない。香が、

「美津子、いい加減にしなさいよ。久美子ちゃんに悪いでしょ！」

「ああ、香さん、私は気にしてませんから。美津子さんには、兄は迷惑しかかけていませんし」

久美子が慌ててフオーした。するとエンジェルが、

「私がここに来たのは、みんなが危ないからなのよ。すぐに逃げないと、アスタロト達が来るわ」

「ええ！？」

また驚く一同。エンジェルは全員を見て、

「アスタロトはまだ地球に降りていないようだけど、奴は地球人を皆殺しにするつもりなのよ」

「……」

さすがの美津子も押し黙り、香と顔を見合わせた。信一は腕組みをして、

「それで、通の容態は？」

「危ないわ。精神的なダメージが大きいの」

久美子が涙ぐみ、

「お兄ちゃん……」

と晶にすがりついた。晶はビックリしたが、何とか久美子を支えた。

「しっかり、久美子ちゃん」

信一は溜息を吐き、

「あいつ、女の子には絶対手を挙げないからな。しかも相手が瞳ちやんだなんて……」

「通……」

美津子は俯いて呟いた。

「みんなに通に呼びかけて欲しいんだ。あいつ、魂の抜け殻みたいでさ」

エンジェル言葉に美津子はベッドから出た。

「行きましよう、エンジェルさん。時間がないんでしょ？」

「ええ」

彼女達は、エンジェルの力でスピカ軍の医療施設へとレポートした。

その頃、アスタロトと瞳は、アメリカ合衆国の首都であるワシントンに降り立っていた。

「ここがこの地球で一番強い国か」

アスタロトはニヤリとした。

「ここを潰せば、後は思いのままという事だな」

「はい、アスタロト様」

瞳もニヤリとした。その時、アスタロトはエンジェル達が五次元に飛んだのを感じた。

「スピカ人め。何か企んでいるな」

それと同時に、彼はかつての本国であるアークトールス軍の追っ手が迫っている事も気づいた。

「サタンめ、とうとうこの私を消すつもりか。しかし、そんな事はさせぬ」

アスタロトは上空を見上げ、

「行くぞ、瞳」

瞳は背中に翼を出した。彼女は只アークトールス人の血を輸血されただけではなさそうだ。

「はい、アスタロト様」

二人は飛翔した。成層圏まで上昇すると、そこにはたくさんのアークトールス軍の兵士がいた。

「アスタロト、国家反逆罪で逮捕する」

その一団の隊長が言った。アスタロトはフツと笑い、

「そのような事がお前達如きにできるかな？ 瞳、相手をしてあげなさい」

「はい、アスタロト様」

瞳はそう応じて、凄まじい速さでアークトールス軍に向かった。

美津子は、たくさんの管を着けられてベッドで眠っている通を見てまたフリーズしそうだった。

「私……」

酷い事言つてごめん。心の中で泣きながら通に詫びた。

（通が、通が……）

美津子があまりオロオロするので、久美子が逆に冷静になった。

「美津子さん、しっかりして！ 兄は大丈夫ですよ」

「う、うん」

美津子は力なく微笑み、そばにあったソファに崩れるように座った。

「ドクター、どうなんですか？」

エンジェルが医者らしきスピカ人に尋ねた。

「何とも言えんな。肉体的には回復しているが、精神的にはまだ危険域だからな」

「そうですか」

エンジェルは久美子達に目配せして、通が眠っている治療室に入った。信一、香が続ぎ、久美子が美津子を抱きかかえるようにして入った。

「お兄ちゃん！」

久美子が涙声で叫ぶ。しかし、兄の反応はない。信一が、

「通、起きろよ。冗談はもういいからさ」

と言ったが、通はピクリともしない。

「矢田君、起きて、お願い」

香の呼びかけにも反応はない。エンジェルは悲しくて見ていられなくなった。

「起きてよ、通……」

美津子がフラフラしながら通に近づく。

「美津子さん！」

倒れかけた美津子を久美子が支えた。

「お願いよ。このままじゃ、私、ホントに嫌よ。自分が許せなくなる……。起きて、お願い……」

美津子は泣いていた。顔が涙でグシャグシャだ。

「起きてよー！」

美津子は通にすがりついた。それでも通は目覚めなかった。

「通……」

美津子は通の顔を右手で撫でた。久美子も堪え切れなくなって泣き出した。香も信一にすがって泣いている。晶まで涙ぐんでいる。

「こんなにみんなが心配してるのよ！ 起きなさいよ！」

遂に美津子は悲しみを乗り越して怒り出した。久美子達は呆気にと取られた。エンジェルも驚いて美津子を見た。

「起きろって言ってるのがわからないのか、このチビッ！」

美津子がそう叫んだ時、ドクンと心電図が大きく反応した。

「何だと、このブスがあああ！」

通が全ての管を引きちぎって起き上がった。

「通！」

美津子はまた泣き出し、彼に抱きついた。信一達は啞然としている。

「わわ、美津子、どうしたんだよ！？」

「良かったあ、このバカア……」

美津子は通に抱きついたままで泣いた。

「お兄ちゃん！」

「通！」

「矢田君！」

「矢田さん！」

「通！」

皆が、この悪ガキの復活を喜んだ。

「話にならん脆弱さだな」

瞳はほんの三分で、アークツールス軍の兵士を消し飛ばしてしまったのだ。

「ではもう一度地球へ行こうか」

「はい、アスタロト様」

瞳が答え、地上に降下しようとした時である。

「そうはいかねえぞ、カマヤロウ！」

と声がした。

「何！？ 誰だ？」

アスタロトはまるで時代劇の悪役のような顔で周囲を見回した。

「その声は！？」

瞳の形相が険しくなる。

「正義の味方、矢田通様だあ！」

キラんと輝き、彼方から飛翔して来るエンジェルが転移した通だ

った。

「バカめ、またやられに来たか。愚かな地球人だ」

アスタロトは鼻で笑った。

「さっきのような訳にはいかねえぞ、カマヤロウ！」

通は瞳を無視し、一直線にアスタロトに向かい、彼の顔面を蹴り飛ばした。

「ぐわおお！」

アスタロトは不意を突かれてこれをまともに食らい、地上に落下して行く。

「アスタロト様！」

瞳が慌てて救出に向かう。

「あんたは邪魔！」

通と入れ替ったエンジェルが、容赦なく瞳を殴り飛ばす。

「きやああ！」

瞳もアスタロトを追うように落下した。

「同じ過ちは繰り返さないのが、喧嘩屋の鉄則なんだよ！」

通がアスタロト達を追いながら言った。

その頃、スピカ軍の医療施設では、今度は美津子が倒れていた。

「しっかり、美津子！」

香が声をかける。久美子と晶が心配そうに見守っている。

「だからいない方がいいって言ったのに」

彼女は信一と顔を見合わせた。

「一日に二度も、通が他の女性とキスするのを見たら、ショックだろうからね」

と信一は肩を竦めた。

第四章 転移の秘密

エンジェルが転移した通は、見た目は美少女だが、中身は喧嘩バカの権化だ。

「おらあ、もう一発！」

落下するアスタロトに追いつき、また蹴りを見舞った。

「グホア！」

アスタロトは口から血を吐き、更に落下する。

『そうか。アスタロトの奴、地球に長くい過ぎて、身体が弱ってるのよ。チャンスよ、通！』

エンジェルが囁く。通（身体はエンジェル）はニヤリとして、

「よおおし、一気に止めだ！」

「させない！」

間に瞳が割り込み、

「通兄ちゃん、アスタロト様をいじめないでよ、瞳泣いちゃうから！」

「え？」

通は学習能力が欠如している。エンジェルはそう思った。さつきまで振り切れそうなくらい上昇していた通の戦闘計数が、急速に低下したのだ。

「ぐわっ！」

瞳の右ストレートが顔面に炸裂し、通は鼻血を吹き出しながら落下した。

「アスタロト様！」

瞳がアスタロトに抱きつく。そして落下を止めた。

「こらあ、瞳、何するんだああ！？」

鼻血を止めながら、通が戻って来た。

「アスタロト様、私達も転移をしましょう」

「う、うむ」

瞳の言葉を聞き、通は仰天した。

『おい、瞳の奴、今、転移って言わなかったか？』

『言ったわね。やばいわよ、通。もっと強くなっちゃうわ、あいつら』

エンジェルが答えると、通は、

『んなこたあどうでもいい！ 瞳とあのカマヤロウが、キスするんだぞ！』

『ああ、そうね』

エンジェルはあまり何も感じていない。

「ふざけるなああ！」

通は二人の転移を阻もうと突進した。

「危ない！」

瞳はアスタロトを抱え、逃げ出した。

「瞳、考え直せ、そいつはカマだぞ！」

「違うわ。アスタロト様は、紳士よ。兄ちゃんと違ってね！」

瞳はすっかりアスタロトの虜なのだ。何を言っても無駄である。

「瞳、五次元にテレポートしろ。ここで転移しても、あまり強くない」

「わかりました、アスタロト様」

瞳はアスタロトを抱きかかえたまま、テレポートした。

「あ、逃げやがった！」

通は慌ててテレポートした。

「う、うん……」

気を失っていた美津子は、スピカ軍の医療施設のベッドで目を覚ました。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

再び弟の晶が尋ねる。

「あ、うん……」

美津子は通とエンジェルがキスしているのを見たのを思い出し、

赤面した。

「美津子って、ホントに意地っ張りね」

香が呆れ顔で言う。美津子はムツとして香を睨み、

「何だよ!？」

「だって、矢田君とエンジェルさんがキスしたのを見て気を失うくらい矢田君の事が好きなくせに、好きじゃないとか言い張るんだもの」

香の真っ直ぐな主張に、美津子はまた気を失いそうだったが、

「ち、違っわよ! 誰だって、人がキスしてるの見たら、驚くですよ!」

「でも、私も久美子ちゃんも晶君も倒れなかったわよ」

香がそう言うのと、

「あの、僕は?」

と信一が口を挟む。香はクスツと笑って、

「だって信ちゃんは、たくさんキスしてるから慣れてるでしょ?」

「え?」

信一はそれを聞いてビクツとしたが、ちょっと天然な香は気づいていない。むしろその発言で、美津子と久美子が赤くなった。晶は意味がわからないのか、ポカンとしている。

「とにかく、矢田君が帰ったら、素直に自分の気持ち伝えなさいよ」

香が諭すように言ったが、美津子はプイッとソッポを向いて、

「私は元々素直よ!」

と言い放った。

その頃通達は迷子になっていた。

『もう、何も考えずにテレポートするから、現在地がわからないでしょ!』

エンジェルはプリプリして言った。

『わ、わりい』

さすがに通も焦っていた。

『取り敢えず、我が軍の本部に戻るわよ』

エンジェルが身体を支配し、テレポートした。

瞳とアスタロトは、アスタロトの城に戻っていた。

「地球人め……」

地球の大気成分は、アークツールス人にはかなりきついのだ。アスタロトは限界を超えてしまい、衰弱しているようだ。

「アスタロト様」

瞳が潤んだ目でアスタロトを見ている。

「瞳、さあ、転移しよう。お前と一つになれば、もっと強くなれる」
「はい、アスタロト様」

アスタロトと瞳は見つめ合った。転移とは、男女の恋愛関係とは違い、あくまで力の一つにする方法である。よって、何もその方法は「キス」に限られたものではない事がわかって来ている。

「瞳……」

しかし、エンジェルもアスタロトも、下心があるから「キス」を選ぶのだ。しかも、瞳の場合、アスタロトによって暗示をかけられており、彼女自身もアスタロトとの「キス」による転移を望んでいた。

「アスタロト様」

二人は口づけし、転移が始まった。アスタロトの身体が輝き、瞳に溶け込む。そして瞳が輝き、やがて二人は一つになった。

「わははははは！」

身体は瞳、心はアスタロト。通にとつては最悪の形態になった。
「私は完全に回復し、しかも瞳の力も手に入れた。もはや、サタンすら恐れる必要はない！」

アスタロトは軽く気を解放した。すると、城の壁が吹き飛んだ。
「想像以上だ。私は最強になった！」

アスタロトは瞳に下心はあったが、恋愛感情はない。只彼女を利用して強くなりただただだけだ。

「さてと。手始めにスピカ人共を血祭りにあげるか」
瞳の顔で、アスタロトは狡猾な笑みを浮かべた。

通達は、スピカ軍の医療施設に到着していた。

「転移、解くよ」

エンジェルがそう言うと、

「待って！」

と香が止めた。

「どうして、香ちゃん？」

エンジェルが不思議に思っただけで尋ねた。

「だって、今解くと、また出る時にキスするんでしょ？」

「え、ええ、まあ……」

エンジェルは、香達が、転移するのにキスする必要はない事を知っているのではないかと思い、ギクツとした。

（でも、違うみたい）

彼女は、香達が心配している事が別にあるのに気づいて、ホッとした。

「また矢田君がキスすると、倒れる人が約一名いるから」

香はチラッと美津子を見た。すると美津子は、

「何よ、別に私は関係ないわよ」

「無理しない方がいいわよ、美津子」

香は嬉しそうに忠告する。

「無理なんかしてないわよ」

「そう？」

それを聞いていた通が痺れを切らし、

「ああ、面倒くせえ事言っただけじゃねえよ！」

と怒鳴り、転移を解いてしまった。

「あら」

強制的に通から分離されたエンジェルは驚いた。

「こんな事もできるんだ」

すると美津子は、

「ほーら、ごらんなさい。通はね、エンジェルさんとキスしたいから、転移を解いたのよ」

と勝ち誇ったように言った。するとその言葉にカチンと来た通が、
「だったら悪いか？」

と開き直る。その言葉に今度はエンジェルがドキツとした。

（やだア、通つてば。勘違いしちゃうじゃないの）

「悪くないわよ、別に。好きなだけキスすればいいじゃないの、このチビ！」

「何だと、このブス！」

二人の罵り合いはしばらく続いたが、警報によって止まった。

「何だ？」

通がエンジェルを見た。

「未確認飛行物体が接近中らしいわ。しかも、サタン級のね」

「何イツ！？」

通達は仰天した。エンジェルは近くにあった通信機で連絡を取り、

「どうやら、貴方のご親戚の方のようよ、通」

「瞳か！？」

通は駆け出した。

「待ちなさいよ、通！」

エンジェルが慌てて追った。

「どうするの、美津子？」

香が尋ねた。美津子は、

「知らないわよ」

と顔を背ける。香は信一と顔を見合わせた。

第五章 一縷の望み

通とエンジェルは、医療施設の外に出ていた。

「天使女、その、あの、何だ、行くぞ！」

周囲に誰もいないのを確かめ、通は顔を真っ赤にしてエンジェルを見た。そして目を瞑る。

「……」

エンジェルは、美津子が二人のキスを見て失神した事を思い、躊躇した。

（ホントは、キスしなくても転移できるって知ったら、アタシは通に確実に殺されるわね）

真実を話すのはあまりにも危険度が大きいので、エンジェルは言うのをやめた。

「行くよ、通」

「お、おう」

それでもエンジェルは通が好きなのだ。絶対に通と美津子の間に入ることなどできないとわかっているのに、彼の事を諦められないのである。

（これで最後にしよう。何としても、アスタロトをやっつける）

そんな思いもあったせいなのか、エンジェルのキスは今までで一番濃厚だった。

「フゲフゲ！」

通がもがいた。しかしエンジェルは構わずに続け、転移した。

「よし！」

通は転移が完了したのを確認すると、気合一発、飛翔した。今まで経験した喧嘩の、どれよりも壮絶なレベルの戦いを始めるために。

「通……」

香達が止めるのも聞かず、美津子は通を追いかけて来たが、すでに二人は飛び立った後だった。

（私、素直になるから……。だから、生きて帰って、通。そして、必ず、瞳ちゃんを助けてよ）

美津子は目を潤ませて祈った。

「さすがにあの状況の美津子をからかう事はできないわね」

香が言う。信一が、

「いつもあのくらい素直だといいいんだけどね、美津子さんも」

「辛いよね。エンジェルさんの事だけじゃなくて、相手は矢田君の従妹いとこなんでしょ？」

香は信一を見上げた。

「そう。しかも、ある意味恋敵だしね」

信一はいつになく真剣な表情で答えた。

「え？」

香は驚いた。それは知らなかったのだ。

「瞳さんは、ずっと兄の事が好きだったんです。だから……」

瞳の第一被害者の久美子が言った。晶も驚いて久美子を見ている。

「そうなんだ。美津子は知ってるの、それを？」

香は久美子を見た。久美子も香を見て、

「ええ。知ってます」

そう、美津子は瞳の第二の被害者だから。

「晶君は男の子だったから、瞳さんには可愛がられてたのよね」

久美子の何気ない一言に、晶はビクツとした。

（何か、僕だけ苛められていなくて、申し訳ない気がしてしまう…

…）

被害妄想な男である。

「む？」

瞳の姿をしているアスタロトは、前方から接近して来る者に気づいた。

「来たか、地球人め。もはやお前如きでは相手にならんぞ」
アスタロトはニヤリとした。

「私の相手はミカエル只一人。他は邪魔なだけだ」

そして通達もアスタロトを視認していた。

「瞳か？ あのカマヤロウは……？」

通は周囲を見回した。するとエンジェルが、

『アスタロトは瞳ちゃんに転移してるよ。あいつ、瞳ちゃんを表に出して、あんたと戦うつもりだよ』

「何だと！？ どこまで卑怯なヤロウなんだ、あのカマは！」

通は激怒し、加速した。

「一瞬で終わりにするぞ、天使女！」

『そう願いたいけどね』

エンジェルは、瞳の姿をしたアスタロトから、ミカエルにも匹敵しそうなパワーを感じていた。

（勝てるのかな、アタシ達は？）

通の強さは知っている。しかし、アスタロトは単体でも以前より強くなっていた。それに加えて、通と同じく超人化した瞳にアスタロトが転移したのだ。そのレベルアップは想像するだけで恐ろしかった。

「愚か者め。死にに来たか？」

アスタロトは通達に哀れみすら感じられるほど、自分達の勝利を確信していた。

「何！？」

通はそんな余裕たつぷりのアスタロトの隙を突き、凄まじい勢いで間合いを詰めた。アスタロトは一瞬対処に遅れた。

「おらああ！」

エンジェルが意志を支配し、瞳の顔を容赦なく殴った。

「ぐおっ！」

アスタロトは後ろに飛ばされた。

「おのれ！」

しかしダメージはほとんどない。その上、高速で傷が治癒する。
「何、あれ？」

エンジェルは、アスタロト達の転移が、通常言われているものと違うのに気づいた。

「やばいかもよ、通」

彼女は額に汗を滲ませた。

その頃、スピカ軍の総司令部では、ミカエル将軍がアスタロトの分析を急がせていた。

「アスタロトの転移は、通常のものとは違うようだ。何がどう違うのか、奴の放つエネルギーを解析し、エンジェル達の支援をする」

ミカエルはアスタロトの存在に脅威を感じていた。

（場合によっては、この私が出なければならんな）

彼は右の拳をギュツと握り締めた。

「今度はこちらから行くぞ、地球人！」

アスタロトは反撃を開始した。

「うわあ！」

いきなりエンジェルから意志を返された通は目の前に迫って来る瞳を見て後退りした。

「死ね！」

瞳の顔で、瞳の声で、アスタロトが襲い掛かって来る。わかっていても、通には反撃ができない。

「く！」

防御にも限界がある。

『通、反撃してよ！ 防御ばかりじゃ、アタシの身体が保たないよ』

エンジェルが泣き言を言う。でもそれは真実だ。彼女もこのまま身体を破壊されたくはない。

「くそ！」

通は瞳から離れ、逃げ出した。

「待て、地球人！」

瞳の姿のアスタロトが、エンジェルの姿の通を追う。

『通！』

エンジェルが叫ぶ。通は、

「わかってるよ！ でも、いくら中身はカマヤロウでも、姿は瞳だ。無理だよ、殴れねえ。交代してくれ」

『わかったよ』

エンジェルは通の意識を押し付け、肉体を支配した。

「おらあ！」

キックが瞳の顔面を襲う。

「きゃあああ！」

瞳の声でアスタロトが悲鳴を上げる。

『やめろお、天使女アツ！』

通はわかっていながらも、止めに入ろうとする。

「ダメだよ、通。このままずっとこんな事を続けられないって！」

通は強制的にエンジェルと入れ替わった。

「わかってるよ、わかってるけど！」

誰よりもどかく思っているのは通自身なのだ。

「やい、天使女、あのカマヤロウと瞳を引き離す方法はねえのかよ？」

「？」

『そんな方法があつたら、実践してるわよ！』

エンジェルも苛ついていた。

（アスタロトめ。どこまでも卑怯な奴……）

エンジェルはここまで通を苦悩させているアスタロトの狡猾さに腹が立った。

「通兄ちゃん、アスタロト様のために死んで！」

瞳がニヤリとして通に向かって来る。

「瞳、そんな奴と一緒にになるな！ お前は、お前は！」

通はそれでも瞳の攻撃を防御するだけで、反撃をしなかった。

「ぐあああつ！」

通はまともに正拳を食らい、吹っ飛ばされてしまった。

（でも妙だ。もし、アスタロトが、計算上の力をそのまま出してい

るのなら、私達がここまで耐えられるはずがない。どういう事？）
エンジェルは、その事が気にかかっていた。

ミカエルの命令で解析を進めていた技師達が、遂にその謎を解いた。

「判明しました。エネルギーを解析したところ、三回の輸血をしたものとの結果が得られました」

「三回？」

ミカエルは技師の一人を見た。技師はミカエルを見て、

「はい。まず最初にアスタロトの血を地球人の少女に輸血し、反応が出るのを待つてアスタロトに少女の血を輸血します」

「何と……。そのような方法、危険ではないのか？」

ミカエルは、アスタロトの執念を感じた。

「はい。場合によっては、拒絶反応で死に至る可能性もあります。その危険性を知りながら、更にアスタロトはその血をもう一度少女に輸血したのです」

ミカエルの右手が震えた。

「何という事を！ 何という事をしたのだ、あの男は！？」

ミカエルはモニターに映る通達の戦いを見た。

「私が出る。もはやこの戦いは、正当なものではない」

「しかし、閣下……」

技師達は驚愕して意見した。しかしミカエルは、

「すぐにサタンにも救援を要請しろ。アスタロトはアークツールス軍の敵でもあるはずだからな」

「は、はい」

彼等はミカエルの迫力に気圧されて、返事をした。

「エンジェル、撤退しろ。そいつはすでに化け物だ。私が戦う」

ミカエルはエンジェルに呼びかけた。

「それはやめてくれ、ミカエルさん」

通の声が答えた。ミカエルはハツとしたが、

「通か？ もうその少女は、お前の知っている地球人ではない。アスタロトの道具となってしまったのだ。私が倒す。お前は撤退しろ」
「やだね。この喧嘩は俺が売られたものだ。相手が誰だろうと、俺がケリを着ける。邪魔はしないでくれ」

「……」

ミカエルには、通の辛さ、悲しみ、怒り、決意がよくわかった。
「了解した。但し、少しでもお前が危ない時は、出るぞ」

「ああ」

ミカエルはフツと笑った。

「どこまでも計測不能な男だ」

エンジェルは呆れていた。ミカエルの言葉をはねつけ、まだ戦おうとするこの喧嘩バカは、一体何を考えているのかわからなくなっ
た。

（でも、一つ気になっている事がある）

エンジェルはそれを通に伝える事にした。

「アスタロトの強さは、こんなものじゃないはずなのよ。何故か、
力を出し切れていないの」

「どういう事だ？」

通は攻撃をかわしながら尋ねた。

「これは可能性の問題なんだけど、もしかして、瞳ちゃんの意志が、
アスタロトの力を抑えているんじゃないかしら？」

「ああ？ わかりやすく説明しろ」

通は苛ついて怒鳴った。

「つまり、瞳ちゃんは貴方と戦いたくないと思っているかも、とい
う事よ！」

エンジェルの言葉に、通はハツとした。

「瞳はまた、完全にカマヤロウに支配されている訳じゃねえって事
か？」

「その可能性があるっただけよ。そう断言するにはデータが少な過

ぎるわ』

「そんな理屈はどうでもいい！ その一点に賭けて、瞳を助けて、カマヤロウをぶっ飛ばす！」

通は瞳に突進した。

「何！？」

いきなり向かって来た通に驚き、アスタロトは後退した。

（何だ？ こいつ、急に戦闘計数が上昇したぞ？）

アスタロトは前回、不可解な通のパワーアップで敗北しているの
で、そのトラウマが甦りかけた。

「こいつ、まだ何かあるのか？」

アスタロトは警戒し、通から離れた。

「俺はできるだけ時間を稼ぐ。その間に、いい方法を考えろ、天使
女」

『えーっ？ 一緒に考えてよ、通』

エンジェルが泣き言を言うつと、通はニヤツとして、

「俺は考えるのは苦手だ。任せた」

と言い放った。

『全く、勝手なんだから。わかった、何とか考えてみるよ』

「頼んだぜ、天使女」

通はアスタロトが距離を取ってくれた事に感謝していた。

（待ってるよ、瞳。何としても、お前は助けるからな）

第六章 通怒りの一撃！

矢田通は、従妹である矢田瞳の姿をした強敵アスタロトと睨み合っていた。

「どうした、地球人？ 怖気づいたか？」

アスタロトが挑発する。いつもの通なら、そんな事を言われれば絶対に突っ込んでいるはずだが、今回はそれはしない。いや、できないのだ。

（畜生……。もし、本気でぶん殴れば、奴を倒せるかも知れねえ。でも、そんな事をしたら、瞳が……）

彼は瞳を傷つけたくない。そして何より、女の子を殴りたくないのだ。

「本当に怖気づいてしまったようだな。情けない。もはや、お前は私と戦う資格がない。ミカエルを出せ」

アスタロトはニヤリとして言い放った。

「あいつ、調子に乗って！」

エンジェルがいきり立つ。

「天使女、あんな挑発に乘せられるな。熱くなるんじゃないよ。サツサといい手を考えろ」

あんたにだけはそんな事言われたくない、とエンジェルは思った。「何だ？ ミカエルも怖気づいたのか？」

アスタロトはどんどん調子に乗って来た。

「あのバカがあ！」

エンジェルが沸騰寸前だ。しかし、通は、

「だから熱くなるなって言ってるんだろ、天使女！ そんな暇あるなら、考えろ」

「わかったよ」

エンジェルも、乗せられ過ぎの自分を恥じた。

「ほう。ここまで言っても動かぬか。ならば、こちらから行くぞ、

地球人！」

アスタロトは狡猾な笑みを浮かべ、通に向かって来た。

「死ね！」

通はアスタロトの正拳をかわした。続けざまに回し蹴りが襲いかかる。

「くっ！」

それも紙一重でかわす。

「逃げるだけか、地球人！？ 面白くないぞ」

アスタロトはそう言いながら、攻撃を続けた。

「う！」

蹴りが顔を掠めた。エンジェルの美しい顔がスパッと切れ、血が流れる。

『わああん！ 通、顔だけは勘弁してよお』

エンジェルの泣きが入った。

「わかったよ」

通は顔を両手でガードし、瞳の姿のアスタロトを睨む。

「そんな事をしても、無駄だああ！」

アスタロトの猛攻が始まった。目にも留まらぬラッシュ攻撃である。

「うおお！」

通はそれを全力でガードし、かわし続けた。

「貴様、それでも戦わぬか！？」

アスタロトの怒号が飛ぶ。だが、通は反撃しない。

「おりゃああ！」

次は蹴り。触れただけで粉微塵になりそうな凄まじさである。

「くっ！」

通はたまらなくなり、下がった。

「逃がさぬぞ、地球人！」

瞳の顔がだんだん可愛さを失って行く。

「おい、天使女、瞳の顔が、カマヤロウに似て来たぞ」

通がそれに気づいた。

『同化が始まってるのかもよ』

「どうか？」

通はキョトンとした。

『アスタロトの奴、何か特殊な方法で転移してるみたいなのよ。でなければ、普通は姿がアスタロトで、中身が瞳ちゃんになるはずよ』
「そうなのか」

通は凶悪な顔つきの瞳を見た。

『このまま転移が続いていると、瞳ちゃんがアスタロトに同化されて、彼女の存在が消されてしまうかも知れないわよ』

「何だって！？」

通は仰天した。

「冗談じゃねえ！ 瞳がカマヤロウになるって事は、カマヤロウが俺のいところになるって事か！？」

『いや、そこを心配するんじゃないくてね……』

エンジェルは呆れてしまった。

「くそ！」

通は逃げるのをやめ、アスタロトを睨んだ。

「許さねえ！ そんな事は、絶対にさせねえぞ、カマヤロウ！」

アスタロトは、急に止まった通を見て警戒し、

「何だ？ 何をするつもりだ？」

と眉をひそめた。

「ダメだ、そうだとしても、無理だ！」

通はそれでも攻撃する事ができない。アスタロトは通の戦闘計数が低下するのを感じ、

「瞳よ、あいつの強さを引き出す方法はないのか？ このまま勝っても、つまらんからな」

アスタロトは、前回自分を虚空の果てまで吹っ飛ばした時の通を倒したいのだ。

『アスタロト様、一つだけ方法があります』

瞳が答えた。アスタロトはそれを知り、
「そうか。そんな事で良かったのか。ならば話は簡単だ」
と呟き、ニヤリとした。

その頃、美津子達は、医療施設の中のスクリーンで、通達の戦いを見ていた。

「どうしたんだろう？ 二人共動かなくなったわ」

香が信一に囁く。信一はスクリーンを見たままで、

「お互い警戒してるんだらうね。理由はそれぞれ違うだらうけど」
美津子は目を潤ませてスクリーンを見ていた。

「通……」

そんな美津子を、心配そうに見ている久美子と晶。久美子は晶と手を握り合っていた。晶はそのせいでドキドキしている。姉の事も心配だが、今の自分の状況も心配だった。

ミカエルも、司令部のスクリーンで戦いを見ていた。

「アスタロトめ。何を企む？」

彼は腕を組んで眉を寄せた。

アスタロトは通をせせら笑い、

「何だ、空元気か、地球人。情けないな」

「何だと、こらあ！？」

通が挑発に乗せられそうになる。

『ほら通、ダメでしょ！』

「ああ、そうだった」

通はエンジェルに窘められてハッ^{たしな}と我に返る。

「ほう。どこまで我慢できるかな？ お前は堪え性がないからな」

「……」

通は何も言い返さない。アスタロトはフツと笑い、

「腰抜けか、やはり。倒すまでもない。消えろ、チビ」

と言った。

「げ！」

スクリーンで見ていた信一と香、久美子がビクツとした。美津子は気づいていない。そして、鈍感な晶も。

「知らないぞ、もう」

信一はスクリーンに背を向けた。香も両手で顔を隠す。

「瞳ちゃんが可哀相」

「お兄ちゃん……」

久美子もスクリーンから目を逸らせた。

「何なのよ、みんなして？」

美津子と晶の姉弟は、全く意味がわからないままだった。

「今、何て言った？」

通の戦闘計数が跳ね上がる。アスタロトは計測器がたちまち振り切れたので、狂喜した。

「おおおお！ それだ、それだ！ それこそあの時と同じ！ あの時のお前だ！ そのお前を倒してこそ、この戦いに意味があるのだ！」

アスタロトはこれから起こる事にまるで気づく事なく、絶叫していた。

「今何て言ったって訊いてるんだよおお！！」

通が壮絶な勢いでアスタロトに向かった。

「ぐおおおおお！」

瞳の姿なのに、通は容赦なく殴った。

「ブへ、ゲホ……」

アスタロトは反撃どころか、防御すらできない。

「訊いてる事に答える、カマヤロウ！」

いや、そんな状態では、答える事なんてできないし。エンジェルはそう思い、少しだけアスタロトを哀れんだ。そして、前回突然通

が反撃し、勝利した理由を知った。

『つまり、NGワードを言ってしまった訳ね、アスタロトが』

「オラオラオラ！」

通の猛攻は続く。瞳の顔はボコボコになって行っただ。

「答えるーっ、カマヤロウがああ！」

渾身の一撃が決まった。

「うおおおお！」

するとどうした事か、瞳の身体からアスタロトが分離し、そのまま遙か彼方へと飛んで行ってしまった。

『どういう事？』

エンジェルは呆然としてそれを見ていた。途端に通の意識が飛んだ。

「ああ！」

エンジェルは慌てて入れ替り、落下し始めた瞳をキャッチした。

「大丈夫、瞳ちゃん？」

無事なのか心配で、声をかける。

「平気です……。通兄ちゃんとあるこいは、あいつだけ殴っていたんですよ」
瞳が答える。確かに彼女の顔は全く傷ついていなかった。

（そんな事ってあるのかな？）

エンジェルは頭が混乱しそうだった。

こうしてまた、アスタロトは矢田通に敗れ、虚空の果てに消えたのである。

エピローグ 永遠にさよなら

アスタロトの生体反応はまだ確認できていた。死んではいないらしい。

「今度こそ戻っては来られまい。いや、もう戻ったとしても、通と戦おうとは思わんだろう」

司令部のVIPルームで、ミカエルが言った。彼は通達を司令部を救ってくれたお礼に招待したのだ。

「そうだいいけど。ホントにしつこいカマヤロウだからさ」

「サタンも警戒を続けると言っていて来ている。仮に戻って来ても、今度は彼がアスタロトを許さんさ」

ミカエルはフツと笑って言った。

「ミカエル様って、素敵ね、通兄ちゃん」

瞳が小声で言う。通は呆れて、

「お前のその軽はずみな性格が、みんなに迷惑かけた事を反省しろよ、瞳」

「はい」

大好きな通兄ちゃんに窘められ、瞳はスゴスゴと引き下がった。

「では、我々は準備があるので失礼する」

ミカエルは部屋を立ち去りながら、

「エンジェル、ゆつくり別れを惜しみなさい」

「はい」

ミカエルはそのままVIPルームを出て行った。

「今の、どういう意味？」

不思議に思った信一が尋ねる。エンジェルは苦笑いして、

「アタシ達、地球侵略を諦めたの」

「え？」

美津子と香は顔を見合わせた。

「そう言えば、エンジェルさんて、侵略者なんだっけ」

改めてギクツとする。

「地球の住環境が、私達に合わないんだ。最初は改善しようと思ったんだけど、それには何百年もかかるらしいし」

エンジェル言葉に晶が反応した。

「地球人類が、地球を汚染してしまったから、あなた方は侵略を諦める、という皮肉な結果になったのですね」

「そうね」

エンジェルは寂しそうに言った。美津子が通に、

「あんた、一緒に行きたいんでしょ？」

「何でだよ？」

通はそう言ってしまったから、しまったと気づいてエンジェルを見た。

「いいよ、気を使わなくても。アタシはモテるんだから。あんただけが男じゃないし」

「あのなあ……」

あまりにも身もフタもないエンジェルの言い方に通はムツとした。

「アハハ、ふられたあ！」

美津子が笑いながら言ったので、

「う、うるせえよ、ブス！」

「何よ、チビ！」

エンジェルはギクツとしたが、香達は何も反応しない。

「あれ？」

通も切れた様子はない。

（何だ、そういう事か）

やっぱり美津子には勝てない。エンジェルはそれを改めて感じた。矢田君で、美津子に何言われても怒らないのね」

香が面白がって言う。

「な、何よ、香。どういう意味？」

美津子は未だに気づいていないようだ。通もムツとして香を見た。何だよ、香？ 何の事だよ？ 俺は年中このブスに怒ってるぞ」

「何よ、チビ！ もういつぺん言ってごらんなさいよ！」

美津子がまた「NGワード」を言うが、通は切れない。だから美津子は気づかないのか、とエンジェルは思った。

「ああ、何度でも言ってやるよ、ブス。これで満足か、ブス！」

「あんたねえ！」

美津子が通に掴みかかるのを香と信一が止める。

「お兄ちゃん、いい加減にしてよ！」

久美子が通を窘める。瞳は呆れてそれを見ていた。

「勝てないなあ、美津子姉には……」

彼女はエンジェルを見て、

「そう思うでしょ、貴女も？」

と同意を求めた。エンジェルは肩を竦めて、

「そうね」

そしていよいよ地球に降りる時が来た。通達は転送装置のある場所に移動していた。

「瞳ちゃんは、検査の結果、異常は見られないわ。今後も何も起こらないと思うけど。もし、心配なら連絡頂戴」

エンジェルがそう言うと、

「お前なあ、隣町に引越すんじゃないやねえんだぞ？ どうやって連絡するんだよ？」

通がすかさず突っ込む。しかしエンジェルは、

「アタシ達はどんなに遠く離れても、会話できるのよ、通」

と通の耳元で囁いた。途端に通は真っ赤になった。

「貴方とアタシは血を分け合ったの。だから、いつも一緒よ」

エンジェルの言葉に、ほんの少しだけ美津子がギクツとした。

「でも心配しないで、美津子ちゃん。通を連れて行ったりしないから」

「べ、別に私は……」

美津子は赤くなりながらも必死に否定した。

「こいつは関係ねえだろ、天使女！」

通も赤くなった。

「じゃ、地球に送るね」

エンジェルは急に真顔になり、通から離れた。

「多分、永遠にさよならね。みんな、元気だね」

「そんな事言わないで、たまには遊びに来て下さい、エンジェルさん」

信一がいつもの乗りで言う。エンジェルは苦笑いして、

「ありがとう、信一君」

いつの間にか、美津子、香、久美子、瞳が涙ぐんでいる。

「みんな、そんな顔しないでよ。笑って別れましょ？ ね？」

エンジェルはそう言いながらも目を潤ませている。

「元気だね、エンジェル」

通が言った。エンジェルはニコツとして、

「やっと名前で呼んでくれたね、通。ありがとう」

「お、おう」

通は照れて俯いた。

「元気だね、エンジェルさん」

美津子達が言った。

「みんなもね」

エンジェルは転送装置のレバーに手をかける。

「さよなら！」

レバーが下がり、通達を光が包む。

「じゃあな、エンジェル」

もう一度通が言った。エンジェルはその声を聞くと、我慢できなくなり、泣き出した。

「大好きだよ、通！」

その声は通に聞こえたかどうか、エンジェルにはわからなかった。通達は光と共に消えていたからである。

そして通達は、自分達の住む町に戻った。

「帰れたな」

通が呟く。

「そうだね」

信一が答える。

「あのね、通兄ちゃんとおるにい」

いきなり瞳が話し出す。

「何だよ、瞳？」

ビクツとしながらも、通は瞳を見た。美津子達も瞳を見る。

「私、家出して来たの。だから、兄ちゃんの家に住ませてくれない？」

「な、何ーっ!？」

これには久美子も驚いていた。

「そんな、家出だなんて。瞳さん、どうしたんですか？」

「ちよっとお父さんと喧嘩しちゃってさ」

「そのくらいの事で家出するな!」

通が怒ると、

「兄ちゃんだって、昔、漫画捨てられただけで家出したじゃないの。言われたくないわ」

瞳が逆襲した。美津子と香は顔を見合わせて笑った。

「う、うるせえよ! そんな昔の事、持ち出すんじゃない!」

通は赤くなつて怒った。

「それにさ」

瞳はいたずらっぽく笑って、

「久しぶりに兄ちゃんと一緒にお風呂入りたいし」

通はその発言に崩壊しそうだった。久美子も呆れている。美津子と香は目が点になつてしまった。

「アハハ、ウソウソ! もういくら何でも、一緒には入れないよ」

瞳はゲラゲラ笑って通を指差す。

「お前なあ……」

通は脱力してしまった。

「兄ちゃん」

瞳が真顔で言った。

「何だよ？」

それでも通は何かあると思って警戒している。

「助けてくれてありがとう。兄ちゃんなら、必ず勝つって思っただよ」

「あ、ああ」

違う話か、と安心する通。瞳はまたニヤツとして、

「でさ、私と兄ちゃんの子供なら、世界征服できると思わない？」

「何ーッ!？」

しばらく瞳におもちゃにされる通だった。

その男、不器用につき

彼の名は^{おおやまひろし}大山大。私立の名門である杉野森学園中等部の二年だ。身長二メートル超、体重百キロ超。すでに柔道界や相撲界、更には格闘技界からオファーがあるほどの体格だ。

しかし、彼はそのような道に進むつもりはない。

「勿体ないよ、大山君」

進路指導の先生が言う。

「自分は不器用ですから」

大山は、ある映画俳優の「決め台詞」を真似て拒否した。

彼には、たった一つだけ願がある。自分の尊敬する高等部二年の矢田通のそばにいる事。

矢田通とは、その名を関東中に轟かせている喧嘩バ力である。宇宙人とも戦って二度勝ったという噂だ。大山の憧れの先輩なのだ。

しかし、大山の本心は、その矢田通でさえ知らない。矢田通には全く顔が似ていない妹がいる。彼女の名は久美子。中等部は言うに及ばず、高等部、近隣の中高に至るまで、その名を知られた美少女である。大山が、本当にそばにいたいと思っているのは、通ではなく、久美子なのだ。しかし彼はそれを誰にも言っていない。当然の事ながら、久美子もそれを知らない。

「大山だ！」

付近の中学生のワル共は、大山の強さを知っているため、彼を見かけただけで逃げ出す。高校のワル共も、大山の強さと、彼が矢田通と親しいことを知っているため、決して絡んで来ない。むしろこびる連中すらいる。大山はそういう人間が一番嫌いなので、歯牙にもかけないが。

「大山君」

いつものように校門のところで見張りをしていると、久美子が声をかけて来た。

「あ、く、久美子さん」

純情な彼は、間近だと憧れの人の顔すら見られない。

「どうしたの、こんなところで？ 彼女を待ってるの？」

久美子の爽やかな笑顔が眩しくて、大山は俯いたままだ。

「いえ、違います」

久美子さんを待つていたんです、とは決して言わない。

「今日は、大田君はいないのですか？」

大山は数少ない共通の話題を振った。久美子は苦笑いして、

「晶君は塾だつて。冷たいのよね」

晶とは、矢田通の幼馴染である大田美津子の弟で、久美子のボーイフレンドだ。だから、大山は、晶がいない事に少しだけホツとした。

「では、自分がお供致しますので」

「平気よ。もうこの前みたいない事はないから」

久美子は笑顔で言った。

「しかし……」

心配性な大山はそれでも不安だ。

この前のような事とは、矢田通に恨みがある連中が、久美子を攫さらつて通との喧嘩を優位に進めようとした一件だ。大山は真相を知らないのだが、その連中は久美子が全員倒している。だからそれ以降、そんな間抜けな事をするバ力はいないのだ。

「矢田久美子も強い」

その噂がワル共に広まるのに一週間とかからなかった。しかし、

大山の耳にはその噂は届いていなかった。

「じゃ、ウチまで送つてね、大山君」

久美子はいあまりに悲しそうな顔をする大山を見かねて言った。

「は、はい！ 全力でお守りします」

「ありがとう」

二人は家路に着いた。

久美子と大山の取り合わせは、本当に奇異だった。誰もが振り返る。大山は堪りかねて、

「あの、ご迷惑ですか？」

と囁いた。久美子はニコツとして、

「どうして？ 全然迷惑じゃないよ。大山君がいてくれるから、誰も絡んで来ないし」

「そ、そうですか……」

大山はその言葉に赤面した。しかし、ワル共が近づいて来ないのは、久美子が通の妹だと知られているのと、実は久美子が強いという事が知られているからだ。でも久美子は、晶だけでなく同級生全員に、自分が格闘技を習っている事を明かしていない。晶には、自分が強い事を知られたくないという乙女心なのだ。嫌われそうな気がするらしい。久美子は晶に「LOVE」なのだが、晶は自分に「LOVE」だと思っていないのだ。お互い勘違いしているカップルである。

「！」

その時だった。舗道の向こうに、その辺りの顔役だと言われているヤクザの幹部が組員を引き連れて現れた。

（どうする？）

大山は考えた。人通りも少ないから、喧嘩になっても構わないが、久美子さんを巻き込むわけには行かない。彼は考えあぐねていた。

「おお！」

組員の一人がこちらを見て叫んだ。すると全員がこちらを見て歩調を速めた。

「！！」

大山はドキドキしていた。

（あの人数じゃ、とても勝ち目はない……。どうする？）

幾筋もの汗が彼の額を伝わった。

（俺は死んでも久美子さんを守る！）

大山は死を覚悟した。その時である。

「ああ、久美子さん、今お帰りですか」

全員、久美子と顔見知りだった。大山は腰が抜けそうになった。

「大丈夫、大山君？」

ヤクザと談笑した後、久美子は大山が落ち込んでいるのに気づき、声をかけた。

「はい、大丈夫です。すみません、自分、不器用なので……」

「平気よ、大山君。私、凄く感謝してるから」

久美子の天使のような笑顔に、大山は嬉し泣きをした。

「どうしたの、大山君？」

驚く久美子。大山は泣きながら、

「自分、大丈夫です。不器用なもので……」

と言い続けていた。悲しいまでに純粋な男である。

その男、不器用につきその2

彼の名は^{おおやまひろし}大山大。私立の名門である杉野森学園中等部の二年だ。身長二メートル超、体重百キロ超。すでに柔道界や相撲界、更には格闘技界からオファーがあるほどの体格だ。

その風貌から同級生だけではなく、高等部のワル共からも一目置かれ、恐れられている。しかし、そんな彼にも大きな弱点があった。それは「女子」。彼は想像を絶するほど女性に対してウブである。クラスの女子達は大山を怖がって近寄らないので平気なのだが、コンビニやファミレスでレジが女性だと汗まみれになってしまうのだ。そこまでいくと「対人恐怖症」ではないかと悩んだりもしている。彼が汗まみれなのをレジの女性が気づくと、必ず「キモい」という顔をされるのも、そんな反応を助長していた。

それほどウブな大山にも好きな女子はいる。尊敬する高等部の矢田通の妹にして、中等部男子のアイドルである矢田久美子だ。ケンカバカの通とは似ても似つかないほどの美少女で、頭脳明晰、周囲の人望も厚い。とても大山に釣り合うとは思えない存在だ。

（だから、自分は久美子さんを陰ながらお守りする役目に徹する）
大山はあくまで片思いのままが良いと思っている。悲しいまでに一途で純粋な男である。

「おはよう、大山君」

校門の前でその久美子に声をかけられた。

「お、おはようございます、久美子さん」

すっかり狼狽える大山である。久美子はクスツと笑って、

「私は同級生なんだから、ございますはいらないよ」

「いえ、でも久美子さんは通さんの妹さんですから……」

顔を近づけて来る久美子にドギマギしながら、大山は答える。

（これ以上久美子さんと話していたら、どうにかなくなってしまっ！）

「し、失礼します！」

大山はダツと駆け出し、久美子から離れた。
「変なの」

久美子は大山の思いを全く知らないで、兄である通の親しくしている男子として接している。そして、大山の風貌を怖がりもしない。

「おはよう、久美子ちゃん」

そこへ大田晶が現れた。彼も久美子を好きな一人だ。そして久美子も晶の事が好きなのだが、互いに自分の気持ちを打ち明けていない。只、兄の通は気づいており、

「久美子を嫁さんにしてくれ」

と頼まれている。頼まれた時は、

「断わったら殺される」

と思った晶だったが、もちろん彼も久美子の事が好きなので断わると言つ選択肢はなかった。

「通さんも、姉さんをお嫁にもらつて下さいね」

晶がそう言つと、通は、

「何でだよ!」

と怒った。通は晶の姉である美津子と幼馴染で、晶は昔から二人を見て来ている。当然将来は結婚するのだろうと思つていますが、素直でない通と美津子はそれを認めない。

「おはよう、晶君」

久美子ちゃんの笑顔はいつ見ても可愛い。晶はついにやけてしまふ。

「何、晶君? 気持ち悪いよ、思い出し笑いして」

「あ、ごめん」

そんな二人だが、当然一人や二人はそれを快く思わない者がいる。入学当初から二人を知っている者にはそんな大それた事を思う者はいない。何しろ、久美子は宇宙人を倒したと噂の矢田通の妹。そして晶は、その通が只一人勝てないと言われている大田美津子の弟。

「二人の間に割つて入ろうなんて、死に行くようなものだ」

ある男子生徒の言葉である。

「関係ねえよ」

ここに一人のバカがいた。名前は妻葺三四郎^{つまぎさんしろう}。転校生だ。成績優秀、スポーツ万能。顔もそれなりにイケメンだ。彼は久美子と同じクラス、すなわち大山、そして晶と同じクラスになった。他の女子達は転校生のイケメンにメロメロになっていたが、久美子だけは見向きもしない。それが三四郎のハートに火を点けた。三四郎の久美子を見る眼に危険を感じた大山は、

（あいつ、身の程知らずだ）

と考え、注意する事にした。彼は三四郎を屋上に呼び出した。

「何、大山君？」

他の男子が怖がる大山と一対一になっても動じていない三四郎を見て、

（こいつ、強い）

と大山は思った。しかしそんな事は顔に出さずに、

「矢田久美子さんに近づくな。お前とは釣り合わない」

すると三四郎はニヤツとして、

「おや？ 君が久美子ちゃんの彼氏なのかな？」

「か、彼氏！？」

大山は久美子の事を「久美子ちゃん」と呼んでいいのは、晶と通の親友である竹森信一のみと勝手に決めている。しかも言うに事を欠いて大山を彼氏と言った事も許せない。

「違う。だが、久美子さんはお前なんかと付き合ったりしない。近づくな」

「うぜえよ、デカブツ。少し強いと思って、偉そうにするんじゃない。近えよ」

三四郎の顔つきが変わる。凶悪な目になった。

「俺が誰なのか知らねえようだな！」

三四郎が大山に突進する。大山が身構えた時、三四郎の姿が消えた。

「何？」

大山は辺りを見回すが、三四郎はいない。

「遅いよ！」

三四郎は背後に回っていた。彼の右手には警棒のようなものが握られていた。

「ぐお！」

大山はそれでいきなり首を殴られた。

「うつ……」

彼は呻きながらそのまま前のめりに倒れた。

「俺が誰を好きになるうが関係ねえだろ、ブサイクが！」

三四郎は連続して大山の腹を蹴った。

「グフ……」

大山の口から血が吹き出す。

「俺に対する礼儀をわきまえねえてめえが悪いんだよ！」

三四郎は警棒を振り上げ、大山の頭を殴ろうとした。

「う！」

その三四郎の腕をガシッと止めた者がいた。

「邪魔するな！」

三四郎が鬼の形相でその手を振り払って振り向くと、そこには久美子が立っていた。

「何してるのよ、妻茸君？」

久美子はニコリともせず尋ねる。三四郎は肩を竦めて、

「こいつ、君を襲うつもりだったので、成敗したのさ」

と白々しい嘘を吐いた。そして、

「ちようどいいや。ここでいい事しない、久美子ちゃん？」

今度は嫌らしい顔つきになる三四郎。しかし久美子は動じない。

「嫌よ」

「嫌じゃねえよ！」

すっかりイケメン返上の三四郎は、久美子に襲いかかった。

「は！」

久美子は三四郎の右腕をねじ上げ、そのまま投げた。

「ぐへ！」

屋上のコンクリートの上に叩きつけられ、三四郎は呻いた。

「これは大山君の分！」

久美子の正拳が三四郎の腹に炸裂した。

「ぐえええ！」

三四郎は涎よだれを吐き散らしてもがいた。

「く、久美子さん……」

起き上がりかけた大山は啞然としていた。

「大丈夫、大山君？」

久美子がハンカチを差し出して言う。

「だ、大丈夫です」

大山は袖で血を拭って、久美子のハンカチを受け取らない。

「見られちゃったね、私の秘密」

ペロツと舌を出して言う久美子に大山は赤面して立ち上がる。

「いえ、自分は何も見えていませんから」

そう言って歩き出す。久美子はニツコリして、

「ありがとう、大山君。じゃあ、二人だけの秘密ね」

「は、はい」

二人だけの秘密。そのあまりにも甘酸っぱい響きに気を失いそうな大山である。

「お、俺も見てたからな、この暴力女……」

そこまで言いかけて、久美子の一睨みにブルツた三四郎は、

「な、何も見てません！」

と言い直した。

そして翌日、三四郎は挨拶もしないまま、転校したのだった。

その美少女、一目惚れにつき

私立の名門杉野森学園。幼稚園から大学まである巨大な教育機関だ。

その高等部にその男はいた。矢田通。勉強はできるが嫌い。スポーツも得意だがやる気がない。でも、喧嘩だけはどんな事があっても受けて立つ、生まれつきの喧嘩バカである。

しかし、通の強さは半端ではなく、一部の噂では宇宙人を倒したと言われている。そして付近の暴力団も暴走族も、通の名を聞くだけでビビり、姿を見れば失禁する連中もいるほどだ。その矢田通も幼馴染の大田美津子だけには頭が上がらないと言う噂も同じくらい伝わっていた。美津子最強伝説は健在なのだ。本人は大迷惑らしいが。

東京・神奈川・埼玉南部では、矢田通を知らないその筋の者、ヤンキーは存在しない。しかし、北関東となると、まだ通の名と顔はそれほど知られていなかった。

「やめて下さい。何ですか、貴方達は!？」

G県。時々関東から外されてしまう影の薄い存在だ。その県庁所在地であるM市の駅前で一人の女子高生が不良共に絡まれていた。その容姿の可憐さから、不良共の目的は察しがつく。

「見ての通りの高校生だよ。ねえ、一緒に遊ばない？」

不良共は総勢五名。その中の一人が言った。女子高生は、

「これから友達と映画を見に行くんです」

「だったらそのお友達も一緒にいいよ」

更に欲望丸出しでそいつは言った。すると、

「やあ、お待たせ。さ、行こうか」

と突然別の男子高校生が現れ、その女子高生を連れて行こうとする。女子高生はキョトンとして、

「あ、あの、えっと……」

と懸命にその高校生が誰なのか思い出そうとする。しかし思い出せない。思い出せないのであるが、その高校生がイケメンなのでウツトリしてしまう。

「こらてめえ、何横から割り込みかけてんだよ、ボケが！」

不良の一人がその高校生の肩を掴む。するとその高校生は、

「先約は僕だよ、下品な皆さん。残念でした」

とその手を振り払い、歩き出した。

「待てこら！」

更に不良共が追いかけてようとすると、

「お前らの相手は俺がするよ」

と後ろで声がした。不良共が振り返ると、チビツ子が一人立っている。

「何だ、てめえは？ 痛い目に遭いたいのか、チビ？」

「ああ！？」

そのチビツ子の目がキラツと光る。

女子高生を助けた高校生が目伏せる。

「あーあ、知らないぞ」

次の瞬間、五人の不良達がボコボコにされた。助けられた女子高生も引くくらい。

女子高生を助けた高校生が、

「申し遅れました、僕は竹森信一。東京の杉野森学園高等部の二年生です。で、あっちが同級生の矢田通です」

気がすんだのか、ようやく不良共を解放した通が女子高生を見た。

「怪我はないか？」

「は、はい。ありがとうございました。私、M女子高校一年の沢本瑠璃佳です」

瑠璃佳は少し怯えながら言った。信一はその様子に気づき、

「ごめんね。本当はすぐに逃げるつもりだったんだけど、あいつらがNGワードを言っちゃったから、ややこしくなったんだ」

「NGワード？」

瑠璃佳は首を傾げた。通は何故かムツとして、

「行くぞ、信一。ここにもいなかったから、次だ」

「ああ」

サツサと行ってしまう通に肩を竦めてから、信一は瑠璃佳を見た。
「申し訳ない、瑠璃佳さん。縁があつたらまたお会いしましょう」

「は、はい」

爽やかな笑顔で立ち去る信一と振り返りもしない通をしばらく見送り、瑠璃佳はショッピングモールへと歩き出した。

そして瑠璃佳は帰宅後、すぐにインターネットで杉野森学園を調べた。

「これって、運命的な出会い？」

彼女の目は、輝いていた。

そして数カ月後。

瑠璃佳は父親の仕事の関係で東京に引っ越した。幼い頃に母親を亡くした瑠璃佳は、父親と二人で生活して来た。その父親が東京の本社に栄転が決まり、瑠璃佳と一緒に行くってくれるように言っていたのだ。瑠璃佳は友人達と離れ離れになるのを嫌がり、応じていなかった。だから、ずっと転校を渋っていた瑠璃佳がある日突然、

「転校したい学校が見つかった」

と言い、父親について行く事に同意した時、父親は喜んだが、不審にも思った。

「どうして急に決心がついたんだ？」

「好きな人がその学校にいるの」

「え？」

それはもつと問題だ。父親は密かに溜息を吐いた。しかし、今は

一緒に東京に行く事に同意してくれた事が嬉しかった。

瑠璃佳が転校したのは、当然の事ながら、杉野森学園高等部。成績優秀な彼女は、転入試験では何も問題がなかった。

登校第一日目、彼女は誰よりも早く学園に行き、校門で待っていた。ある人物が来るのを。

「あ！」

瑠璃佳は、連れ立って歩いて来る信一と通の姿を見つけた。

「おはようございます！」

彼女は笑顔全開で二人に駆け寄った。通はキョトンとしたが、信一は覚えていたようだ。

「お久しぶりです、瑠璃佳さん。どうしたんですか？」

「転校して来ました。今日から私、後輩です！」

瑠璃佳は息を弾ませて言った。信一と通は顔を見合わせた。

「そうなんだ。よろしくね」

信一はまた爽やかな笑顔で言った。すると瑠璃佳は通を見て、

「あの、その、えっと、あの時からずっと好きです！付き合ってください！」

と頭を下げたラブレターらしき封筒を差し出した。

「な、何イツ!？」

通は仰天した。信一もビックリしている。そして何より驚いていたのは、後から来てそこだけ聞いてしまった大田美津子であった。

その美少女、意地っ張りにつき

東京都の一角にある私立杉野森学園。幼稚園から大学まであるマンモス校だ。

その高等部でちょっとした異変が起こった。

矢田通。宇宙人も倒したと噂の喧嘩バカである。その彼が、数ヶ月前、北関東にあるG県で、ある少女を助けた。彼女の名は沢本瑠璃佳^{さわもとるりか}。通にしてみれば、多々ある不良達とのバトルの一つに過ぎなかったが、瑠璃佳は違った。生まれて初めて、一見して不利な体格の男子が、五人の不良をあっという間に倒してしまうのを見た。そして、それは「吊り橋効果」も手伝って、瑠璃佳を勘違いさせたのかも知れない。事もあるうに、彼女は通に一目惚れし、父親の転勤を利用して杉野森学園に転入して来たのだ。

高等部がざわついた。矢田通の彼女は大田美津子。いつの間にか出来上がった伝説にも近い設定。通も美津子も、それを全力否定だ。しかし周囲は信じていない。只、通に思いを寄せる女子もそれなりにはいる。彼は女子に乱暴はしないし、下ネタを言ったりする事もない。今絶滅しかかっている「硬派」なのだ。だから人気はある。でも、美津子の存在が、女子達を躊躇させる。美津子は高等部でトップクラスの成績、スポーツも万能、人望も厚い。その上誰もが認める美少女でもある。その美津子が通の彼女だと信じられているので、他の女子達は決して通に告白したりしなかった。自分に勝ち目はないと思っているからだ。

「誤解なんだからね」

美津子は機会があるとそう言っているが、信じる者はいない。その設定を根底から覆したのが、瑠璃佳だった。彼女は転校初日にいきなり通に告白し、手紙まで渡した。女子にはそれなりに優しい通はそれを突き返す事なく、受け取った。悪い事にその一部始終を美

津子が見ているのも知らずに。いや、見ているとわかったら、意地っ張りの通の事だから、嬉しそうにして受け取ったかも知れない。「大変な事になりそう」

それを目撃した生徒達は、身を震わせたと言う。

「ねえ、沢本さん」

同じクラスの委員長が瑠璃佳に声をかけた。

「はい」

瑠璃佳は一刻も早くクラスに馴染みたいので、愛想良く応じた。

「貴女、二年生の矢田さんに告ったんですって？」

「あ、はい。それが何か？」

委員長があまりに深刻な表情なので、瑠璃佳は怪訝に思った。

「貴女は今日転校して来たばかりだから知らないのも仕方ないんだけど、矢田さんには彼女がいるのよ」

「え、そうなんですか？ でも、手紙受け取ってくれたし、何も言われなかったですよ」

委員長は顔を引きつらせた。

「て、手紙も渡したの？」

「ええ。私、口下手なので、言葉でうまく伝えられないから、一生懸命考えたんです」

瑠璃佳はニコニコと言う。委員長は溜息を吐いて、

「今からでも遅くないから、矢田さんの所に行って、謝って来た方が良いわ」

「どうしてですか？」

瑠璃佳には意味がわからない。

「仮に矢田さんに彼女がいたとしても、告白するくらい構わないと思いますけど」

「……」

委員長は呆れてしまったようだ。

「私は忠告したからね。何があっても知らないよ」

彼女はそばにいた友人達と歩いて行ってしまった。

「どういう事なんだろう？」

瑠璃佳にはさっぱり訳がわからなかった。

一方、もう一人の当事者である通は、親友の竹森信一と話していた。

「美津子の奴、今日俺と目が合うと露骨に顔を背けるんだけど、どうしてだ？」

通は呆れるほど鈍感である。信一は肩を竦めて、

「今朝、沢本さんに告白されただろ？ それを美津子さんが見てたんだよ」

「はあ？ 意味がわかんねえぞ」

「全く、鈍感だな、通は」

信一は溜息を吐いた。

「ホントはわかってるんだろ、美津子さんの気持ち？」

「美津子の気持ち？ 何の事だよ？」

通は顔を赤らめて尚も惚けた。

「美津子さんがどうして顔を背けるのか、わかってあげなよ」

「知るか！」

通は美津子を一瞥し、教室を出た。

「ほら、矢田君も気にしているよ」

美津子の親友で信一の彼女である宮田香みやたかおりが囁く。

「何？ 何の事？」

似た者同士である。美津子も意地っ張りなのだ。

「美津子が顔を背けるの、矢田君が気にしているの。美津子もわかっててやってるんでしょ？」

「違うわよ。あいつの顔見ると、気分が悪くなるから、見ないようにしてるだけ」

美津子はそう言うと言席を立った。

「あ、矢田君を追いかけるの？」

香が楽しそうに言う。

「違うわよ！」

美津子はムツとして大股で歩き出す。

「待って、美津子」

香が追いかけた。

「あ」

美津子は階段の踊り場に瑠璃佳が立っているのに気づいた。瑠璃佳は美津子を見上げて会釈した。

「大田美津子さんですね」

瑠璃佳は真正面から美津子を見ている。美津子はギクツとして踊り場まで下りて行き、

「そうだけど……貴女は？」

「私、今日転校して来た一年の沢本瑠璃佳です」

あの時、美津子は瑠璃佳を見たが、瑠璃佳は美津子に気づかなかったのだ。

「大田先輩が、矢田先輩の彼女なんですか？」

瑠璃佳の直球な質問に、美津子は狼狽えた。香も思わず唾を呑み込む。

やや間があってから、

「違うわ。私はあんな奴の彼女じゃない。只の幼馴染」

美津子はそれだけ言つと、

「じゃ」

と階段を駆け下りた。

「では、矢田さんと私が付き合うの、構わないんですね？」

その背中に瑠璃佳が言う。美津子は立ち止まったが振り返らず、
「私には関係ない。お好きにどうぞ」

と言い、駆け去った。

「美津子！」

香は一瞬呆気にとられたが、瑠璃佳に微笑んでから階段を駆け下

り、美津子を追いかけた。

「あっちゃあ。言っちゃったね、美津子さん」
階段の上から見ていた信一が呟いた。

その美少女、積極的につき

杉野森学園高等部。

そこに異変が起こりつつあった。

喧嘩バカの矢田通。通の彼女は幼馴染みの大田美津子。それが高等部の生徒の一致した認識。いや、生徒ばかりでなく、教職員、果ては理事長に至るまでそう思っていた。その「定説」が崩れつつある。一人の転校生によって。

その転校生の名は沢本瑠璃佳^{さわもとるりか}。北関東で一番地味なG県の有名進学校のM女子高校から転入して来た。彼女はほんの偶然から矢田通と顔見知りになった。信じられない事だが、彼女は通に一目惚れした。瑠璃佳は十人の男子がいれば十人が全員「付き合って下さい」と告白するくらい可憐で可愛い美少女だ。それがよりによってどうした事か、通に転校初日、いきなり告白した挙げ句、手紙まで渡したのだ。その最後のシーンだけを見てしまった美津子は、通の顔を見ようとしない。彼女自身、通が手紙を素直に受け取った事がショックだった。口ではどれほど「あんな奴」とか言っているても、美津子は間違いなく通の事が好きなのだ。それだけは包み隠しようもない事実である。

「全く、何て事言っちゃうのよ、美津子ってば」

親友の宮田香が呆れて言った。美津子は階段の踊り場で顔を合わせた瑠璃佳に、

「大田先輩が、矢田先輩の彼女なんですか？」

と尋ねられ、

「違うわ。私はあんな奴の彼女じゃない。只の幼馴染」

と言ってしまった。その上、瑠璃佳の、

「では、矢田さんと私が付き合うの、構わないんですよね？」

という更なる質問にまで、

「私には関係ない。お好きにどうぞ」
と言つてのけた。それを聞いていた香はあまりに強情な美津子に驚いてしまった。

翌日の下校時の事。

「知らないぞ、矢田君盗られても」

香が脅かすように言つても、

「盗られるも何も、別にあいつは私の彼でも何でもないし」

美津子は全く取り合わない。香はニヤツとして、

「な」るほど。自信があるのね」

「何が？」

美津子は親友の嫌らしい笑みに気づき、ムツとする。

「あんな小娘になびくような通じやないわつて思つてる」

「何言つてんのよ！ 妄想が激し過ぎるわよ、香」

美津子はプイと顔を背けて歩き出す。

「じゃあさ、この学園一の美少女の私を捨てて、転校生に鞍替えしたりしないわつて思つてる」

「あんだね！」

靴を下駄箱から出しながら、美津子は香りを睨みつけた。香は笑つて、

「心配ないわよ、美津子。矢田君は何を言つていても、貴女の事が好きなんだから。大丈夫」

「別にあいつに好かれたくなんかない」

美津子は靴を履き、玄関をスタスタと出て行く。香も慌てて靴を履き替えて追おうとするが、

「待つてカオリン」

と信一に呼び止められた。香は信一を見上げて、

「信ちゃん、いいの、放つておいて？」

「今は何を言つても反発するだけだよ。もう少し冷却期間を置かないと」

信一は歩き去って行く美津子を見て言った。

「そうかなあ」

香は不満そうに腕組みした。

矢田通に告白した転校生の話は、中等部にまで伝わっていた。

通の舎弟を自認する大山大は、おやまろし驚愕していた。

「大丈夫なのか、その転校生？　あね姐さんにボコられたりしないだろうか？」

彼は妙な心配をしていた。「姐さん」とは美津子の事である。

当然の事ながら、通の妹の久美子も、その話を耳にしていた。

「変わった人もいるものね」

彼女は嬉しそうに笑った。美津子以外を好きになったりするはずがないとわかつているだけに、その転校生に対する兄の反応が見てみたいと思ったのだ。

「姉さん、大丈夫かなあ。ああ見えて、実はガラスのハートなんだよね」

美津子の弟で、久美子のボーイフレンドの晶が呟く。

「そうなの？」

久美子は意外そうな顔で晶を見た。

「でも、心配無用よ。お兄ちゃん、美津子さん一筋だから。それは妹の私が保証するわ」

久美子はニコツとして晶を見た。晶はその笑顔に赤面し、

「そ、そうなんだ」

と応じた。

そして、その矢田通。彼は下校時に瑠璃佳の待ち伏せに遭い、一緒に帰っていた。

「ご迷惑でしたか、私の手紙？」

瑠璃佳は通の半歩後ろを歩いている。通は前を向いたままで、「迷惑じゃないけど。どうして俺なんだよ？」

「かつこいいからです」

瑠璃佳はニコニコして言う。通は苦笑いして、

「生まれてこのかた、かつこいいなんて言われた事ないぞ」

「大田先輩にもですか？」

瑠璃佳はニツとして尋ねた。通はピクツとしたが、

「あいつは関係ねえよ」

「そうですか」

瑠璃佳はますます嬉しそうだ。

「手紙、読んでくれました？」

「ああ」

通はあくまでぶっ切ら棒だ。瑠璃佳は顔を赤らめて、

「お返事は？」

と言った。通は立ち止まって瑠璃佳を見ると、

「沢本さんとは付き合えない」

「えっ？」

そんなストレートに断られると思っていなかった瑠璃佳はビックリした。

「やっぱり大田先輩が彼女なんですか？」

「違うよ。そうじゃない。君は昨日転校して来たばかりだろう？」

それをいきなり付き合って下さいって、いくら何でも非常識じゃないか？」

通の口から出ているとは思えないくらい当たり前の言葉だ。実は信一が考えてくれたのだ。

「そうですね」

瑠璃佳は悲しそうな顔をした。通はピクツとした。彼は女の子の涙に弱い。泣かれるとどうしていいかわからなくなってしまう。

（泣くなよ、絶対。話がややこしくなるから……）

通は心の中で祈った。

「わかりました。そうですね。矢田先輩の仰る通りです。私が軽率でした」

瑠璃佳は深々と頭を下げた。そして、

「では、お友達になって下さい。まずはそこから始めたいと思います」

「……」

全然メゲていない……。通は啞然としてしまった。

「ありがとうございます」

瑠璃佳は笑顔で手を振りながら、走り去った。

「解決してないよな……」

通はガツクリと項垂れた。

その美少女、危機一髪につき

杉野森学園高等部は、あの矢田通に告白した転校生の話で持ち切りだった。

その転校生の名は、沢本瑠璃佳^{さわもとるりか}。高等部一年。かなりの美少女である。クラスメートはおるか、全学年の男子生徒が溜息を吐いた。「どうしてなんだよ」

通は確かに女子には人気はあるがモテはしない、というのが「定説」だった。それを覆したのが転校生で、しかも美少女となると、彼らは「定説」を変更しなくてはならないと思っていた。

そして、翌日。

「おはよう、美津子」

通学路で落ち合った香が声をかける。

「おはよう、香」

美津子はごく普通に応じた。しかし香はニヤツとして、

「今日はご機嫌ね、美津子」

美津子は親友のその途方もない切り出しにキョトンとして、

「どういう意味よ？」

「矢田君、転校生の告白を断わったんでしょ？ 信ちゃんから聞いたわ」

美津子はビクツとした。その話は全然知らなかったのだ。香は美津子の様子に気づき、

「あ、もしかして、何も知らなかった？」

と決まりが悪そうに尋ねる。すると美津子はムツとして、

「知りたくもないわ！」

プイツと顔を背け、彼女は大腿で歩き出す。

「美津子、女の子がそんな歩き方したらダメだよ」

香が追いかけながら言う。しかし美津子は、

「大きなお世話！」

と更に大股で歩いた。そして、前方を歩いている通に気づいた。

「あ……」

通は瑠璃佳と並んで歩いていた。美津子はますますヒートアップした。

「失礼」

彼女はわざと通の肩にぶつかって二人を追いかけた。

「いてえな、美津子！ 何するんだよ！？」

意味がわからない通が怒鳴るが、美津子は完全無視を決め込み、スタスタ行ってしまった。

「美津子、待って！」

香は通を睨みつけてから、美津子をまた追いかけた。

「何なんだよ、あいつら？」

通がぼやくと、瑠璃佳が、

「私のせいですか？ 私が矢田先輩と歩いているから、大田先輩が怒って……」

「関係ねえよ。あの女、昔から癪癪持ちなんだ。気にするなっ」
通は瑠璃佳に言うが、彼女を見ない。瑠璃佳は通を待ち伏せしてここまで一緒に歩いて来たのだが、彼が一度も自分の顔を見てくれないのに気づいていた。

「あの」

「何だ？」

やはり通は瑠璃佳を見ない。

「矢田先輩、私の事、嫌いなんですか？」

「な、何でだよ！？」

やっと通は瑠璃佳を見た。瑠璃佳は悲しそうな顔で、

「だって、さつきから全然私の顔を見てくれないから」

「あ、いや、女の子の顔をジロジロ見るなって、死んだ親父によく言われたからさ」

通はバツが悪そうに言った。それは嘘だ。本当は、瑠璃佳を至近距離で見るのが恥ずかしいのだ。

「そうなんですか」

瑠璃佳は少しだけ元気になったようだ。

「優しいんですね、先輩」

「そうかあ。そんな事ないと思うぞ」

二人の姿を見た高等部の生徒達は、

「矢田通が大田美津子から転校生に乗り換えた」

と勝手に解釈し、その噂は瞬く間に広がって行った。杉野森学園の外にまで。

そしてその噂を聞きつけてほくそ笑んだ奴がいた。石動允。いすのまこと 杉野森学園とはライバル校関係にある大東苑学院だいてんえんがくいんの生徒だ。

允は以前、通の妹の久美子を拉致して通を潰す作戦を実行したが、久美子の思わぬ強さに返り討ちとなった。その怨みを晴らす時が来たと思ったのだ。

「今度こそ、あいつの弱点を利用して、潰してやる」

允は狂気めいた顔で笑った。

竹森信一は、教室で通と美津子の間に漂う不穏な空気を感じていた。

「何があつたんだ、通？」

信一が小声で尋ねる。通は、

「訳がわかんねえんだよ。あの女、朝から機嫌が悪くてさ」

「ホントか？」

「ホントだよ！」

信一は通の「事情聴取」を諦め、香に近づいた。

「何があつたのさ、あの二人？」

「それがね……」

香から理由を聞いた信一は呆れてしまった。

「何のために断わり方を教えたのかわからないな」

信一は香に礼を言つて、もう一度通に近づいた。

「通、あの子にきちんと教えた通りに言つたのか？」

「言つたよ。そしたらさ、友達からつて言われてさ。そこまでお前に教わつてなかったし……」

信一は項垂れた。

「小学生か、お前は……」

「うるせえよ！　しょうがねえだろ、成り行きでそうなつちまつたんだからさ！」

通が開き直る。

「大体、俺が誰と歩こうが、あいつには関係ないだろ」

通はわざと美津子に聞こえるように言つた。美津子がピクンとする。

「美津子」

香が止める間もなく、美津子は通の前に行つてしまった。教室の一同がザワツとする。

「ええ、そうですね。私が悪かったです、矢田通さん。今後一切貴方とはお話しないようにしますので、それでご了承下さい」

美津子は笑顔でそう言つと、ツンと顔を背け、自分の席に戻つた。「上等だ！　こつちもお前と話さなくていいのなら、せいせいするぜ」

通も一歩も引かない。信一と香は顔を見合せて溜息を吐いた。

「……」

さすがに通のその言葉は美津子にはダメージが大きかった。彼女は必死になつて涙を堪えていた。

「矢田君、今の言い過ぎよ！」

香が大声で言つたので、通はビクリしたようだ。

「香、何だよ、お前まで……」

「私も矢田君とは口利かないから！」

香もプイと顔を背け、席に戻つた。通は信一を見上げた。すると

信一も、

「今回は全面的にお前が悪い。僕もしばらく距離をおかせてもらおうよ」

通はその言葉に啞然としたが、

「ああ、そうかい！」

と言うと、ムスツとして腕組みをした。

そして放課後。

瑠璃佳は、朝の事が気になったので、通に声をかけるのをやめて、その日はクラスメートと下校した。

「あ」

瑠璃佳達が大通りから細い脇道に入った時だ。その道を塞ぐように大東苑学院の柄の悪そうな連中が五人、並んでいた。

「沢本瑠璃佳ちゃんだな？」

石動允が進み出て尋ねる。瑠璃佳達はギョツとして後退りしたが、他の連中がすばやく回りこみ、囲まれてしまった。

「おめえらには用はねえ。消えろ」

允は瑠璃佳以外の女子生徒を追い払った。彼女達は真っ青になつて走り出した。

「何なんですか、貴方達は？」

瑠璃佳は震えながら言った。允はニヤリとして、
「矢田通をぶつ飛ばす会の会員だよ」

と言った。その言葉に瑠璃佳は目を見張った。

その男、本当に手加減なしにつき

沢本瑠璃佳さわもと るりかが、大東苑学院の石動允いずるまことに捕まった。

その情報はすぐに杉野森学園高等部にもたらされた。瑠璃佳と下校していた女子生徒が蒼ざめた顔で高等部まで戻ったのだ。

「……」

その話を聞き、胸中複雑な思いの大田美津子。その親友の心がわかり、何も声をかけられない宮田香。

「とにかく、そこまで案内して下さい」

竹森信一が女子生徒に言った。女子生徒はそこに戻るのが怖かったが、信一が同行してくれるのなら安心だし、嬉しいと思い、現場に向かった。

その瑠璃佳の思い人である矢田通おおやま うちは、間が悪い事に中等部の舎弟である大山大と中等部の校門脇で話していた。

「何心配してるんだよ。別に俺はそんなつもりはねえよ」

通は鬱陶しそうに言った。大山が瑠璃佳との事を聞き、命がけで通に忠言したのだ。

「ですが、矢田さん、姐あねさんは随分と荒れ模様だとか」

姐さんとは美津子の事だ。大山は再三、「姐さんて呼ばないで」と美津子に言われているのだが、他の呼び方を思いつけないので、美津子以外に話す時にはまだ「姐さん」を使っている。美津子とは直接話さないようにしているのだ。

「誰に聞いたんだよ、そんな事？」

「晶さんです」

晶は美津子の弟。「姐さん」の弟さんだから、呼び捨てでも、君付けでもなく、「晶さん」である。大山の前世は犬か狼かも知れない。

「あいつはいつも機嫌悪いじゃねえかよ」

「それはお兄ちゃんが悪いんでしょ！」

そこへいきなり、通の妹にして、中等部のアイドルでもある久美子が現れた。その後ろには、ボーイフレンドの晶が、まるで従者のように付き従っている。

「他人聞ひとききが悪い事言っいなよ、久美子」

通が剥むれて言う。久美子は大山にニコツと微笑んでから、

「本当の事でしょ！」

と兄を容赦なく睨にらむ。この世で通にこんな態度を取って無事ですむのは、美津子と久美子だけだろう。

「うるせえな」

通は久美子と口喧嘩をしても勝ち目がないのでサッサと逃げる準備だ。すると久美子が、

「それより、高等部が大騒ぎよ。何も聞いてないの、お兄ちゃん？」

「大騒ぎ？ 何があつたんだ？」

通が嬉しそうに尋ねる。久美子は呆れた顔で、

「昨日転校して来た人が、大東苑学院の連中に連れて行かれたんですって」

「何！？」

通は驚いた。大山もだ。大東苑学院と言えば、つい先日、久美子を拉致しようとした連中と同じだ。

「あの子が連れて行かれたのか？」

通は慌わてていた。

（畜生、俺のせいであの子を……）

「そうよ。お兄ちゃんに、転校初日にラブレターを渡した人。沢本瑠璃佳さんよ」

久美子の言葉が終わらないうちに、通は走り出していた。

「あいつら！」

美津子や香が自分に連絡してくれないのは仕方がない。だが、信一までもが黙っているのは、さすがに面白くない。通は高等部へと

走った。

「矢田さん」

大山が追いかけるが、通は尋常ではない肉体なので、追いつく事などできない。彼の姿はたちまち見えなくなった。

「お兄ちゃん、本気で乗り換えるつもりかしら？」

久美子がそう呟くと、晶が、

「それだけは困るよ。只でさえ、姉さん、機嫌が悪いんだから。家に帰るのが怖くて」

「だったら、しばらくウチで寝泊りすれば、晶君？」

久美子が何気なくそう言ったので、晶は仰天してしまった。

信一は女子生徒の案内で現場に着いていた。そこには、允の舎弟が一人残っていた。

「矢田通にこれを渡せ」

そいつは信一に紙切れを渡すと、サッサと走り去った。

「ありがとう。気をつけて帰ってね」

信一の笑顔に顔を赤らめながら、女子生徒は帰って行った。

「あいつら、バカの一つ覚えか？」

信一はその紙に書かれた文字を見て呟いた。

「女を返して欲しければ、鉄橋脇の河川敷まで来い」

信一は通に知らせるつもりはない。自分で全部ケリをつけ、瑠璃佳にきっぱり言うつもりなのだ。通の事は諦めてくれと。

（美津子さんと通が不仲なのは、僕もカオリンも嫌なんだ）

信一が通に連絡しなかったのは、そういう思いからである。

しかし、信一のそんな思いは無駄になった。通は天性の勘から、大東苑学院の連中がどこにいるのか読んでいた。彼は信一よりも早く、夕日に染まる河川敷に着いた。

「ほお、王子様の到着だぜ、お姫様」

允がおどけた調子で舎弟に押さえつけさせている瑠璃佳に言った。
「矢田さん、ダメです。来ちゃダメ！」

瑠璃佳は涙声で叫んだ。しかし激昂している通には、そんな言葉は届かない。

（よし、そのまま真っ直ぐ来い。深さ三メートルもある落とし穴だ。上から石のシャワーを浴びせてやるよ）

允の顔が歪む。嬉しくて仕方がないようだ。

「てめえ、どこのどいつだ！？ 堂々と俺に喧嘩売って来いや！」

通は猛スピードで允達のところに走った。

「え？」

允は仰天した。通は確かに落とし穴の上を通過したのだが、速過ぎで落ちなかったのだ。

「おらああ！」

通は雄叫びを上げ、まずは允を川のはるか彼方まで吹っ飛ばした。歯の根も合わないほど震えている残りの連中は、あっという間に同じく川に沈んだ。

「てめえら、顔覚えてぞ！ 今度見かけたら、前歯全部なくなると
思え！」

通が怒鳴ると、顔を出していた連中が一齐に水中に潜った。

「大丈夫だったか？」

通が瑠璃佳に声をかけると、

「怖かったあ！」

と彼女はそのまま通に抱きついた。

「わわ！」

通は夕日より赤くなった。

「悪かったな、沢本さん。俺のせいで、酷い目に遭っちまってさ」

通は何とか瑠璃佳を押し返して言った。瑠璃佳は涙を拭いながら、

「そんな事、全然気にしてませんから……。それより、来てくれて、
本当に嬉しい……」

言葉にならないほど、瑠璃佳は感動し、泣いた。

「帰ろうか」

「はい」

通は上着を瑠璃佳にかけてあげた。瑠璃佳はまだ泣いていたが、それでもしっかりと足取りで歩き出す。

「……？」

そこへ信一が到着し、啞然としていた。

「信一、後で話がある」

通はムツとした顔で言い、瑠璃佳を庇うようにして河川敷を去った。

「ふう」

信一は思わず溜息を吐いた。

（まだ続くのか、この危険な状態……）

先が思いやられ、信一は項垂れてしまった。

その美少女、ガラスのハートにつき

大田美津子は自分が素直でないために、沢本瑠璃佳さわもとるりかが不良共に連れ去られ、拳げ句に矢田通が助けに行く事になったのを知り、酷く落ち込んでいた。

「美津子、貴女のせいじゃないから。そんなに落ち込まないの」

親友の宮田香の言葉も、美津子のショックを和らげる事はできなかった。

「私、どうすればいいのかな？」

美津子は遠くの商店街の明かりをボンヤリと見ながら呟く。香は自分に問いかけられたのかどうかわからなかったが、

「沢本さんに謝る必要はないと思う。但し、はつきりさせないといけない事がある」

美津子はキョトンとして香をみた。香は美津子をジッと見て、

「矢田君は美津子の彼氏なんだっていう事よ」

「なっ！」

美津子は真つ赤になった。普段なら怒り出す彼女が赤面したという事は、精神的に参っている証拠だ。以前も宇宙人に連れ去られて酷い目に遭った時、美津子はとても素直になったのだ。

「あ、あいつは私の事なんか、うるさい女くらいにしか思っていないわよ」

美津子は火照る顔を背けて強がり言う。

「そんな風に思っていたら、命懸けで何だかわからない所にまで貴女を助けに行かないわよ、美津子。もう少し素直になりなさいよ」

美津子は香に言われて、その当時の事を思い出した。

（あんな状況で、あいつは私を助けに来てくれた。それなのに私は

……）

いつだってそうだった事を思い出す。

二人がまだ小学校に通っていた時。

美津子は高学年の男子にかまれて困っていた。それに気づいた通が、身体が大きさが全然違うのに飛びかかって行ったのだ。

「何すんだよ、チビ！」

通は相手に一方的に組み伏せられてしまった。結局通は美津子を助けられず、美津子は騒ぎに気づいた先生に助けられたのだ。

「俺、強くなる。強くなって、美っちゃんを守るから」

涙をグツと我慢しながら、通が言った。美津子は幼心に、

「通ちゃんのお嫁さんになりたい」

と思ったのだった。

そして通は強くなった。いや、強くなり過ぎた。彼とともに戦って勝てる相手は東京近郊には存在しなくなった。そして彼はある事故をぎっかけに桁外れに強くなった。

「小さい頃は、もっと素直だったのにな……」

美津子は自嘲気味に言った。香はそれを聞いて、

「それはみんなそう。いつの間にか、いろんな事を考えるようになって、素直な心を忘れてしまうものよ」

「偉そうに」

美津子はやつと笑顔を取り戻して言い返す。

「良かった、美津子が笑ってくれて」

香も微笑む。美津子は涙ぐんで、

「ありがとう、香」

一方、通と信一は、公園のジャングルジムの上に並んで座っていた。

「どうして俺に黙ってたんだよ？」

いきなり通が切り出した。信一はそこから見え始めた夜景を見たままで、

「全部僕が片を付けるつもりだった。ワル達も、沢本さんの事もね」

「フーン」

通はそう答えると、ニヤツとした。

「今度からはそういうのなしたぞ、信一。俺の事は俺が片を付けるからな」

「わかったよ」

信一は肩を竦めて応じた。

「で、沢本さんはどうしたの？」

「家に送ったよ。寄って行ってくれて、言われたけど、彼女、父親と二人暮らしらしくてさ。女の子が一人でいる家には上がれないからって、帰って来た」

「お前らしいな」

信一がクスクス笑った。

「うるせえよ」

通はプイと顔を背ける。その時信一の携帯が鳴り出した。

「はい」

信一はジャングルジムから飛び降りて携帯に出た。

「うん、わかった」

それだけ言うと、信一は通を見上げて、

「帰るか？」

「ああ。久美子が心配してるな、多分」

通もジャングルジムから飛び降りる。

「いろいろな意味でね」

信一が戯けて言うと、通はまたムツとした。

「お前、一言多いんだよ」

それでも二人は顔を見合わせて笑った。

美津子と香も家路に着いていた。

「遅くなっちゃったね、美津子」

「そうだね。ごめん、香、変な事に付き合わせちゃって」

美津子が手を合わせて謝ると、

「何よ、他人行儀な。親友なら、これくらい当たり前でしょ？」

「香……」

美津子はまた涙ぐむ。

「あ、いけない」

「えっ？」

香は突然走り出した。

「ごめん、美津子、今日大事な用事があるのを忘れてた。先に帰るね」

「ちよつと、香！」

親友じゃなかったの？ そう愚痴りたくなる美津子だった。

「勝手なんだから」

追いかけようと思ったが、やめた。美津子はそのまゆつくり歩いて家に向かった。

通と信一も話しながら歩いていったのだが、

「いけない、今日大事な約束があるのを忘れてた！　じゃ」

といきなり信一が走り去ってしまった。

「あいつ、ホントに忙しない奴だな。香以外に女がいるんじゃないのか？」

通は妙な疑惑を持った。そんな事は絶対にないのが信一と香なのだが。

「全くよオ」

通は仕方なく一人で歩き出す。そして家まであともう少しという路地の角を曲がろうとした時、反対側から歩いて来る美津子に気づいた。美津子も通に気づいたようだ。

「……」

お互い、何となく気まずいのだが、逃げる事はしない。それでもそのままにいるのを我慢できなくなった通が歩き出し、角を曲がった。

「待って、通」

美津子が呼びかけ、彼に駆け寄った。通は立ち止まった。

（信一の奴、香とはめやがったな）

通は二人の策略に気づいた。

「ごめん、通。私が変な意地を張ったせいで、沢本さんが大変な目に遭って……。ごめん」

通は仰天していた。美津子がそんなに素直に謝ったのを見るのは、生まれて初めてだったのだ。だから、それに対してどういう反応をすればいいのか、すぐには思いつけない。

「昔は私達、こんなじゃなかったのにね。もっとお互いに素直だったのに。いつからこんな関係になっちゃったのか……」

美津子は泣いていた。それを見て通はパニックになりかけた。

「お、おい、泣くなよ、美津子。俺、どうしていいかわからなくなりそうだよ」

「だって……」

それでも泣き続ける美津子。通は困り果てた。対応を考えあぐねていると、美津子が動いた。

「通……」

彼女は通に抱きついて来た。

「わわっ！」

身長は美津子の方が大きいので、傍目には姉が弟を慰めているように見える。

「うっ」

身長差のせいで通の顔は美津子の胸に埋もれていた。

（し、死ぬ……）

通はいつ気絶するかわからない程緊張していた。

「私、もう意地張らないから。だから……」

美津子が更にギュッと抱きついて来る。

そして通は気絶してしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0596f/>

TORU 史上最強の悪ガキ

2010年12月6日14時40分発行